

(語釋)
 (一)此下に「懼りさふらふ」などの詞を著きたり
 (二)經濟は不相變なるを
 (三)「頃」は不如意なり
 (四)「仲言」はせらるまじと申ひて
 (五)千薩。以下千薩との關係を自分の都合よき様に言ひなす也
 (六)自分が
 (七)千薩が
 (八)「自分は據所なく千薩の終に應じたりしを」
 (九)「或は懸想する心」
 (一〇)「路」に「かけては」
 (一一)「誰」に「一條北方」
 (一二)「千薩」に
 (一三)「猶しき母子の中を」
 (一四)「猶しきこと聞えむ」とは「嬉しき事」に思ひ聞けん
 (一五)「あるを」あるものど
 (一六)「とかく」ときき
 (一七)「するを」あまじきこと思こそするに思こそ
 (一八)「いますからずば」

き事かな。古の御勢のやうにもおはしまさざるをなむ。今も同じごと御徳はおとり給はざるを、などかは然はものし給はざらむ」北の方、「思ふ様にもあらずや」など言ひて、一條「いさよかなる事、謀り聞えんとてぞや。人には宣はじとてなむ」祐宗、「仰せごとは、何かは否び聞えん」北の方、「嬉しきこと。聞えむ事は、このものし給ふ人は、われ歳も老いぬ、今更に人に見え奉らじ、と思ひしを、一人あるを、徒然と、物心細けに思ひたりしかばなむ、とかくものするを、あさましきこと、忠こそその、如何なる事かありけむ、あさましき心つきて、夜晝言へど、見知らぬやうにて侍れば、思ひ狂ひて、大方は父大殿のいますかればぞ、斯くあなづり給ふ。いますからずば、何かつよまむ。この道には親子なきものなより。この大殿帝かたづけ奉らむ、と奏して、流させ奉りて、つよむことなくて責め言はん」となん言ひたばかるなる。これなむ己が身に苦しき事なる。「かよる事なむある」と、彼處に語らむと思へど、かよる習を、昔より、腹きたなきものに人の

(語釋)
 (一)「言ひ出し得ぬ」
 (二)千薩に
 (三)非難すべき所なき
 (四)「見給へれ歟」
 (五)帝が
 (六)大帝の御寵愛あるが當然の様に出来て居る
 (七)「素性」知れず。後に兼雅の妾となる。此處の意は忠こそは御局にも召使はれ梅壺も忠こそをよく知り居らるる故梅壺が一切の事を帝に告ぐるならんとするべし
 (八)「譏言」の様子を梅壺が知りて
 (九)「思こそが」
 (一〇)千薩に
 (一一)以下忠こそが帝に奏したる詞としてしよ
 (一二)通じ

言へば、あぢきなくてなむ、えものせぬ。君やは、忠こそが帝に斯く奏したるやうに告げ給はぬ」祐宗、「いと易き事なり。かく怪しき人の、いかで時めき給ふらむ。なほ見給ふには、こともなき人とこそ見給つれ。萬の事、忠こそその奏するままになむ。忠こそならぬ人、上になきものになむ思したる。けに、思ほす事いと理なりや。宮仕をし給ふこと、御前片時去らず。思されぬべくこそはものし給ふめれ。内裏の御局に、忠こそ召使ひ給はぬやうなし。梅壺の御息所、えかくし給はざめり。これを見給ふればこそ、いと恐ろしけれ。この御息所は、たゞ今の時の人なり。氣色を御覽じてなほ候はせ給ふになむ恐ろしき」北の方「これを聞き給ふに、人にもかく思されけりと思ふに、ねたき事限なし。かくて祐宗に宣ふ、一條「親に宣はむ様は、おのが親の上を、かく申すまじけれど、罪ある時は、命をも取らるよものなればなむ、かよる事の由を奏するなる。父の大臣なむ、忍びて后宮にさふらひ給ひけるを、斯うて心よからず、帝かたづけ奉らむ、と騒ぎ侍

〔語釋〕
(一)千蔭の罪あらはれん時忠こそ罪を及ぼし給ふな

(二)以下帝の詞を作りて言ふ也

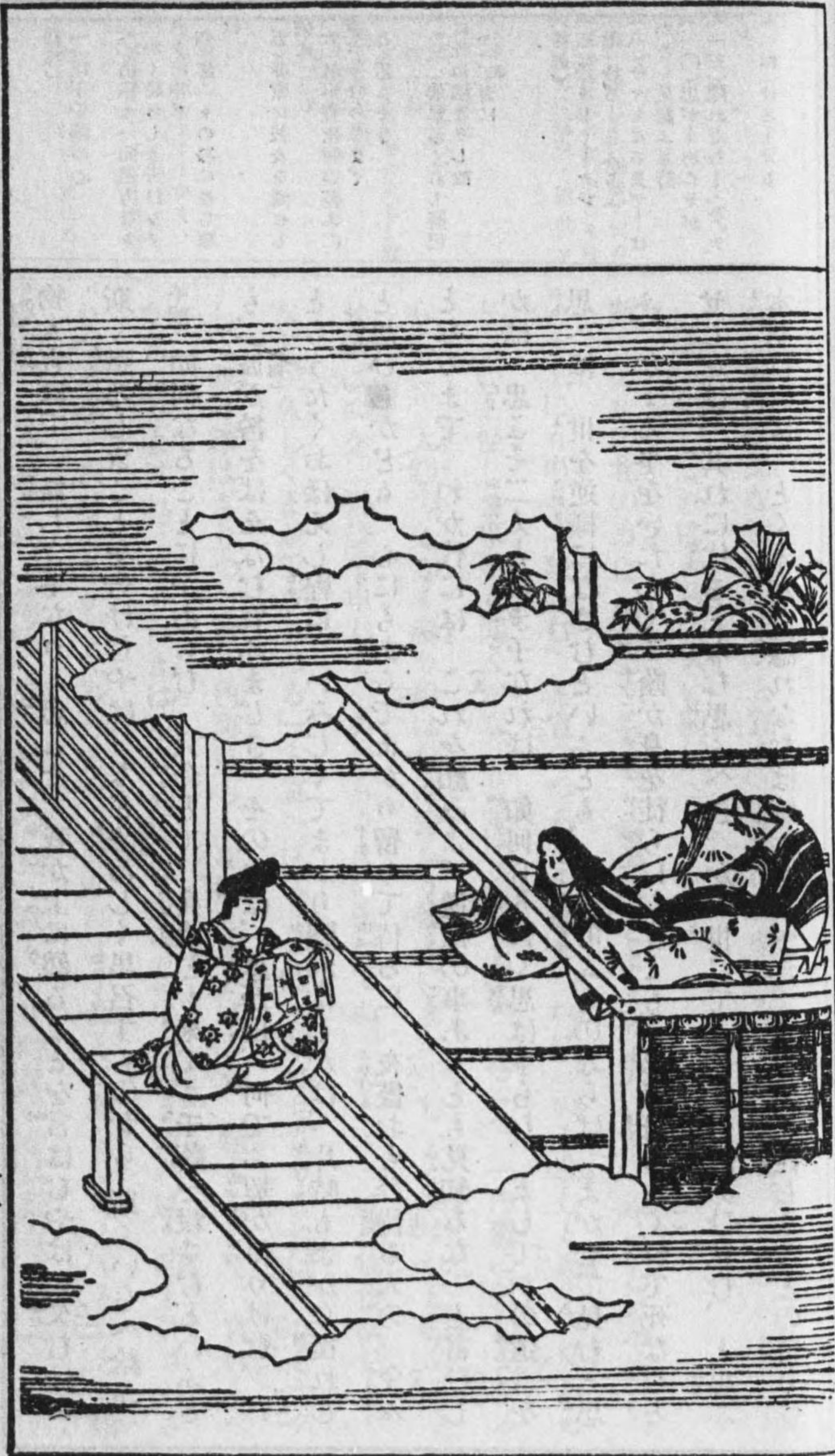
(三)朝服なるべし

(四)前日一條北方に含められし計

〔考異〕
(五)傍なる一傍の

るめる、然あらむ時、忠こそを尋ねらるまじきものなり、大臣も心はつかふものなりけり、忠こそまろが制に従ふべくもあらねばなむ、忍びて奏する、と申ししかばなむ、上、そは怪しきことにもあるかな、定かなる事にあり、何を飽かずとてか、公にも、悪き心を思ふべき、おほくの序を越してこそ、大臣の位にはなしつれ、然思ふものならば、伊豆の島にこそつかはすべかなれ、とこそ仰せられしか。人間かず、祐宗一人なむ承りし」とを告げ給へ」祐宗、「承りぬ。いと易き事なり。いとよくとり申さむ」と言ふ。北の方、てうふくなどいと清らに調じて、妻の料などもいと清らにて取らせつ。

これを祐宗得て、後に身のならむ様も知らで、千蔭の大殿にまゐり、祐宗「切なること申さむ」と言ふ。おとど逢ひ給へり。一日のたばかりごと、祐宗「斯うくの事ありとは知ろしめしたるや。愛子の御上を、かくとり申すはたいぐしけれど、承るに、傍なる物かけ落つる心地すれば、斯くとり申すなり」おとどとばかり



(語釋)
 (一)以下千蔭の心
 (二)祐宗も一向逆方なきに
 (三)かく恐ろしき告口をす
 (四)忠こそその咎なる事
 (五)非常に彼女を愛せし
 (六)我が晝夜戀ひ慕ふに
 (七)妻が今はの際まで
 (八)忠こそを
 (九)妻にちくれし時已に
 (一〇)死ぬ積なりし故
 (一一)妻に
 (一二)妻に
 (一三)考異
 (一四)恐ろしく一ナシ
 (一五)侍る一さふらふ
 (一六)今々となるまで一は
 (一七)なく見給ふ時
 (一八)忠が一忠こそが
 (一九)隠れなむ一「なナ
 (二〇)ける一けり

物も宣はで、怪しき事なり、忠こそ、我が上に然ることを言はむやは、又むけに
 斯く恐ろしきことを告げむやは、など恐ろしく思召すものから、斯くいらへ給ふ、
 千蔭「如何なることにかあらむ、只今とて、兵士ども来て、千蔭を殺さむといふと
 も、彼が咎をばえなむ宣ふまじき。その由は、忠が母、何でふ契か侍りけむ、
 とらうたくおほえし程に、いみじくてまかり隠れにしかば、片時もまかり後れじ
 と思ひしかども、心にもあらでまかり留りて侍るに、夜晝おもひ侍る人の、今々
 となるまで、「わが代には、これを顧みよ。逆様の事ありとも見知るな」と言ひし
 かば、忠こそ一人となき子なれば、如何らうたく思はざらむ、ましてかの遺言を
 思へば、世を逆様になさむといふとも、心に叶ふものならば、まかせて見むと思
 ふ。かゝる事をいたして千蔭が身を徒らになすとも、忠が母におくれて死なむと
 せしかば、其れに代るとなむ思ふべき。かの世にても、今一度あひ見む、と思ふ
 本意侍れば、とくまかり隠れなむは嬉しがるべき。さてく怪しきことの侍りけ
 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一) (一二) (一三) (一四)

忠こそその謂省、父の
 不興、托鉢の僧、忠こそ托
 鉢の僧に随ひて通世す
 (語釋)
 (一)千蔭が
 (二)一條北方が
 (三)千蔭
 (四)父上はなぜ久しく參
 内せられぬぞ
 (五)父が
 (六)亡妻
 (考異)
 (一)ちとよく一かく
 (二)さふらふに一さふら
 (三)給はねば一給はぬは
 (四)ど

る、告げ給ふなむ嬉しき」と宣ふ。祐宗何の榮もなくて歸りぬ。
 斯くてかの北の方に祐宗まうでて、祐宗「いとよく聞えつれば、今殺しにやらむ。
 いま上にも申して殺さむ」と宣ひつる」と聞えつれば、いと嬉しと思す。父おと
 ど、いと怪しき事をも聞かかな、と思はし煩らふに、忠こそ、「内裏に久しくさふ
 らふに、大殿の久しく参り給はねば戀しう侍るにまかでむ」と奏すれど暇ゆるさ
 せ給はぬを、強ひて申して、あからさまにまかでぬ。おとど、千蔭物食はせよ。
 などか久しくまかでざりつる」と宣へば、忠こそ「暇も賜はせざりつれば。などか久
 しく参り給はざりつらむ。内裏にも、おはしまさばこそ、頼もしくて、官仕もつ
 かまつりよけれ。参りたまはねば、知らぬ心地して、心細う侍れば、暇も許されざ
 りつるを、強ひてまかでたりつる」と聞ゆれば、おとど涙をほろくとおとし給
 ひて、千蔭あはれ。然ば、然や思ひつる、我も、片時見ぬをば然なん思ふ。故君
 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一) (一二) (一三) (一四) (一五) (一六) (一七) (一八) (一九)

忠
こ
そ

- (語釋)
- (一)何時迄も其方を寵愛する事は出来さうもなし
- (二)以下思こそその心
- (六)父が
- (一)以下思こそその心
- (考異)
- (一)元思ひ「え」ナン
- (四)百の「とも」
- (五)答には「答とは
- (七)給へる「給ひつる
- (八)給はぬは「給はねば
- (九)思す「思はず
- (一〇)思す「思はず
- (一一)給はねば「給はぬ
- (一三)見つは「見れば

の遺言なれば、忠世に出で来て後、いさよかなる事を知らずなむあるを、されど、我を相思はぬやうに聞ゆれば、え思ひ果つまじくなむある」と宣へば、忠こそ、「怪しうも宜ふかな。何事か侍るらむ」と聞えて、涙をほろく」とこほして立ちぬ。曹司にこもり臥して思ふ、こよらの年頃、天を逆様になすとも、百の兵士して親を射るとも、汝が答にはとがめじ、と言ひわたり給へるを、御爲にいさよかなる過も仕らず、塵ばかりの氣色も見ぬを、如何におもき罪ありと聞召してかく宣ふらむと、恐ろしく恥かしく、思ひ焦れ臥せり。されど、大殿は、忠こそ「見え給はぬは、内裏へこそ参りつらめと思す、内裏には里にこそ在らめと思す。」忠こそ、更におとどに見え奉らじ、山林に入りなむ、親の片時見え給はねば、心細くかなしくこそ覺ゆるに、許されぬ御氣色を見つよは、何を頼みてか宮仕もせむ、と思ひつと、入り籠りておはす。

五日といふ日のつとめて、鞍馬より、若くより籠れる行ひ人の、髪ところく白

- (語釋)
- (一)千藤邸の
- (二)千手觀音の呪言
- (三)侍所に詰め居たる家來ども
- (七)食はする事ははずし
- (九)御願ひ申すなり
- (一〇)私自身は
- (一一)出て給ひ歎
- (一二)家人などに言ひつけて布施する事はせし
- (考異)
- (四)年「ナン
- (五)今年「今年は
- (六)絶えて「たらで
- (八)えたば「侍れば「えたまはで「勞れぶし「せむと「とまり侍れば

けたるが、弟子三人、童子五人連れてありけるが、糧絶えて、大殿の御門に来て、手陀羅尼を尊く讀む。いと尊きこゆれば、忠こそ、起き走り出でて見るに、いとなき行ひ人なりと見て、忠君をがみ給ふ。さぶらひの主たち、「何でふ行ひ人を、斯う伏しをがみ給ふ」とて、殿の中ゆすりて、忠君の下り給ふ所に、五位六位、ひざまづき畏まる。山伏見て、これはいとかしこき人かな、家の子なるべしと思ふに、忠こそ山伏に問ふ、忠こそ「いづくに住み給ふ行ひ人ぞ」山伏、「年若かりしより、鞍馬の山にこもりて、今年三十年になり侍りぬる山伏なり。去ぬる七月より、修行にまかり歩くに、供養絶えて、今日三日、童べに物もえたばで、つかれ臥し侍れば、とり申すなり。山伏は穀斷ちて久しくなり侍りぬ」忠こそ、「しばし此處に立ち給へ」と言ひて、内に這入りて、冬の装束一くだりを、いと小さく燴みて、みづから持て出でて給ひ、忠こそ「人などにも更に物せじ。これを御童子の中に物せむ」とて取らせ給ふ。弟子一人市へ持て出でぬる間に、忠こそ山伏にか

〔語釋〕
(一)人の願を叶へてこそ
よけれ

(三)「ゆく先の安からん
事を思ふなり」などある
べし

(四)待ちて居よ

〔考異〕
(二)べきにもべき事に

たらひ給ふ、忠こそ「幼くより、行の道に心進みてなむ侍る。宮仕せじと、親の許にかくて侍れど、心もとどまらず、身を碎きて山林にまじり給ふ人なむ、羨ましく覺ゆる。斯くなむと公にも申さまほしけれども、許さるまじければ、あらはれたる師には、えなむ就くまじく侍るを、御弟子にやはなし給はぬ」といふ。行ひ人、「など宣ふことぞ。山林にまじる者は、世の中をおほろけに思ひ離れて、身を無きものに思ひなして、するものなり。そもく堪へおはしましぬべしやは」忠君、「など斯くは宣ふ。行する人は、人の思をなし給ふこそよけれ。行すよめる人を、否び給ふは、ひがみたる心地なむする」行ひ人、「やすらかに住み給へる御身の、草木かづらの根を供養にして、木の皮、苔を敷物にし給ひなどせむには、えしも堪へ給ふまじく思ほゆればなり」忠こそ「安らかなる事に久しかるべきにもあらねば、今苦くてゆく先の事を思ふなり」と宣ふ。行ひ人、「さらば御心にこそあらめ。いと尊き事なり」と聞ゆ。忠こそ「さらば、このわたり近き所にもものし給へ」とて、人氣色も

ぞ見る、とて入り給ひぬ。

忠こそ、世の中思ひ離るよにも離れ難きこと二つなむありける。一つには、かの

梅壺の君に物をだに聞えずなりなむことと思ひ、今一つには、年頃弾きあそびつ

るをりめ風を、また弾かずなりなむことと思ひ、また親の御上をば更にも言はず。おとど物に出で給ひ、人どもも無き折なりければ、この琴を一聲かきならし給ひ

て、りうかくのもとに斯く書きつけ給ふ、忠こそひく人も空しくならば琴の音もうつせみのみや今は調べむ

と泣くく書きつく。梅壺に御文書く。あやしく悩ましき事の侍れば、えまわり侍らぬ程の、久しくなり侍りにける事。なほおこたらす侍らば、得しも参らずやなり侍らむ、と思ひ給ふるになむ心細く侍る。

とて、

〔語釋〕
(一)梅壺女御、祐宗の噂
せし人
(二)俊隆の巻をりめ風
を時の右大臣に奉りし事
見えたり

(三)父千蔵

(五)臨岳、琴の首の紋を
受くる所、紋眼といふ穴
ありて紋を引きとはず

(七)病が直らずば

(六)ける事―ける事を

(詔釋)
(一)梅壺

(三)贈られたる歌につきては其の言ひ様の變なるを疑ひ思ふ

(四)行方の分らぬ涙川ならばこそ相見る事の淀む事もあるべけれ

(五)受戒して

(六)師の僧が

(七)忠こそが

(考異)
(二)宣へる一宣ひつる

① 暗部山の新入道。思こそその搜索。帝千蔭を召す。詭計の露顯。千蔭の痛恨。

忠こそ泣きたむる涙の河の水ふかみあひ見む程の淀むべきかな

我が君や、思さむことの畏きをなむ、畏まり思ひ給ふる。

とて、近くつかひ給ひける童して、御息所の御許へ奉れ給ふ。御息所、「如何に

おほして宣へるならむ」とて御返事

梅壺ひさしく参り給はぬは、惱ましくしたまへばにこそありけれ。心細けに宣へ

るは、何事ぞや。はや参り給へ。まことや、淀みは、そが怪しきをなむ。行

方知らずば。

とて、

梅壺なみだ河底なる水の早ければ瀧つ瀬見むと思はざりしを

忠こそ、日暮れぬれば、行ひ人諸共に出でぬ。

かくて山に入りてすなはち、頭おろし、思むこと受けて、いとかなしけなる行ひ

人にて、この就きて去にし師に法など受けつくして、かしくき智者なりければ、い



忠
こ
そ

〔語釋〕

(六)在原滋家をいふ歟

(七)急ぎて我を使によこしたる也

(九)祐宗が告げし忠こそ

〔考異〕

(一)ちとかしこき人にて

(二)思し思して

(三)來たりきたれり

(四)やーやは

(五)申して一奏て

(八)給へる一給ひつる

(二〇)立ちかへり一立ち

とかしこき人にて、皆うつし取りて行ふをも、知ろしめさで、帝は、里にあらむ
 (一)と思し、父大殿は内裏にさふらふらむと思して、二十日ばかりになりぬる時に、内
 裏より忠君召しに、藏人所の小舎人來たり。大殿おどろき給ひて、千蔭「内裏には
 (二)さふらはすや。先つ頃、あからさまに罷出たりしかど、此處には侍らず、久しく
 なり侍り」と驚きさわぎ給ふ。御使、「忠君は、さふらひ給はで久しくなりぬ。一
 日許され給はざりける御暇を、せめて申してまかで給ひにし後、更に参り給はず
 とてなむ、(六)頭の君などいそぎ奉り給へる」おとど、千蔭「此處には、あからさまに
 罷出たりしかど、許されざれしを強ひてまかでつるなり」と申ししかば、歸り参
 りたるとなむ、日頃思ひつる。内裏にもさふらはざなれば、唯今あやしがり求めさ
 せ侍り」と奏せさせ給ひて、手を分ちて、大願たててもとめさせ給へど無し。内
 裏よりも御使を分ちて求めさせ給へど、聞えず。内裏より大殿召す。大殿、千蔭「畏
 きこと聞召したなり。あらぬまでも恐ろし」とて参り給はず。立ちかへり召すに、
 (二〇)

〔語釋〕

(二)當分里へ下るな

(三)父の病氣故見辨にゆきたし

(六)若し思こそそのつらく思ふべき事をせし覺えはなきか

(七)公の事につきて世を厭ふ様な事はあるまじ

(八)私も

〔考異〕

(一)忠はなか無かなるぞ一思こそ何とかあなるぞ一思こそはなかあなるぞ

(四)まかてて一まかて

(五)見出で一見て

畏まりて参り給ふ。上、久しく参り給はぬことなど仰せ給ひて、
 無かなるぞ。其處には何時ばかりか見えし」と宣ふ。千蔭「見え侍らで、この廿日
 ばかりになり侍りぬ」上、
 しかば、「童べも無き折なるを、暫はなものせそ」と言ひしかば、「そこに惱み給ふ
 ことあり。訪らひにもものせむ」と言ひしかば、やむことなき事にこそあなれとて、
 「あからさまにまかてて唯今物せよ」と言ひしまよになむ見えぬ。所々に求むれど
 無かんなるは、如何なるぞ」と宣へば、千蔭「千蔭もこよばく求めさせ侍るに侍ら
 ぬは、世の中に亡くなりたるにこそ侍るめれ。侍らましかばまさに見出で侍ら
 ましやは」とて泣き給ふこと限なし。上、
 し。此處には、然思ひぬべきことも物せぬを、如何に思ひてにかあらむ。交らひ
 のついでにも、こともなき人なれば、
 隠れじ。親ばかりの責め宣はむにこそ、亡する事もあらめ」おとど、千蔭「此處に
 (七) (八)

忠こそ

〔語釋〕
(二)委しき事は言はずし
て只

(三)從來少しも不機嫌の
様子を父が忠こそに見せ
ず

(五)忠こそは他人の噂さ
へせぬ人なり

(六)言ひにくき事なれど

(七)忠經

(八)以下千蔭の心

〔考異〕

(一)告げ給ひしかば―告
げたまひしかば―告げた
うべりしかば

(四)たりつるに―たうへ
るに

も、宣ふことも侍らず。深きことにも侍らざりしを、如何なる事にか侍らむ、人の告げ給ひしかば、いとあやしく覺え侍りしかど、とかくも宣はで、「たいくしきこと侍るなり。今は得かへり見るまじくなむ」とばかり宣ふことありし」^(二)「聊なる氣色も見せ給はず、かたじけなく恐ろしき物に習はれたりつるに、許されぬ氣色のありけむに、思ひ倦んじにけるならむ。如何様なることをか聞き給ひし」千蔭「千蔭が上に禍なることを奏し侍りける、となむ承りし」帝「更に言ふことなし。人の上にだに言ふことなかりし人なり。況や、更に親の上には言ひてむや。心を知れらむ人は、さる逆様のことを言ふとも、眞と思しなむや。この事は、定めて知りぬ、人にはかられ給へるなより。不便なることなれど、左大臣の家、昔よりよろしからず心聞ゆる人なり。其のわたりより言ひ出したる事なより」大殿「ともかくも聞え給はで、泣く／＼まかで給ひぬ。かくて思ほすに、^(八)帯よりはじめて、様々あやしき事どもをするは、一條のするなりけり、^(一)故君の今々となり給ふまでに宣ひ置きしことに隨はましかば、わが子を失はましや、けしからぬ所に通ひ行きて、悲しきことをみる事、腹ぎたなき事も、かへすがへす宣ひけり、とおほし歎きつよ、公事も知り給はず、たゞいもひ精進をし給ひて、忠こそにあひ見むとのみ行ひ給ふ。^(三)かゝる儘に、一條といふものを世にも聞かじ、と思ほすに、かの北の方、ものし給はぬことを思ひ入られて、大願を立て、陰陽師、巫を召し集めてせぬわざなくし給へど、驗なし。忠こそを失ひて思ほし歎くことに劣り給はず歎き給ふに、おほしまし通ひける時に交し給ひける御文どもを取り出でて見給ふに、まして悲しくおほえ給ひければ、その御文どもを沈の箱一よろひに、取りあつめて入れて、^(九)大殿に奉れ給ふとて、萬の悲しげなることをかき集め、^(一〇)一條この御文どもは、これをだに形見とおもへど、世中に經むことも今日明日に思ほゆれば、侍る時に、とて奉る。あはれなるものは、世の中になむ侍りけ

〔語釋〕

(一)亡妻

(二)物忌

(三)千蔭が

(四)千蔭の來ぬを

④ 千蔭一條北方に疎し、北方の憂慮、千蔭の悲嘆、北方の悲嘆、交情絶ち、一條北方の零落。

(七)千蔭が

(八)一條北方が

(九)千蔭

(一〇)存生中に返し奉らんとて

〔考異〕

(五)集めて―してナシ

(六)せぬわざなくし給へど―せぬわざなくし給へども

(語釋)
 (一) 我は彼女を恨み居るに恨まるべき覺えもなき様に却つて恨みかけて來し事哉
 (二) 我こそ

(七) 我も
 (九) 其方の文を

(考異)
 (三) 忠が―思こそが
 (四) 萬に―にナシ
 (五) 給ひける恨―給ひけるに恨
 (六) 付い―付き
 (八) 思ひ―思う
 (一〇) 淺瀬―淺み

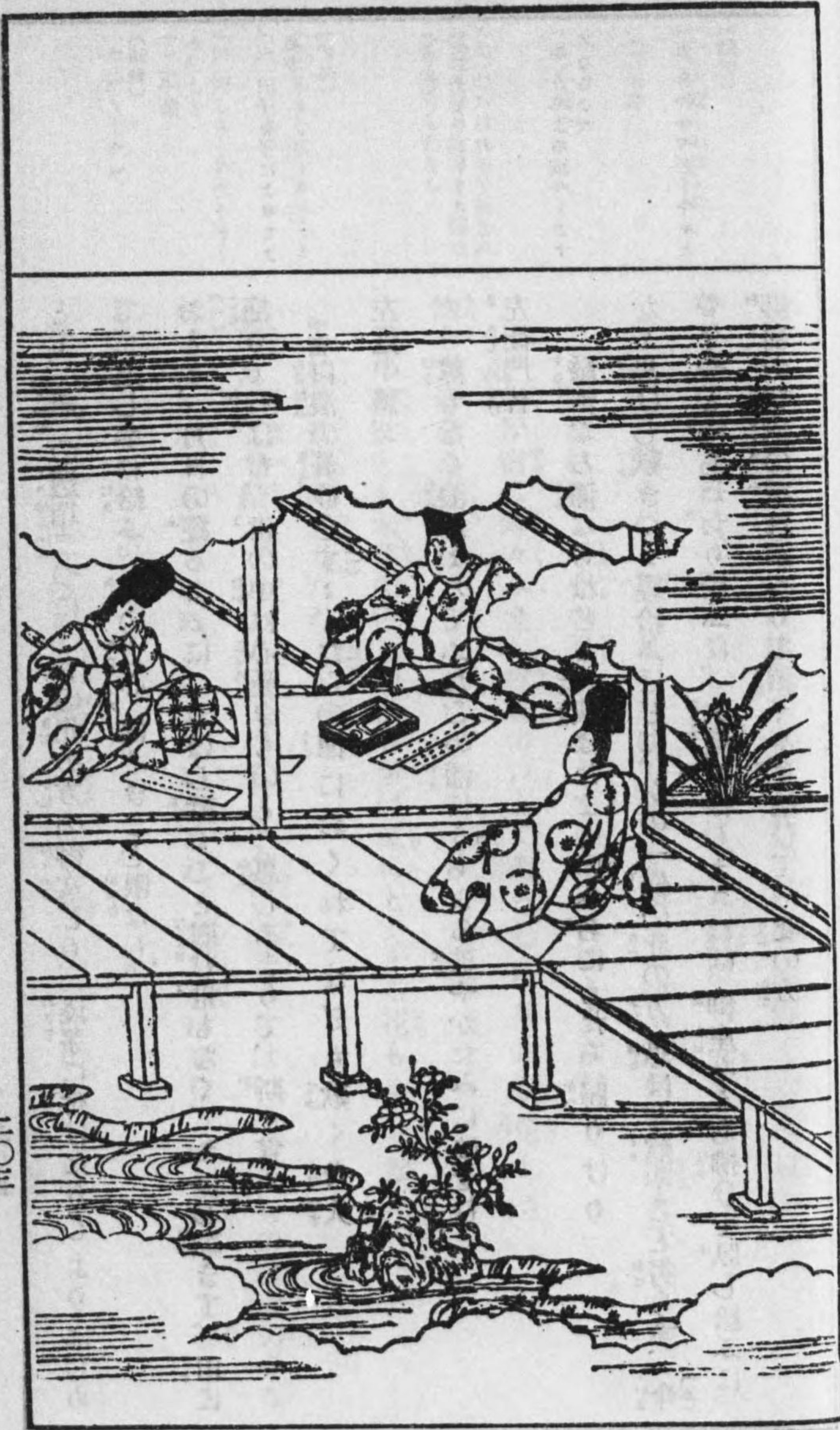
る。
 とて、

一條 思ひ出でてふみ見る毎にみなせ川つらき瀬のみぞ數多見えける
 聞ゆべきことこそ思ほえね。

とて奉れ給へれば、このおとど見給ひて、千藤あな心憂や。よしとも思はぬに、
 氣色もなく、かく恨みつるかな。ことよにこそ、忠が上に、萬にいみじき事をもの
 し給ひける恨申さまほしく」と宣ひけれど、情付い給へる人にて、

千藤日頃は、怪しきことのあるに、思ひ給へさわぎて、内裏にも参らでなむ籠り
 侍るに、其處にも参り來すや。此處にも明日までえ在るまじく思ひ給へられ
 て、今は後見すべき人もなければなむ、此處にも取りあつめて奉る。水無

瀬川は、
 淺瀬こそふみも見るらめみなせ川ふかき淵にぞ我は沈める



(語釋)

(一)千藤

(三)田子を子に上せてよめり

(考異)

(二)ナミヤミヤ

(四)うちよる波や一よするなるなや

(五)今や今やと一今やと

とて、銀の透箱二つに、この北の方の御文ども、淺茅に付たりしよりはじめ
て、返し奉れ給ふ。北の方心ほそきこと限なし。

おとど、月日の経るまよに、おほし歎くこと慰む世もなく、おほし歎きて、山に
籠りて行はむ、世の中は心憂きものと、思しあまりて、斯く宣ふ、

千藤白浪の眞砂をすよぐたこの浦におくれてなぞも歎く舟人
左近中將、

隙もなく浪かよるてふたこの浦にうちよる波やかたみにはせむ

左衛門佐、

駿河なる浦ならねども白波はたごといふ名にもたち歸りけり

かく思ほし歎きつと経給ふほどに、かの一條の北の方、思ほし歎くこと劣らず、
や今やと待ちわたり給ふに、大殿おはしまさねば、御座をうち拂ひて臥し給ふに、
御前の花薄の折れかへりて招くを見給ひて、北の方、

(語釋)

(一)大殿一おほと

(二)未詳

(五)千藤の

(七)心かはれる千藤なれば寫の如く此方より纏はりゆきても効なし

(考異)

(三)あらしに一あらしと

(四)佗しき一あやしき

(六)斯う一ナレ

一條待つ人の袖かと思れば花すとき身の秋風に靡くなりけり
など宣ひわたるに、風すどしく覺ゆれば、大殿にかく聞え給へり。

一條いでや聞えじと思へど、訪はで憂き人は、といふめれば、聞えではえあらぬ
ものなれば、唯今の風のあやししく心細ければとてなむ、

我が宿に時々ふきし秋風のいとどあらしになるが佗しき

物もおほえぬ心地に、

千藤 秋來とも木草の色しかはらずば風にとどまる花もありなん

なほ長閑に思したれ。

と聞え奉り給ふ。北の方、なほざりなる御心かな、なほいみじきものは女の身な
り。斯う思ひ果てられぬるにこそはあめれ、かく思ほさむ人は、萬のこと思ふと
も効もあらじとて、

一條白露に色かはりゆく秋萩は玉まく葛もかひなかりけり

- (一) 侍女どもが
- (二) 「なめく」なるべ、無禮にての意
- (三) 北方が
- (四) 下仕の名
- (五) 俊蔭が忠經に奉りしかたち風
- (六) 正頼なるべし。此時は千蔭致仕して正頼代りて左大將になりし也
- (七) 千蔭
- (八) 千蔭
- (九) 仕らまつらていつかうまつらては
- (一〇) 千蔭の閉居。法會の奇蹟。千蔭の薨去
- (一一) だにも心だにも物心
- (一二) 心地：經給ひけるに心地して經給ひけるに

とて居給へり。年頃おとどの通ひ給ふこと七年ばかりありしに、一日につかひ給ふもの數知らずありし程に、こよらの年頃を盡しはてて、限なく貧しくなるまよに、あるは男につきて去り、宮仕しに出でて去ぬ。御徳のさかりに、なめて使ひにくしとて、人よりことに憎み給ひし下仕なむ、よもぎと言ひて、とどまりて、よもぎ「然言ひてあらむやは。我だに仕うまつらで誰かはあらむ」とて仕うまつりける。殿に残りたる物なし。かの俊蔭のぬしの奉り給へりける、琴のみなん残りたりける。それをぞ、この時の大將に萬石に賣りて遣ひける。

畫詞

これは一條殿のほろび給へるところ。

斯くてこの大殿いもひ精進をして經給ふ程に、山里の心ほそけなる殿まうけ給ひてぞ住み給ひける。そのわたりは比叡、阪本、小野のわたり、音羽河近くて、瀧の音、水の聲、あはれに聞ゆる所なり。物思はぬ人だにも心細けなるわたりなり。ましていみじき心地してなむ經給ひける。おとど思す様、我世の中に久しく

- (一) 亡妻
- (二) 圓柱形の塔
- (三) 自分の後世の功德
- (四) 思こそ存命ならば當人の息災延命の爲祈禱になれ
- (五) 思こそその
- (六) 布施
- (七) 思こそが取揃へて持ちなれたりし琴を
- (八) 刃物
- (九) 千蔭が
- (一〇) 千蔭が
- (一一) 給ひぬ給ふ
- (一二) 給ひぬ給ふ

え在るまじきを、せまほしきわざ、我が世にしてむ、と思して、まづ故君の御爲に、一切經多寶の塔つくらせ給ひて、供養し給ひけり。我が後のわざし給ひ、忠こそこの爲にし給ふ。千蔭この世にあらば息災となれ。亡きものならば、彼の世の途ともなれ」とて、ありし時つかひし物、皆誦經にし給ふとて見給ふに、かの山へ入るとて物書きつけし琴とり出でて見給ふに、書きつけたるものを見つけて、おとど驚きもだえ給ひて、思ほすこと限なし。さて日々誦經にして、千蔭「かい具して、もてならしし物を、我が目には見じ」と宣ひて、佛造らせ給はむとて、萬の兵士して、力人集まりて割るに、いさよかなる瑕つかず。かねの上露のかよらむばかりなり。もて煩らひ給ふ程に、大空かきくらしして、雨降り、雷鳴りて、この琴をまき揚げつ。かく大いなるわざをして、待ちわたり給ふ程に、忠こそを戀ひ死にかくれ給ひぬ。

忠こそ

嵯峨院

●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。①
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。②
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。③
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。④
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑤
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑥
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑦
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑧
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑨
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑩
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑪
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑫
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑬
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑭
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑮
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑯
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑰
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑱
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑲
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。⑳
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉑
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉒
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉓
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉔
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉕
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉖
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉗
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉘
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉙
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉚
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉛
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉜
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉝
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉞
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㉟
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊱
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊲
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊳
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊴
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊵
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊶
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊷
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊸
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊹
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊺
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊻
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊼
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊽
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊾
 ●兼雅の家の相摸の還響。仲忠仲澄を訪ふ。㊿

かくて右大將殿に還響し給ひければ、例のごとなむ、左大將殿もおはしける。さて後に、仲忠の侍従、内裏より罷出るまゝに、左大將殿の御門に来て叩くに、彼の

嵯峨院

〔語釋〕
〔二〕兼雅

〔四〕やがて其儘死にそま
なりし

〔考異〕
〔二〕御返し―御返り

〔三〕思され―おもほされ

〔五〕侍りつる―侍る

あて宮の御返し、

吹くごとに草木うつろふ秋風につけてたのむといふぞ苦しき

兵部卿の宮より

たましひや草叢ごとに通ふらむ野邊のまに―鳴く聲ぞする

御返し

あて宮色かはる野邊にかよふと聞くからに鳴くなる蟲のこころをぞ知る

まして思ひなむやらるよ。

と聞え給ふ。

右大將殿、日頃なやみ給ひければ、覺束なく思されければ、

日頃淺ましく、斯くとだに聞えでやみぬべき心地し侍りつるになむ、いと哀

とて、



〔語釋〕
(一)「見れば」は「見なば」歟

(三)實忠

(四)近江の志賀山寺

(五)仲澄

〔考異〕

(一)思はゆる―おぼえぬ

(六)人間に参り給ひア―ナシ

(七)あまましき…あやなし―あまましき心とかつは思へどいとかくつらき君もあやしな
(詞トシテカケリ)

(八)など―と

兼雅君が訪ふことのは見れば朝露のきゆる中にも魂や残らむ
訪はせ給はましかば頼もしからまし。

と聞え給へれど御返りなし。

平中納言殿よりも、

正明 湧きいづる涙の川はたぎりつゝ戀ひ死ぬべくも思ほゆる哉

源宰相 志賀に 行しにまうで給へりけり。それより、面白き紅葉の露にぬれた

るを折りて、斯くなむ、

實忠 我が戀は秋の山邊にみちぬらむ袖より外にぬるゝ紅葉ば

とあれど御返りなし。

源侍従人間に参り給ひて、

仲澄 あまましき心とかつは思へどもいとかくつらき君もあやなし

など宣へど、例の御いらへもし給はず。

行政齋宮のくだり給ふ御おくりに行きて、攝津國の田蓑の島より、かく聞えたり。

〔語釋〕
(一)伊勢に下る齋宮をおくりて行く也

(三)ながめ―詠め、長雨

(四)文を

(七)仲澄はあて宮の同胞也

(八)以下仲澄の心

(九)あて宮

〔考異〕
(二)くだり給ふ御おくり―のぼり給ふ御むかへ
(五)給はぬは―給はねば
(六)思さむ―おもはさむ

〔畫詞〕 此處はあて宮の御前に人いと多かり。此處彼處より取り次ぎつゝ参

らす。

斯くのみ此の丸の君を、萬の人間え給ふとは知りながら、御消息聞え給ふとき、
人々の御心少しゆくを、聞え給はぬ時は、あつき火の中にすまふ心地して、聞え
給へば、あるは御返り聞え給ふ折も有り、遂に聞え給はぬは、聞えわづらひて止
み給ひぬるも有り、などいと數知らず有るを、餘所の人の然思さむをば如何はせ
む、此の源侍従の君さへ、かゝる心のつきたるを、年頃思ひ忍び、思ひ返せど、
え堪へかねてなむ、猶やなど思ひてなほかく思ふ事なむ有るとばかりだに、いか
で此の君に知らせ奉らむ、時々氣色ばめる事は有れど、知りて知らず顔なるにや

- (一)「など」衍文歟
- (二)此句遙かに句を隔てて下の「その君にこの仲澄の侍従」云々へつゞく
- (三)「右衛門督」なるべし八の君の夫は右衛門督藤原清正
- (五)正頼夫婦の
- (六)八の君が
- (七)八の君とあて宮と
- (考異)
- (四)左衛門督の「右大臣殿の
- (八)えこそ聞えぬ「こそえ侍らね
- (九)こそは「は」ナシ

あらむ、とつれなきをなど思ひわづらひて、此の左衛門督の君の棲み給ふ八の君は、未だ若ければ、こと君たちの住み給ふ様にて、かたぐ異にても棲ませ奉り給はで、宮、おとどの住み給ふ北の大殿に住ませ奉り給ひける、されば、中の大殿に晝はおはしましたつと、夜なむ我が御方にはおはしましたしける、晝は碁打ち、琴弾きなど此方にてし給ひつと遊び給ひ、こと御同胞よりもよき御中なり、其の君に、此の仲澄の侍従、物語りなどし給ふ次に、仲澄「月頃聞えむと思ひ、給ふる事のみ侍るかな」八の君、「何事ならむ。君たちの、己らが中に宣はぬ事の有りけるこそはつらけれ」侍従の君、仲澄聞えさせむにつけて、いとかたはらいたき心地して、えこそ聞えぬ。されと思ふに、逆様の事を聞えたりとも、人に聞かせ給はむやは、と思ひ給ふれども、いとこそかたはなれ。月頃侘しく思ひ給ふる事の有るを、他人には、夢に聞ゆべき人もなし。心一つになむ思ひ給ふる。思ひ給へ餘りて、如何はせむ、御方「こそは聞えめとてなむ」八の君、「何事にか有らむ。月

- (語釋)
- (三)通世せんかと
- (四)後撰集、實「寝てふことしるしはなけれど、も言はてはえこそあらぬものなれ」これを書き違へたる歟
- (五)其方とあて宮とは
- (六)仲澄の戀をあて宮に取次ぎたりとも
- (七)不當なる事故言すぎしと思ふには非ず
- (九)父母
- (一〇)言出して思ひとまりても
- (考異)
- (一)思ほさむ「おほさむ
- (二)侍りける「侍る
- (八)事聞えじ「事も聞え
- (一)なかるべけれど「も

頃になるまで宣はざりけるこそ怪しけれ。何事も思ほさむ事はなほ宣へ侍従、仲澄「え聞えぬにて、わりなさは御覽せよかし」など言ひて、仲澄いと怪しき心侍りける身なれば、世の中に侍らすやなりなまし、と思ひ給へながら、言はではただにとか言ふなれば、かく同じ心に御座します内にも、いとよき御仲に御座しますなれば、斯くなむなど物せさせ給はむにも、誰かは知らむ。此の中の大殿の御方になむ、年頃思ひ給ふる事侍るを、心にも、これは物にくるひたるにや有らむ、いと怪しき事なりと思ひ返して、今までになり侍りぬるに、世の中に立ちまふべき心地もせず。御覽するには、例の仲澄にては侍りや。かく侘しき心地して、死ぬべき心地し侍るを、何かは良からぬ事聞えじ、と思ひ給へる。只上おとどの思さむ事の、限なく畏く、身の徒らにならむ事をば思されじと、思う給ふるこそ侍れ。聞えても、思ひ給へかへすにも、同じごと徒らになりぬべければ、聞えても効なかるべけれど、斯くとだにも聞えさせでは、身は徒らになるとも、命だに暫し

〔語釋〕
(一)「とて」衍文歟

(四)八の君が

(五)あて宮の

〔考異〕
(二)なめるを―なるを
―なるを

(三)何かは―「は」ナシ

止まるや、とてなむ、いみじく淺ましき心地しつゝなむとて物に狂ひたる事を、
思ひ給へ餘りて聞えさする。吾が君、猶かよる氣色語らひ聞え給へ。おほろけに
思ふ給へむには、かよる事を聞えさせてむや」などいと哀に語らひ聞え給へば、
八の君、怪しきこととは思すものから、いみじけに宣へば、流石にいとほしく思
して、八君けにさも思しぬべき事なれども、己が心ながら、心に任せぬ事なれば。
然した、わりなく思す事なめるを、何かは、かよる中に、何事も宣ひ語らはむ
に、知る人有らむやは。今事のついで有らば、斯くなむと語らひ聞えむ」侍従、
仲澄「いと嬉しき事なり。吾が君なむ良き様にを」と宣ふ。

かくて中の大殿にわたり給ひて、例の御遊びし給ふ。倭琴、箏の琴、琵琶など調
べあはせて彈き給ふ。さて御物語などし給ふついでに、八君「一夜、侍従の哀なる物
語をし給ひしかな」と宣ふ。九の君何事も知り給はで、あて宮「あはれ羨ましの事や。
我にこそ聞かせ給はましか」八の君、「己まさに聞えんに」など宣ひて、八君「誠は、君
(五)

〔語釋〕

(二)今迄の様につれなく
し給ふなと申上げてくれ
よと

(三)此後仲澄が言ひ寄る
事あらば

(四)元より睡ましかるべ
き同胞の中は

(六)仲澄の懸想せる様子
を悟らるゝな

(八)未詳

〔考異〕

(一)日頃―月頃

(五)たんめる―ためる

(七)紅みて―「ナシ」

(九)思ひ入れて―思はれ
て

(一〇)草木も―「も」ナシ

⑤ 正頼邸の月夜の管
絃、彈正の宮菊の花に歌
をかきてあて宮に贈る

の御心つらき事なむ」とて宣ひしかば、「何事ぞ」など申しよかば、「日頃聞ゆる事有
るを、それさなおはせそ、と聞えよや」と、似け無きことをし給へば、憎しとは
思へど、いとほしく、身も徒らになりぬべき事を宣ひしを、猶聞え給ふ事あらば、心
やりに、聊かばかりはいらへ給へかし。疎き人にもこそ、なげの言の葉は言ふな
れ。かよる御中には、何事を宣ふとも、誰かは知らむ。いとほしくも思ひ入れ
たんめるを、人に然な思はれ給ひそ」九の君、面さと紅みて、打ちほよ笑み給ひ
て、あて「宣ふこともなきを、何事かは聞えむ」八の君、「聲せぬに答ふるものは山彦
(五) の、と宣へかし。誠に、見苦しき事思ひ初めぬる君にこそあめれば、えあるまじ
くわりなき事、深く思ひ入れて、心いられありき給へば、かく容貌も損はれ、ほ
れたる様にいとほしくぞ有るや、と思ふにも、怪しくなほ思ひ焦るよもうたて
あるものを」など宣へば、九の君聞かぬ様にておはします。
かくて日頃經て、長月になりぬ。風涼しくなり、蟲の聲、御前の草木も調ひて、木
(一〇)

- (一) 正頼の第十女
- (二) あて宮
- (三) 兼雅
- (四) 仁壽殿女御、正頼の長女
- (五) 彈正宮忠康

- (一) 月面白き夕暮に此一句衍文歟
- (二) 出て一ナシ
- (三) 合せ一合せて
- (四) 合せ一合せて
- (五) 合せ一合せて
- (六) 合せ一合せて
- (七) 合せ一合せて
- (八) 合せ一合せて
- (九) 合せ一合せて
- (一〇) 合せ一合せて

の葉は色づき、草叢の花咲き、五葉の松は長附けき色を増し、色々の紅葉、薄き濃きむらごに交り、月面白き夕暮に、御前の池に月影映りて、萬面白き夕暮に、八君、いま宮、姫宮御簾巻き揚げて出で御座しまして、例の御琴ども弾き合せて遊び給ふを聞きて、男君たち、え籠りおはせで、式部卿の宮も、右のおととも出でおはしまして、「今宵の御琴どもの音に驚きにけり」とておはしまして、式部卿の宮箏の御笛、右のおととたどの御笛、箏、箏吹き合せ、聲々數多の物吹き合せて、いとなく遊ばせ給ふを聞かせ給ひて、何れの人か御心長閑にて籠りおはせむ、一夜、女君たち、いと清けにて、なほおはします端に出で居給へり。此の女御の御腹の三の宮、世の中のかしこき君にておはします、それなむ、此のあて宮を思ひ聞え給へど、すぎくしくもや、とて色にも出で給はねど、なほ思しわたるに、此の君たちの並びおはする所に御座して、曙に御簾を巻き揚げて見給ふに、いと清けにおはします中にも、此の九の君は優れて見え給へば、三の宮はしづ心なく覺え

- (一) 考異
- (二) 考異
- (三) 考異
- (四) 考異
- (五) 考異
- (六) 考異
- (七) 考異
- (八) 考異
- (九) 考異
- (一〇) 考異

- (一) 考異
- (二) 考異
- (三) 考異
- (四) 考異
- (五) 考異
- (六) 考異
- (七) 考異
- (八) 考異
- (九) 考異
- (一〇) 考異

給ふこと限なし。見給ひて、物も宜はで、打ちなけきて立ち給ひぬ。こうらんにおしかよりて眺めおはしまして、思すこと更にも言はず、おきの上(二)に居る心地して、彌益々に思さるよに、御前(三)の一本菊、いと高(三)いかめしくうつろひて、朝ほらけにめでたく嚴めしう見ゆるに、露に濡れたるを押し折りてかく書きつけ給ふ、思康にほひます露しおかずば菊の花見る人深く物思はましやあなわびし。

と書きて、そこらの御中に、九の君に、思康「此の花は散りまさりぬべく」とて奉れ給ふ。九の君、暗き程なれば、書きつけ給へることは見で、只かく書きつけ給ふ、あて露ならぬ人さへおきて菊の花うつろふ色をまづも見る哉と聞え給ふ。八の君、少しあかくなる程に、此の君の書きつけ給へる事を見て、八君露かよる籬の菊を見る人は物や思ふと誰か言ふらむ

正明、正頼を訪ひて東宮の花の宴の事を語る。賢あて宮を眞のあて宮と信ぜる上野の宮の噂

(一)正頼

(二)正頼

(三)正頼

(四)御参内がなき故

(五)脚氣

(六)賜眼願

(七)残念がりて御話しありき

(八)考異

(九)かくて：別れ給ふ

あなわびしなど聞え給ふ。かくて君たちも内裏に参り給ひ、人々も別れ給ふ。
〔畫詞〕 此處は君たち集りて遊び給ふ。御子菊を押し折りておはす。此處は御
たち四十人ばかり、君たちの御前に物参る。東の御方より君たち起きおはし
ますなり、とて御果物奉り給ふ。

かよる程に、平中納言、大將殿にまうで給ひて、侍におはす中將の君に對面し給へり。中納言、正明「久しくさふらはぬ畏まり聞えむ、とてなむさふらひつる」と宣へば、祐進「御消息聞えむ」とて入りぬ。おとどに、祐進「平中納言参り給へり」と聞え給ふ。正頼「彼方にこれかれあなり。此方にて對面せむ」とて、寢殿の簀子に御座よそひて、對面して、御物語きこえ給ふ。中納言、正明「日頃久しく参り給はねば、覺束なき事多くなむ」大將の主、正頼「はなはだ畏し。例わづらひ侍る脚病煩ひてなん、日頃いとまぶみ奉りて参らず侍る」中納言、正明「一日、東宮に花の宴聞召しよにも参り給はぬことをなむ宣ふめりし」おとど、正頼「誰々か参

(一)「召したりし」なるべし

(七)いづれ御家に關係のなき事にはあらず

(八)「一日」は「事」の誤か、一本「一日の」の「の」なし

(九)正頼

(一)藤原君の巻にて似せのあて宮を奪ひて妻となし居る人

(二)かしーナレ

(三)四韻し院

(四)おはたいなりきとーおはたいせきとーおはな

(五)こそーいと

(六)不意にーゆくりなき

られたりし」正明「右のおとど、右大將、民部卿、御子たちなどなむ。博士ら召したりき。學士正光、式部大輔忠實朝臣、右中辨維房朝臣、秀才、進士などなむ召したり。詩歌二つのものなど設けられたりき」など申し給ふ。大將のぬし、正頼「いと有識のもの限なんなりかし。さて御歌は如何有りけむ」いらへ、正明「四韻の歌なめりき。おほたいなりき」と申し給ふ。正頼「其の文どもこそ興多かるべき」と申し給ふ。正明「さて其の日、不意に人に騒がれ奉りき」大將、正頼「誰にかありけむ。正頼が族かや」と宣ふ。中納言、正明「何れも離れじかし」正頼「さて如何なる事にか有りけむ」中納言、正明「一日の序など有りしかば、これかれ斯く参り給へるに、殿の参らせ給はぬがさうぐしさ」などこれかれ申し給ふ序に、正明「何心なく、けに怪しく参り給はぬは、なやみ給ふ事やあらむ」と申しよかば、上野の宮大きに驚き給ひて、「此の正明朝臣のなど申し給ふ事ぞ」と聲を放ちて宣ふ時に、右大將、兵部卿の宮、數多これかれ、いと怪しと驚き給ふ時に、東宮もいと

(語釋)
 (一)正頼の娘の夫たる我が前にてさへ斯く呪詛がまきしき言をいふ位なれば
 (六)上席者はなほ多ければ正明が左大將になる譯にはゆかず
 (七)兩一本「體」とあり何れにても解し難し誤あるべし
 (八)上野宮の名
 (一)女王即ちあて宮の母女一宮
 (一三)以下東宮の心
 (一五)正頼の五女の姫
 (一六)同七女の姫
 (考異)
 (一)思し〜もほし
 (三)給べ〜たうぶ
 (四)にては〜はナシ
 (五)を朝臣の飽くまで〜の朝臣をあてにて
 (九)事の〜ナシ
 (一〇)何處よりぞ〜のこよりぞ〜づくぞ〜のくつぞ
 (一一)王の〜わらはの
 (一四)はては〜とては

怪しと思したるに、此の宮、「いとたいくしき事は、啓し申さるべき。やむごとなき家の男が前にてだに、かく申し侍り給へば、まして他の所にては如何に呪詛悪念深く侍り給ふらむ。彼の左大將を朝臣の飽くまで呪詛し奉るなり。天下に、其の大將を呪詛し殺し奉りても、中納言の上おほかり。さても人呪ふ人は、三年に死ぬるなり。大將聊かの足手の恙も有らば、朝臣のすると思はむ」といと切に怨じ給へば、東宮もいと怪しと思して、東宮「そも〜此の大將には何の兩かおはしますらむ」上野「彼の朝臣には、頼明は事の寄せいとやんごとなく侍り。彼の大將の九つに當る女は、頼明が童にてなむ侍る」と申し給ふ。皆怪しがりて、東宮も「彼の大將の九つに當る女は、何處よりぞ」と問ひ給へば、上野「此の王の御腹なり。いとかしこく名だたりて、苦しう得ず侍りしを、さこそあれ、頼明、構へてなむ奪ひ取りて侍る」と申し給へば東宮は、如何なる事にかあらむとは思しながら、然なりはてば、民部卿、右衛門督なども、皆とがめつべきにこそあなれ、

(語釋)
 (一)此處誤あるべし
 (五)上野宮を歎きし事
 (六)「人にも」なるべし
 (七)上野宮が
 (八)仲澄
 (考異)
 (一)まして〜まいて
 (三)た〜ナシ
 (九)悪念人等歌をあて宮に贈る
 (四)彼の〜衍文なるべし

まして上にも聞召し過ぎしかし、猶いとをかし、など思して宣ふなりと申給ふ。皆人怪しがり侍りき。民部卿などは語り聞え給はぬか。すべてたど十が一を取り申すなり。いとをこなることども多く侍りき」と申し給へば彼のおとど、ありし事はかけても宣はで、正頼いとをかしく怪しかりける事どもかな。此の侍るものは、彼の君ならぬ人に、只今は未だいと幼く侍れば、奉らむとも思ふ給へぬものを、眞實にある様にも宣ひけるかな。怪しき事」とて笑ひ給ふ。さて中納言まかで給ひぬ。

畫詞 此處はおとど中納言に對面し給へり。さぶらひにて中將の君對面し給へり。侍所に男どもいと多くさふらふ。

かくてある程に、源侍従の君、出で入り起き臥し歎き給ふ。いと侘しく覺えければ、御前の花薄の中に、いま本より生ひ出づるは、秋も穂にいでぬを、引き抜きて其の葉に書く。

(語釋)
(五)正頼

(六)長洲の濱は攝津の名所。思ひ流すを長洲にかけたり

(考異)
(一)こそこそは

(二)國のーナシ

(三)ありきてをかきし所
所ーナシ

(四)童べを都に上せて大
將殿にーナシ。又「大將殿
に」ノ四字ダケナシ

仲遣思ふこといかで知れとか花すよき秋さへ穂にも出でよすぐらむ
あな侘し。何時もかく。

など書きて見せ奉り給へば九の君

あて宮諸共に生ふる薄のいかなれば穂にいでて物を思ふてふらむ

かよる中。

とて尾花を添へて奉り給ふ。侍従、仲遣さればこそ侘しけれ」と聞え給ふ。

畫詞 此所は中のおとど。九の君おはします。御たちいと多くさふらふ。

かくて行政、攝津國の有馬の湯に行きて、面白き所々ありきてをかきし所々見る

にも、物思ひ出でられつよ、哀と覺ゆる時に、童べを都に上せて大將殿に、

行政しほたるよ事こそまさされ世中を思ひながすの濱はかひなく

と書きて、宮あこ君に

行政これ中のおとどに奉り給へあこ君や。いかで物の苦しさ知らせ奉らん。



(語釋)
(一)行政に断るべき口實を教ふる也

(考異)
(二)給ひそよー給うそ

(三)なかめればーなかんめれば

(四)思ほさむーおぼさむ

(五)苦しきはーはーナシ

(六)夕暮にー「に」ナシ

と書きて奉り給へり。宮あこ君見給ひて、九の君に見せ奉り給ふに、走り書き給ふ様などこともなし。宮あこ君、「遠き志も有るものを、猶聊か書きて給へ」と聞え給へば、あて「あなさがな。何でふかよる文見せ給ふ。「かよる文見すれば、おとど、はよ宮さいなむ」とて、な取り入れ給ひそよ」と宣ひて、聞え給はず。さて行政の使に、宮あこ君文書きて遣り給ふ。

宮あこ此の文は、宣ひつる人に見せ奉れど、御返りもなかめれば、まろを如何に憎しと思ほさむ。物の苦しさは、君のおはせぬ頃なむ思ひ知りぬる。疾くのほり給へ。

あひも見ぬ日のながらふる袖よりは人の涙のおちぬべきかな

いと久しや。はやく。

と書きて遣りつ。行政これを見て、袖を絞るばかり泣き濡らして、急ぎ歸りぬ。いとどしく魂しづまる時なく思ひ歎く秋の夕暮に涼しく月面白きに、只一人眺

(考異)
(一)移りてー「て」ナシ

(二)傍ーかたはし

(三)奉りーナシ

めおはするに、萬哀に悲しく覺えて泣き居給へれば、白き御衣の袖に涙かよりて、搔練なんど移りて濡れたるを、取り離ちてそれに書き付け給ふ。行政ときてやる衣の袖の色を見よたどの涙はかよるものかはいと珍らかになむ。さるは月頃経にけりや。と書きて奉り給ふれば、九の君、辛うじて哀れとや見給ひけむ、傍に書き付け給ふ。

あて宮袖たちて見せぬ限りはいかでは涙のかよる色も知るべきかへすく物うけなる御袖かな。

とて返し奉り給ふ。又平中納言殿より御文には、

正明秋の夜の寒きまにくきりくす露をうらみぬ 曉ぞなき知る人のなきなむ侘しき。

とて奉り給へれど、御返りなし。

(語釋)
(一)實忠

(二)正頼郎

(三)他のあて宮に懸想する男どもの推測する也

(六)兼雅

(七)實忠既にあて宮を手に入れたる處もあれば

(八)旅人は實忠

(一〇)まつ松、待つ

(考異)

(四)給ふ一給へ

(五)給はでや一給ひてや

(九)近き一とはき

かくて此の源宰相、此の殿にのみおはすれば人々、「此の君は、ある様ありてやかく籠り居給ふらむ。おとど、宮知り給はでや。九の君に馴れくしき事あらむ」など内の心をば知らで、此の聞え給ふ人々疑ひ聞え給ふ。右大將殿よりも、さる氣色をなむ聞え給ひける。

兼雅聞えさすれども効なくなん承はる様もあるものを、此處にこそいとかしこく思しおとさるべけれ。

旅人もこえなれぬとか渡守おのが舟路の近きまにく

と聞え給へれども、御返りなし。兵部卿の宮よりも、

兵部度々聞えさすれど、覺束なくのみあるを、自ら参りてや聞えさすべき。

とて、

兵部任吉に見ゆるや何ぞおほつかなまつと答ふる人もあらなむ

と聞え給へれば九の君の御返り、

(語釋)
(一)仲澄

仲忠、あて宮に重んぜらる

(二)「思ひ給へつれども」なるべし

(四)君等こそ思ふ人多かるべし

(五)仲澄の如き身分よき人さへ

(六)どこの女をか思ふべき

(七)「し給ふる所は」なるべし

(考異)
(三)思ひ給ふか一思ふとか

あて宮年ふれば松はかれつと住吉はわすれ草こそ生ふといふなれとのみ聞え奉り給ふ。

かよる程に、仲忠の侍従は、常に此の殿に来つと、或る時は此の御前にて、琴弾き遊びなどし、琴をば更にひかで、他遊をしつと、源侍従の君を兄弟と契りて

語らふ。仲忠「などか参り給はざりつる。内裏にさふらひたりつれど、君の見え給はざりつれば、さふらふかひも無かりつれば罷出つるぞや」源侍従、仲澄「参らむと

思ひ給ひつれども、怪しく惱ましく侍りつればなむ」仲忠「などか斯くのみは。人思ひ給ふか」仲澄「仲澄は、人數にし侍らねば、さ思ふべき人もなし。君たちはし

も」仲澄「よき身だにも然思さむに、まして仲忠等は、何處なりしを」など言ひて、仲忠「世の中に任みにくきものは、一人すみに優るものなかりける。まかる所し侍

らねば、里とては、只此處になむ。立ち交りくるしうし給ふ所は、いとつきなき心地し侍ればなむ」と言ふ。源侍従、仲澄「そも、あなかま、御心に任せたんめる。

(語釋)
(一) 辨程も左様の事はなし

(二) ちて官を仲忠が

(三) 仲忠を

(四) ちて官が

(五) 仲忠が

(六) ちて官が

(考異)
(七) わびしきーわびしき

御世の中を「仲忠、「あなむくつけ。露だにぞなき」と言ふ。かくてなほ此の君を、人知れず限なく思ふ。殿の中には、宮もおとども、いと恥かしく心憎きものと思したり。おほろけの折に物の音出ださず。されど、たまさかに琴つかまつり、遊びなどす。九の君と聞ゆれど、仲忠には御眼留め給ふ。いかではつかにも見む、と思へど、さるべき折もなし。馴れ／＼しき氣色もなくうち見えて、更に馴れず。されば、いと心にくよてをかしきものになむ思しける。
かゝる程に、九月二十日ばかりの夜、風いと遙かに聞えて、しぐれなんとす。源侍従の君、夜一夜物語りなどし明して、曉に仲忠、色染むる木葉はよぎて捨人の袖にしぐれの降るがわびしきと打ち歌ふ聲いとめでたし。九の君、いとをかしと聞き給ふ。いと人けなきものには思さすなむありける。

畫詞

此處は左大將の曹司にて、源侍従物語し給ふ。物など參れり。男ども

いと多かり。

(東宮殘菊の宴、東宮ちて官を正頼に求む)
(語釋)
(六) 要あるべし
(七) 正頼
(八) 一の行文なるべし
(考異)
(一) 九月二十日一霜月の朔日頃
(二) 數多參り給へり。ここに物し給ふ人々一參り給ふ博士文人等召して文作らせ御遊びなどし給ふ。大將のおとどのみ參り給はず。かくて夜ふかくなりて東宮御遊びなどし給ふついでに、ここに物し給ふ人々
(三) のおとど一ナシ
(四) 文人一ナシ
(五) 作らせ一作らせ給ふ(九)をば「ば」ナシ
(一〇) 入れざる「」ナシ

かくて東宮九月二十日、残れる菊の宴きこし召しけるに、御子たち上達部、數多參り給へり。左大將のおとどは參り給はず。博士文人どもなど數多召して、いとかしこく文作らせ、御遊などし給ふ。事しづまりてこれかれ御物語のついでに東宮、「今日此處に物し給ふ人々の中に、こともなき女、誰持たまひたらむ」左のおとど、季明「此の中には聞えずなむ。平中納言ばかりや持給ひたらむ。それも未だ小さくなむ聞え侍る」源中納言、「左大將の朝臣こそ、女子あまた持給ひて侍るなれ。天の下の人これかれ集へられ果てぬと見給ふれど、猶今一人二人は侍らむ」平中納言、正明「一人のみにはあらず。又も聞く様あり」兵部卿の宮、「さかなの物言や」とてうち笑ひ給ひて、源宰相打ち見合せ給へば、いとかたはらいたしと思ひて、物も宣はず。東宮の、「此の上野の宮物咎めし給ひしこそこともなく聞ゆるや。我等をば懸想人の數にも入れざるこそ辛けれ」左のおとど、季明「仰せごとあらば、早う

- (一) 語釋
- (二) 父正頼にも申込まず
- (五) 「けさ」は「けう」歟
- (七) 正頼
- (八) 其方不妻なりし故

(一) 東宮「東」ナレ

(二) 恐ひナレ

(三) 願きて「て」ナレ

(四) 願きて「て」ナレ
(六) など多かりーなどを多かり

こそ奉り給はめ。畏まりてこそ参らせ侍らめ」東宮、「さしも向ひては言ひにくと思ほえつと、事のついで有らばと思ふを、未だ彼の大將にも物せず、彼の人には時々消息などものすれど、をさく答も物せられずや」と宣ふを聞きて、源宰相、兵部卿の宮、平中納言など、いと侘しと思ふこと限なし。宮召さば必らず参りなむを、如何にせむ」と思ほす。心魂(三)惑ひ騒ぎて何物のけさも覺え給はずなりぬ。

畫詞 此處は東宮、左のおとど、平中納言、源宰相、宮つかさのかみ、殿上人、童など多かり。

かよる程に左大將東宮に参り給へりければ宮、「などか久しく参り給はざりつらむ。神無月の衣更にも、勞らるゝ所有りとなりしかば、いとほしがり申しつるを」大將、正頼あなかしこ。例煩ひ侍る脚病、すべてえ踏み立てで、更にまかり歩きといふものもしはべらで、からく勞りやめ侍りてなむ、斯くだに参り侍りつる」東宮、「いと不便なる事。此處にかく人々召して、聯句一句二句作らせしに、もの

- (一) 語釋
- (二) 闇の夜の錦と言ふをわざと覺東なくいひたる也
- (七) 「などて」なるべし
- (八) 娘どもに其れく架を取れるをいふ
- (九) 東宮に奉る程のよき娘もなし
- (一三) 我れよこすことを忘るるな
- (一五) よもやくれぬ事はあるまじと思ふ
- (一六) あて宮にも
- (一七) 二年頃一月頃
- (一八) しめやかなる折しづきことしづき事
- (一九) いかでナレ
- (二〇) いさやナレ
- (二一) 憎しやナレ
- (二二) 口惜しう拙きのみ
- (二三) うちすさめてのみ
- (二四) これかれに一人
- (二五) だに忘れ給ふをかしーさへ忘れ給ふを

し給はずなりにしかば、闇の夜のながしの心地なんせし」など宣ひて其の文ども見せ奉り給ふ。おとどいとかしこく見はやし給ふ。さておほん物語のついでに宮、東宮「年頃聞えむと思ふ事の有るを、しめやかなる折なくて、え物せぬかな」大將、正頼、何事にかは侍らむ。今日よりしめやかなる折侍らじを、いかで承りてしがな」東宮、「いさや、流石に聞え憎しや」などと、東宮「其處に人々集へらるなめり。己をば其の中に入れられぬ、つらしと聞えむとぞや」大將、正頼あなかしこ。さる仰せごとなき中に、然さふらふべきも侍らず。いと怪しき様にのみ侍るめれど、然言ひてうちすさめてのみ侍らむやはとて、心に隨ひて、これかれに配り給ふことなん侍りし」東宮、「さても残り有る様に聞えしは、それをだにな忘れ給ひそかし。人知れず聞え置きたる心地すれば、さりともとなむ思ふ」と宣へば大將、正頼「甚だ尊き仰なり。いと小さくなむ侍るめる。少し人とならばさふらはせむ」と申し給ふ。宮、東宮「いと嬉しき事なり。彼の御方にも、常に聞えさせむと

(語釋)
 (一)「もはく」は「もはち」なるべし
 (二)父母が
 (三)女一宮、あて宮の母
 (四)東宮には既に多くの御妃妾たちあれば其處が考へものなり
 (五)あて宮の所置につきての正頼夫婦の相談、仁壽殿の女御あて宮を東宮に奉らん事を勤む
 (六)多くの人々が懸想し来るをいふ
 (七)正頼の長女
 (八)其上にあて宮を奉るべきにあらず
 (九)「なにかは」なるべし、「一本、かくは」
 (考異)
 (一〇)又「は」は「ナ」

思ふを、騒がしなど物し給はむ、すゞろなる事なれば、うたて思さむやなどとなむ。時々は聞ゆれど、もはち聞き入れ給はぬ様になむ」と聞え給へば大將いといたく畏まりて、正頼さらば仰せごに從はむ」とてまかで給ひぬ。

畫詞 ことば東宮、左大將のおとど御物語し給ふ。

かよる程に、此の九の君、未だともかくも思し定めず。如何にせまし、と思しわづらふ程に、東宮斯う切に宣ふこと度々になりぬれば、大將のおとど、宮に聞え給ふ、正頼あてこそを如何にせましと思ふに、東宮なむ、「残りあるをだに忘るな」と宣ふを如何にせまし」宮、大宮「何かは。參らせむと思ふを、人々の仕うまつり給ふ宮なれば、如何にせまし。けにかく良き程なりとていますめるを」正頼「此處にもそれをなむ思ふ。兵部卿の宮、右大將などは、凡人にても、事もなき人にこそあめれ」大宮「それもいと切に宣ふなれど、なほ此の九の君をば、少し心殊に思へども、内裏には仁壽殿さふらひ給ふ。いかどは又は。東宮にはなかくはと思ふを、

(語釋)
 (一)時めける妃妾等
 (二)難を受くると否とは
 (三)東宮は近々天皇にならるゝ方なり
 (四)東宮へ上げる事に定めん
 (五)帝の御出ある筈なればとて歎
 (考異)
 (二)宣へらむ一宣ひつらむ
 (三)千人十人
 (七)の君一ナシ
 (八)聞え給へれば一あれ
 (一〇)内裏の一内裏へ

いと時なる人々多くさふらふなれば物しけれど、如何は、御口づから宣へらむをば、畏く否び聞え給はむ」おとど、正頼「何かは。かやうの宮仕は、千人仕うまつれども、人の宿世にこそあらめ。數多の中に、一人こそは、天子の親ともなるめれ。あまた度宣ふを、只今の天子にこそはおはすめれ。承り忍ぶればいと不便なり。思ほす事もこそあれ。此處にも然思ふ給へたらむ」宮、「何かは。宿世は知らねども、さる交らひせむにも、けしうは人に劣らじ」など宣ふ。

畫詞 此處は、おとどの宮と御物語。中のおとどに、君たち御座します。御たち物など參る。

かくて内裏より女御の君まかで給はむと聞え給へれば、御迎へに奉り給ふ。御車御前などいと多かり。曉にまかで給ひて、打ち休み給へれば、未だ對面し給はず。宮内裏のわたり給ふべかなりとて、御裳ども引き懸けなどしておはし給ふ。大宮明くるつとめて中のおとどにわたり、君たち裳引き懸けつとおはします。宮、兵衛

- (語釋)
- (一)女御の御殿
- (四)今度は内裏に大守長
く居られし事を
- (七)懐胎か
- (八)「御息所」は「女御」
のあやまりか
- (三)仁壽殿女御
- (考異)
- (二)其方：給へつれーそ
こにまうてむとこそしつ
れ
- (三)来むとーさふらはむ
と
- (五)覺束なき事がちーそ
が覺束なき
- (六)辛うー辛く
- (九)いさやーしらず
- (一〇)などかは：つるに
一何かは久しかりつかし
- (一一)ばかりーナン
- (一二)ぞはーナン

の君して、西のおとどに、大宮其方にや参り候ふべき。此方にや侍る」と聞え給へれば女御、仁壽みだり心地のいと惱ましく侍れば、打ち休みてなむ。今只今其方に参りて」と聞え給ひて、すなはち渡り給へり。宮、大宮其方にこそ参り来むと思ひ給へつれ。いと久しく長居し給ひつる度にこそありつれ。覺束なき事がちになむ」女御、仁壽「暇聞ゆれども、をさく許し給はずなど有れば、えぞまかでぬや。此の度は辛うじて」など聞え給ふ。宮、大宮「惱ましけに聞くは例の事か」御息所「仁壽」いさや、そが見苦しき事」宮、大宮「などかは。さうぐしかりつるに。何時ばかりよりぞは」此の二月ばかりなむ、例に似ず惱ましく侍れば、それにかこちてなむ、今暫し一度にまかでよ」と仰せ宣へれ」と申し給ふ。おとども此方におはしぬ。方々の君だち皆渡り給へり。斯くまかで給へるもさうぐし。とて君だちの御方より、物いと清らにして奉り給へり。

畫詞

中のおとどに、君だち、宮渡り給へり。内裏の御方の御前に、物参り

- (語釋)
- (一)あて宮をいふ
- (五)女御自らをいふ
- (六)「などとて」なるべし
- (七)申込が餘り多き故
- (一〇)あて宮をいふ
- (一三)嵯峨院の第四の皇女を云ふなるべし。承香殿といふ
- (一四)羽振よく
- (一五)左大臣季明をいふ歎
- (考異)
- (一)の序にーし給ふついでに
- (三)侍りつるー侍る
- (四)御息所にてむやー女御の君生をうなこそきやうのことはすれたばかり聞えむかし
- (八)ちとー君
- (九)人多くー人いと多く
- (一一)思ひーナン
- (一二)良きーナン

たり。おとどにも参る。臺いと多かり。御物語の序に御息所、仁壽「宮いと良き程になり給ひぬめるを、などか心もとなげにては」宮、「それをなむ思ひ侍りつる。如何はすべき。宣へかし」御息所、仁壽「けに斯様の生女こそは、物たばかりはすめれ。たばかり聞えてむや」などて笑ひ給ふ。女御、仁壽「まめやかには、早うともかくも宜しき様に物し給へ」宮、大宮「いさや、所狭きまで多ければ、あわてぬや。一日おとど宣ひしは、東宮なむ、いとまめやかに、これをだに忘るなと宣ふを、如何にせまし」と宣ふを、何かはと思へど、やんごとなき人多くさふらひ給ふなる宮なれば、此の人たちの果敢なくて交らひ給はむに、如何ならむと思へば、未だともかくも思ひ定めでなむ」御息所、仁壽「いと良き事なり。さ思したれば、只今は此の宮にこそは、良き人と有る限は参り給はむ。只今は宮のみこそは時ごとにおはしませ、それを離ちてはけしうはなかるべし」大宮、あぢきなし。數多有れど大殿などこそは少しやんごとなくては物し給

(語釋)
(一)新に御妾を納れたしと東宮が

(二)帝の養御に侍するは

(三)「宮は此の宮の御弟なり」は傍註の擡入せなるべし

(四)東宮に差上げての結果如何と

(五)仁壽殿腹の皇子等の殿

(六)目さとく

(七)正頼

(八)「左大辨」なるべし長子忠澄

正頼邸の神樂の準備

へ。されど一日も、いかで人參らせむとなむ宣ふなりし」仁壽「かく思すにこそ有りけれ、「我がもとに若き人のなき事。いかでよき人もがな」と宣ひしは。早う參らせ給へ。人は數多有れど、かよる交らひはあぢきなきものなり。只今は、内裏にも如何多くさふらひ給ふ。されどまうのほり給ふは、一人二人こそあれ。なほこそ物せらるめれ。それにはな思し障りそ」など宣ふに、宮は此の宮の御弟なり。宮、大寫いさや。らうたしと思ふものを、若し如何ならむ、と思ふぞ恐ろしきや。御許にもあえものには怪しうはあらじかし」仁壽「あなゆとしゃ」など笑ひ給ふ。宮、東のおとどに渡り給ふとて、大寫「此方に、人々いさとくさふらへ」と宣ひ置きて渡り給ひぬ。

畫詞 此處は君だち物きこし召す。宮、東のおとどに渡り給ふ。御たちいと多かり。うなる四人、御几帳さしたり。方々より皆物参りたり。

かくて十一月になりて、御神樂し給ふべき設し給ふ。おとど右大辨の君に、正頼「此

(語釋)
(一)「これら」は「こころし」歟
(四)少將の下「良則」を落せるか

(考異)
(二)「しあひて」いかにしあひて

(三)才「撰びて」召人なども撰びてその行事は心とめて

(五)近治「はるちか

度の神樂は極月すべき度なるを、少しよろしくせむとなむ思ふ」辨の君、忠澄「かよる事は始むる時はいと嚴めしくはせて、後々優るなどなむ申すこと侍る」おとど、正頼「なほこれら上達部にしあひて見給ふに、いと物はかなくて物しからむ。才ども聲よろしからむなど撰びて物せられよ」と宣ふ。辨の君、政所に就きて、家司どもに、此の事仰せ給ふ。忠澄、御神樂十三日せらるべき事仰せらるよを、「人々の見る所も有るを、同じくば少しよろしくせむ」となむ仰せらるよ事あめる。左近の頭の少將、又此の少將滋野和政、政所の別當に定め申す。只今内裏の御神樂の召人は、左近尉松方、左兵衛尉時蔭、右近尉平維則、左衛門尉藤原師直、平維輔、宮内少輔源直松、右衛門輔藤原遠正、内藏允平忠遠、内舍人行忠、通忠、雅樂の允楠武、むらきん、小松俊康、近治、大和介直明、信濃介兼幹など、すべて三十人の者どもこそは、只今の逸物には侍るなれ。これ等は、内裏の召ならでは、たはやすくまかり歩かず。さりとて、殿の召には参りなむ。それ

(語釋)
(一)近衛の舍人の東遊に
達したるものをいふ

(五)「神祭らせなど」歎

(八)「かくれず」は「か
かれず歎

(考異)

(二)相摸人などの一相摸
の一相摸人の

(三)事は一事はた

(四)こそは「は」ナシ

(六)その一所の

(七)ひるのナシ

に皆廻文を作りて遣はさむ」とて、良則此の御神樂の事、才どもの饗の事、又
祿ども、物のふし、舍人ども、此の祿賜ふべき布の事など定め給ふ。思違布は、甲
斐、武藏より持てまうで來たりしを、還饗の祿、相摸人などの祿にみな給ひて
き。只、信濃の御牧より持て來ためる二百反、上野の布三百反なむ、政所にさふ
らふ。それをこそはせしめ給はめ。御饗の事は、美作より米二百石奉りためり。
伊豫の御封の物御莊のものも、持てまうで來ためれば、それ等してこそは仕うま
つらすべかめれ。さて殿のうちのかみまいらせなどし給ふ事、此の御神樂の時こ
そはせしめ給はめ。その事ども、いと畏くせらるゝ業に侍るめり。それも、此の
御神樂のひるの事にせよとなむ仰せられつる。ことごとくには、此の事、朝臣と少
將と諸心に、ことかくれず扱ひものせられよ」と言ひ置きて立ち給ひぬ。
畫詞 此處は政所。辨の君、めぐらし文作りて才ども召し集む。米いと多く
持ちて集れり。

(語釋)

(一)正頼

(二)「はろ」は報にて回
答なるべし

(三)正頼の妻

(四)右兵衛佐師澄、正頼
の二男

(七)巫

(考異)

(五)三十人二十人

(六)御くう一御かつち一
御かぐら一御かつ

(八)四人二人

少將 良則才のめぐらし文あるかせて奉る。左大辨の君に奉り、おとどの君に奉る。
正頼「これは、やむごとなき人々ほうし給ふめり。祿など清らかに、させ給へ」と
申し給ふに宮、大宮「いさや、常にせらるゝ事なれば、眼馴れて何事の清らをか
む」など聞え給ひて、すけの君して、伊勢守に絹召しに遣はす。白絹三十四匹奉れ
り。召人三十人がほそなが一襲、はかま一具つなむ設けられける。
畫詞 辨の君、御たち物裁ち、染物せらるゝ。おとど、宮おはします。伊勢
より絹持て参れり。政所に葉盤などさす。山より櫛持て参れり。御神樂の日騒
がしかるべしとて、十一日良き日なれば、御くう参るとて政所のよしる。
御神樂の日になりて、多くの幄ども打ちて、寢殿の御前になく設けたり。日暮
れて、才ども數をつくして参り、御神子四人さふらふ。おとど宮河原へ出で給
ふ。御供に男君たち四位、五位、六位、合せて八十人ばかり仕うまつる。黄金造
りの御車二つ、人給の御車五つして出で給ふ。御車皆寄せ騒ぐ。河原より暗く

神樂の當日。兵部卿親王、東宮のあて宮に熱心なる趣を傳ふ。宴會

(語釋)

(一)此の處文つゞかず。誤脱あるべし

(二)「御子たち」衍文なるべし

(三)左大將は右大將なるべし。右大將は兼雅

(四)式部卿は民部卿なるべし。民部卿は實正

(五)「四五人」衍文なるべし

(六)大官

(八)未詳

(九)誤脱あるべし

(一〇)誤あるべし

(一一)神樂歌なり

(考異)

(七)童一どら女
(二)二十人一三十人歟

歸り給ふ。御神子四人下りたり。池山もいと面白し。上達部御子たち、右のおとど、左大將、式部卿、左衛門督、平中納言、源宰相、御子たちは例の兵部卿、中務の親王など多く御座します。例の仲頼、行政、仲忠、例よりもいとめでたく装束きて、心遣ひして出で來たり。かくて皆こと始まりぬ。四五人女君たち、女宮よりははじめ奉りて、方々の君だち五人集ひおはします。方々の御子達八十人ばかり童二十人ばかり、下仕さばかり、南の庇に客人、御たち、簀子に仲頼、行政、仲忠、殿のしようたち、さながら此處に火焚きをり。さへのあく、つくゑなどして、物のふけしどもあなたの事言ふ。召人二十人ながら歌唄ふ。
榊葉の香をかぐはしみとめ來れば八十氏人ぞまとるせりける
優婆塞が行ふ山の椎がもとあなそばくしとこにしあらねば
やひらでを手に取りもちてさよ深く我がをりて來る榊葉の枝
やまふかく我がをりて來る榊葉は神の御前にかれせざらなむ



- (一) 語釋
- (二) 大宮
- (三) 東の...よそひて中
- (四) 民部卿の御方なる
- (五) 正頼の五女
- (六) 嵯峨院の太后宮
- (七) 大宮等の噂を
- (八) 「宮にも」なるべし、宮は大宮
- (九) 大宮等の噂を
- (一〇) 「宮にも」なるべし、宮は大宮
- (一一) 御世も一わが
- (一二) 短き心地するを
- (一三) 東の...よそひて中
- (一四) 一日も「も」ナレ
- (一五) 御事もあはしまさざりけり
- (一六) 御世も一わが
- (一七) 短き心地するを

など唄ふ程に、兵部卿の宮、あこ宮して、宮に御消息聞え奉れ給ふれば、東の簀子に御座よそひて對面し給へり。兵部卿の親王、「月頃、時々式部卿の宮の御方に参れど、折なくて、御消息も聞えさせぬを、今宵松方、時蔭が聲は、必ず聞召すらむを、此處にも近くさふらふを、かよる序にとてなむ」宮、大宮「此處にもおはしませ時もありと承れど、心あわたしくなると侍りて、え聞えで、月頃にもなりにけり。如何にぞ、嵯峨の院へは参り給ふや。上惱み給ふと承りしを、如何におはしますらむ。えこそ参らね。そこはかたなくあわたしくして、萬の事怠りぬれば」など聞え給へば親王、兵部「一日も参りたりき。異なる御事もおはしまさざりき。例の御熱のおこり給へるなるけり。さて御上どもをなむ宣はせし。「東宮にも大將殿にも久しく對面せぬ事。彼の御子たち、若き人たちも見てしかな。御世も行く先短き心地するを」などなむいと心すげに宣ふめりし」宮、大宮いと醜き人どもなれば、御覽せむから御心劣りやせむと、恥かしくてなむ。今さりとて率

- (一) 語釋
- (二) 正頼の子どもは嵯峨院へ行きたがり居る由也
- (三) 宮は東宮をいふなるべし、下の越すべて東宮の事と聞えたり
- (四) 「こゝに」は「こゝ」の誤なるべし
- (五) 正頼方で振リつふして居る事歟
- (六) 正頼
- (七) 正頼が考へ中なかのかも知れぬ
- (八) 又わざ／＼申上ぐべし
- (九) 事宣ひて一事など宣ひ出でて
- (一〇) 「は」は「ナレ」
- (一一) ことを一ことをと
- (一二) 思ひつる一思へる

て参らむ。御子たちは、常に参らむと聞え給ふめり」など聞え給ふ。親王、兵部「人宮の雪の賀し給ひしに参りて侍りしかば、御物語の序に、こゝにある人どもの事宣ひて、如何にぞや。殿には参るや。怪しく、大將に申す事の有るを、能く聞き忍び給ふかな。其の由は、御方には聞えさせ給ひてむや」と宣はせしかば、「何かは。承りて」など聞えさせしを、「かく事の由は委しくはあらで、只彼處に聞ゆる事有るを、さは知り給へりや。御心留め給へ」となむ有りし。聞えさせずも有りけるを、何事ならむ」と聞え給へば宮知らず顔に、大宮「知らず。何事にかあらむ。承りけむ人は、忘れやしにけむ」と聞え給へば、兵部「言はで思すにやあらむ。御心にこそは定め給はめ」など聞え給ふ。序にや思ふ事をほのめかし聞えましと思ほしけれど、有るまじきことを思しかへして、兵部「さるは、聞えさせむと思ひつる事有りつれど、只今忘れぬ。よし、殊更にを」と聞え給ひて立ち給ひぬ。かくて夜更けもて行くまよに、歌唄ひ物の音聲どもいと豊かに出で来て高く面白

(一) ちて宮のちかげ

(二) 「ごて」は葦のかけ物なりちて宮を穿ひきたる代りに與へんといひしをかく言へる也

(三) 各自に藝能を言ひ立てて其の機をして遊ぶ當時の戯れなるべし

(考異)

(四) いまつらさのかや又まつらさのかや又まつらさのかや又まつらさのかや又まつらさのかや又

きこと限なし。かよる程に侍従仲忠、いとになく装束きて、夜打ち更けて出て來

たり。あるじのおとど、正頼「なほ此處に」とて御前に呼びすゑて、正頼「今宵、彼

の御徳の嬉しさは、主のおはしたるなり。彼のごて物は、今宵神業にもあるを、

今一度彼の物の聲聞かせ給へらば、只今も奉りてむかし」など欺き給ひて、御琴

取う出て、切に弾かせ給へども、更に手も觸れず。内に見給ふ君たちなども、多

くの人の中に心憎くふかき勞なりと見給ふ。

斯うて、御神子など舞ひ果てて、才どもに、心々にほそなが一襲、はかま一具づ

つかづけ、物のふしどもに皆物かづけなどして、唯の遊びの人々いと二なく遊ぶ。

仲忠簫の笛、行政たどの笛、仲頼箏、あるじのおとど倭琴、右大將琵琶、兵部

卿の親王等の琴、同じ聲に調へていと二なく遊び給ふ。かくて皆才名のりなです。

あるじのおとど、正頼「仲頼朝臣何の才か侍る」仲頼「山伏の才なむ侍る」正頼「いで

仕うまつれ」「いまつらさのかや又」正頼「行政朝臣何の才か侍る」行政「筆結の才

(語釋)

(五) 仲忠

(六) 仲澄、侍従の君の御曹司に「なるべし

(考異)

(一) わたりがたきものは一わたりがたくかきがたきものは一わたりがたきかきものは

(二) 唯冬毛なりや一たど毛ゆふことなり一毛ゆふことなり

● 仲忠の戀情切なり

(三) 難波：ぞや一ひとりあらずのみや

(四) の夜や一ナレ

なむ侍る」正頼「いで仕うまつれ」行政「わたりがたきものは、唯冬毛なりや」正頼「仲

忠の朝臣何の才か侍る」仲忠「和歌のさえなむ侍る。難波津にやある。冬籠りのこ

ろぞや」正頼「仲澄何のさえか侍る」仲澄「渡守のさえなむ侍る。あな風早の夜や」

とてかづきわたり皆入りぬ。

畫詞 寢殿に君たちおはしまして、物見給ふ。親王たち、上達部、御酒いみ

じう進みて、人々と多かり。才の男に、君たち、御衣ぬぎて皆々かづけ給ふ。

遊び女ども二十人ばかり、いとになく装束きて琴弾き遊ぶ。

かくて皆こと果てて、召人どもまかで、上達部まかで給ひて、藤侍従、殿の侍従

の君、御曹司に籠り臥し給ひて、仲忠「御前にて、兵部卿の親王の強ひ給へるに、

更にすべて物も覺えず、食べ酔ひにけりや」など言ひて仲忠、「いと物覺えずなり

にけり、聞えむこと咎め給ふな」源侍従、仲澄「今宵の事、誰もえ咎め給はじ。神も

咎め給はずや酔の言をば」など言へば仲忠、「此の曉に、内に琴遊ばしつるは、

(一)かの琴の音に見ぬ戀
にあらがれて
(二)一なし。此處誤脱
あるべし
(三)誤脱あるべし

(四)正頼の妻大宮
(五)嵯峨院の太后

(考異)
(六)六十一ナシ

(七)仕り給はむ一仕らむ
大宮、母嵯峨院の太后の六十の賀を行はんとす。其の準備

(八)御厨子一ナシ
(九)より大殿に聞え給ふ一の事などし給ひて御年の足り給ふに

誰と聞ゆるぞ。仲忠こそ只今死ぬべけれ」仲道「などか命短くは。琴弾きつるは、仲澄が妹の九に當り給ふなり」仲忠「いと有り難き御琴の聲をも仄かに承りぬるかな。あな侘し。如何様にせむ」など言ふ。侍従、仲道いでや、君の耳とどめ給ふばかりはえしもやは」など言ふ。仲忠「辛うなむ、只今一二のひき給ふと思ひさふらひつる。されど、いと哀に今めける御ことありけるものを」など言ひて思ふこといと限なくなりぬ。

畫詞

此處は中の大殿に、君たち、東のおとどのきみ、御たち。侍従の曹司に侍従物語す。

かくて此の君たちの母宮は、年頃母後の御六十賀仕り給はむと思ひて、かねてより御設けさせ給ふ。御厨子、御屏風よりはじめて、うるはしき御調度どもを、綾錦にしかへして、大殿に聞え給ふ。大宮「明けむ年六十になり給ふ年なるを、仕奉らむと思す。兵部卿の宮に對面して、嵯峨の院へやまるとり給ふ」と聞えしか

(語釋)
(一)以下兵部卿の宮の語りたる太后の詞也。上よりのつゞきあるし
(二)賀の祝の事
(三)賀の祝をかねて
(四)賀の祝には法會を行ふ故法師に布施すべき法服を要する也
(五)當日の馳走の事
(六)巨勢氏曰、此御賀は翌年の春なれば「夏秋方もし給へ」の詞は衍文なるべし
(七)正頼の妻大宮上
(八)正頼の三女の夫源實正
(九)なせ斯く行届かぬならんと
(一〇)我が勝手なる事のみ其方を使ひて
(考異)
(一)かく一ナシ
(二)いとあれ何かは事どもは皆具したためるを
(三)がてら一がてらも一がてらにも
(四)給ひてむ一給はむ

ば、「常に参る。怪しく己が参らぬ事。世の中の常ならぬうちに、かく行く先も少なくなりぬる心地するに、若き人々も見まほしきこと」など宣ふなるを、けいとあさましう参らねば、然も思すらむ。いかで此の、己が思ふ事して、此の子ども率て参らむ一おとど、正頼「いと易き事にこそあれ。來年こそは仕り給ふべき年なれば、御子日がてら参り給へかし」宮、大宮「いとよき事なり。事どもは皆具したにたんめるを、只かづけ物、法服どもの事なむ未しき」正頼「かづけ物は何かは。俄にもせられなむ。先づ御精進のことをさせ給ひて、其の法服などの事は夏秋がたもし給へ」宮、大宮「さらば、何かは、御前の折敷の事、さては舞の童へなど調へさせ給へ」おとど、正頼「御前の事は、大殿にこそは聞えつけたれ。又舞の童への事は民部卿に申しつけたる、自から事はじむと見給はど、急き給ひてむ。正頼が侍る効なく、いかで、と思さるゝ事の、いと怪しき。かねてより一つの事も缺かずして、只年のかへらば候はせ奉らむ、とこそ思ひしか。己が急ぎをのみ世

- (一) 先の長き事はまづ後廻しにせんと思ふといふ事歟
- (二) 長子忠澄
- (三) 此處誤脱あるべし
- (四) 大宮をいふ
- (五) 六十に滿つる
- (六) 大宮に此位の事に心配させぬをせめての罪はるほしにせんと思ふ
- (七) さだまさ一實正なるべし
- (八) 思ふぞ一ぞナシ
- (九) まだ一ナシ
- (一〇) 仕りぬべきに持て一仕るべきに

と共にせさせ奉りて、此の事の心もとなきこと」などいとよく畏まり申し給ふ。宮、大宮、何か、具せぬ事も多くもなしや。いかど、多く急ぎをのみせらるれば、長閑きことと思ふぞかし」など聞え給ふ。

(一) かくておとど、例の左大辨の君、御子の君たち御座します。正頼「此處に此の早うよりと申す事の、此の物し給ふ人の、年頃歎き申し給ふ事を、正頼世とともに怪しからぬ變などし給へる内に、えまだ物せで、今に不用なること多くなどして、來年足り給ふ年なるを、若菜など調じて、御子日に參らせむと物せらるよを、其の事もいかど物すべき。又舞の童へのこと、如何に定められけむや。正頼が數にも侍らぬ身にて、かよる御中らひにまじり侍る罪代には、かくばかりの事を思はせ奉らぬをだにとぞ思ひ給ふる。いとほしくなむ」と宣ふ。民部卿、實正「けに然思さるべき事なり。舞の童のことは、さだまさか承りにし事なれば、仕りぬべきに、持て侍るもの十四人ばかりは、様々に從ひて仕らせよと、皆仰せ侍りぬ。今六

- (語釋)
- (一) 忠澄なるべし
- (二) 言ひ付けたり
- (三) 君は
- (四) 正頼の末子
- (五) 威儀納めの饗應歟
- (六) 正頼七女の夫藤原忠俊
- (七) 大宮
- (八) 「西のちとににも」歟、東の大殿は仁壽殿の皇子たちの御殿也
- (九) 「大宮の」の、衍文なるべし
- (一〇) 未詳
- (考異)
- (四) 給へば「は」ナシ
- (一〇) 縫ふ一縫ひ

七人は、殿の君たち、二所はおはしましなむ。實正が童、大臣殿の小君、又辨の君など、此の御中より舞ひ給ひなむ。他事どもも、有べからむことは仕うまつらむかし」など申し給ふ。おとど、正頼「みな人々に事一つつつをなむ聞えたる。御方には、此の舞の童へとのへ給へば、此の宮あこまろに舞習はすべき事などをさせ給へ」民部卿、實正「宮あこ君は落躑を舞ひ給はむなむよかんめる。今、舞の師召して仰せ宣はむ」と聞え給ふ。右のおとどにはいきをさめのおもの事聞え給ふ。左衛門尉の君には、御箱どもなどの事一つつつ聞えつけ給へり。

(七) かくて宮には、御衣ども、かつげ物裁ち縫はせ給ひ、いと畏くいそぎ給ふ。君たちの御衣ども、人々の装束どもなど、中のおとど、東のおとどにも物配り給ふ。

畫詞 御たちいと多く居て縫ふ。染物す。大貳のもとより、綾三十疋持て來たり。大殿の御子どもの君たちに物聞え給ふ。美濃より絹六十疋、丹後よりこうちきぬ百疋。

(語釋)
(一) 實正

(二) 「いへあこ君」なる
べし。正頼の末子

(三) 誤あるべし

(四) 未詳

(五) 此處誤脱あるべし

◎ 藤末の御讀經

かくて十一月より、民部卿殿の御方に、舞の師するて、君だちに舞習はせ給ふ。宮
あこ君落躑、いちあこ君陵王、若御子探桑老、大殿の小君萬歳樂、辨の君の御子扶桑
樂など舞ひ給ふ。舞の師秀遠、兵衛目遠忠など言ふ逸物の限、いと多かり。

畫詞 此處は民部卿の殿の御きたの方。御たち騒ぐ。君だち物參る。舞の師
ども物食ふ。君だちの御装束させ給ふ。此處は右のおとどの御方。御折敷の
こと、銀の折敷二十、中のたいする並むべき事、なかねてより設けられたる
物なれば、いと厳めしく清らなり。右のおとど、人々多くさふらふ。此處にて
御臺調する事定め給ふ。銀の鍛冶召して、御杯ども、かうともの仰せ給ふ。折
敷どもの事など。

かよる程に月立ちて、中の十日ばかりに、年の終の御讀經させたまふ。大殿若
經三日、禪師たち二十人ばかりして結願の夜御佛名、今日は比叡の座主只今の逸
物をなむ、讀經の禪師たちも、僧綱たちも、比叡の、奈良の東大寺、やむことなき



(語釋)
(一) 誤脱あるべし、或は「さうふ三ともをくる」
に作る

(四) 「よとめ」歟

(考異)
(二) まんぞく—まんまく

(三) 居立ち—居たり

(五) 此處は—此處には

(六) 所には—所は

(七) 仲忠—ナレ

(八) 夜は近江守—夜の非
時美濃守

限り、さうふみどもおくる。

かくて、陸奥守種實がもとより、(一) 錢まんぞく(二) 奉れり。米は西の御倉に三百石積

まれたり。おろして使はる。倉は四つを、三つには米ども、一つには金など積まれ

たり。君たちなんども、互になししつらひ給ふ。中のおとど、東の方をなむ御堂

にしたりける。僧綱の方は、君だちしつらひ給ふ。然らぬは、さふらひの男ども

仕るものの中に、便ある所をなむ、僧坊にしける。十二日より御讀經始む。

畫詞 此處には政所。中務丞良則居て、御讀經の僧具のこと行ふ。家司ど

も居立ち、納殿より、細布、さとめ、紫海苔など出だす。僧坊ども、弟子、童子

などいと多かり。此處は臺盤立ててし据ゑたり。中のおとど、御讀經の所には、

花机に經ども積みたり。大徳たちに經配る。經讀む禪師たち有り。此處に人々、

仲頼、行政、仲忠、右近少將二人、受領どもなど、數知らず多かり。堂童子は、

初めの夜は近江守、次の夜は攝津守。

かくて三日と云ふ午の時に、結願して、大徳たち御布施に、白絹十疋ともに行ふ。夜さはりは御佛名せらるれば未だ歸らず。

畫詞 これは東の中あけて、君だち物見給ふ。夜さりの料に、花造らる。い

と多かり。方々君たちは、おひものし給ふとて、急ぎ給ふ。殿も、になく急ぎ

給ふ。此處は中のおとど。宮導師のかづけ物かづけ給ふ。御たちいと多かり。

導師の前の物、政所急ぐ。人々多かり。大徳たちの非時、近江守、いと嚴めしう

したり。皆配る。導師の前の物ども、いと多かり。此處は佛名の所。大徳たち

次第してひき率て、七八人參る。導師請じて事はじむ。次第ども、例の仲忠、

行政、仲頼。おとどの御子の君だち、御子ども、いと多くおはします。さふら

ひ人いと多かり。

御佛名はてて、晦日になりぬれば、正月の御装束いそぎ給ふ。

かよる程に此の九の君聞え給ふ人々は、あぢきなく年の還るをも苦しと思ひ、如

(語釋)

(一) 未詳

(二) 食事

(考異)
(三) 此處は—ナレ

(四) 正明、實忠、歌をあ
て宮に贈る

(語釋)
(一)誤脱あるべし

何ならむ御心の付きまさる思さるよこと、誰も誰も劣らず。霜のいと白き朝に、
平中納言殿より、

正明思う給へ懲りぬべき御氣色は、いと能く見給へ知りながらなむ。

ひとりのみ夜なく、霜の寒きにはしのぶの草も生ひすやあるらむ

かく聞えさするこそいとおふけなけれ。此度も覺束なく。

と聞え給へど御返りなし。

源宰相殿より、

實思朝なく、袖の氷のとけぬかな夜なく、結ぶ人はなけれど

いとこそ怪しけれ。

と聞え給へれど、御返りなし。

かくて晦日に、國々より節料いと多く奉りたり。

畫詞 これは中のおとどに、君だちおはしまして、雪の梅の木に降り懸りた

るを御覽じて居給へり。御たちいと多くさふらふ。此處は政所。料くばり、御

魂のいそぎす。松木、炭、餅など有り。宮、朔日のいそぎし給ふ。

かくて年越えて朔日に、君だち御装束いとめでたくして、おとどを拜み奉りに

参り給へり。いと嚴めし。東のおとどに、君だちも参り給へり。

畫詞 君だちに参りたり。中のおとどより東のおとどに移り給ふ。うなる

二人、御几帳さしたり。御たち二十人ばかり。これはおとどの御掣の君だちな

どに、節供参り、おほ御酒参り、いみじくす。

かくて賭弓にみぎりは變すべし、とて心まうけすべき聞え宣ふを、正頼「いかで心

ことにせむ。去年の還饗を右大將のいと清けにし給へりしかな。三條こそ、怪し

う心有るべき人なれ。此の侍従の母よりめでたきなどもなしや「宮、大宮「然らむか

し。まさに仲忠が母にて右大將の持たまへらむ人、おほろけならむやは」と宣ひ

て、かづけ物の急ぎし給ふ。

(語釋)
(一)歳暮の魂祭りの用意
(二)正頼

(四)此處誤脱あるべし

(五)「ひだりは」歎

(六)俊藤女

新年、正頼郎の賭弓の饗の準備

(考異)
(三)「もとどを」を「ナシ

(七)など一ナシ

(語釋) (六)正頼の娘たち

源仲頼の素性。宮内御在原忠保の姫になる

(七)仁壽殿女御

(八)「よする」は「よすが」なるべし

(九)「藤侍從仲忠」は「源少將仲頼」なるべし

(一〇)髪にちぢぬは合點て居ながら

(考異) (一)源一ナレ

(二)ナメて一ナレ

(三)ナぐれ一ナ

(四)なく一なし

(五)こと一ことよま

【畫詞】宮かづけもの裁ちて配らせ給ふ。人々縫ふ。響のまうけ政所にす。おとど、宮、物語し給ふ。

かくて右近少將源仲頼は、左大臣祐仲の大殿の二郎なり。此の少將、此の世の中に、めでたき物に言はれけり。穴あるものは吹き、緒あるものは弾き、萬の舞敷を盡して、すべて千種の業、世のつねにすぐれ、容貌もいとこともなく、世の中の色好になむありける。萬のこと、この人の手かけぬはいと悪し。帝と東宮にもいとなく思す。御笛の師なれば、常にさふらふ。いとかしこく時めきて、只今の殿上人の中に、仲頼、行政、仲忠、仲澄に優る人は無し。此の四人が願ひ申さむ官は、年に五度六度も賜ひなむ、となむ思しける。左大將殿の君たちも、御息所只今の時のさかりにておはしませば、其の御ゆかりよするをば、我が御位をも譲りてむ、と思せど、なほ其の中に、藤侍從仲忠、いみじき時の人なりければ、萬の人、棲ますとは知りながら、掣取り給へど、夜を重ね給ひてとぶらふなし。怪

(語釋)

(一)今兼雅の持物たる銀織の院の女三宮、こゝは前の事をいへる也

(三)仲頼の心

(五)我が女を妻にして一生を終るやも知れず

(七)通はぬ様になりたればとて

(一〇)「天下に綾錦」歟

(考異)

(一)院の帝の一日の天下一の

(四)父主「父」ナシ

(六)盡さむ一すまむ

(八)院一の院

(九)ためるをためれざるを

(一一)中の一下に

しき戯れ人にてありける中に、仲頼は、院の帝の三の宮掣取り給へど取られず。銀、黄金、綾錦をも、物とも思へらず、怪しく類なきすきものにて、天女降り給ふらむ世にや、我が妻子の出で來む、天の下には、我が妻子にすべき人無し、となむ思へりける。さて、浮きてのみありけるに、宮内卿在原忠保の女を、世の中に名高く聞ゆる有りけり。其の父主、もとより勢なくわろき人の、無徳なる官にて、年頃経ければ、宮内卿いとわろきに、此の女斯くめでたう、東宮にも「参らせよ」など宣はすれど、え宮仕などにも出ださずなどしてありけるに、此の仲頼の少將、切によばふ。そのかみ父主、忠保「かよる戯れ人と名はふるとも、我が女につきて世を盡さむとも知らず。宿世をも見む。たとへ棲ますと云ふとも、我のみかよる恥を見ばこそあらめ。院の帝の三の宮、大臣、公卿の御女も、さこそ捨てられたるを見つと、こよらの人の掣にとり給ふも、様あらん。天下綾錦を敷きて飾るとも棲ますば棲まじ。我が此の葎の下、藁芥の中に住むとも、宿世の

(語釋)
(一)仲頼の比娘を愛する
こと言語道斷なり

(二)忠保の女以外の女の

(三)再び夫婦と生れかは
らん

(考異)

(四)の君だち三人の子
二人一御たち二人

(五)母君一母この

(六)左方勝ちにければ一
左かちければ

● 正頼郎の賭弓の響。
仲頼あて宮を見て心を感
はす

あらば棲みなむ。男は、勞はるにもつかぬものぞ」など言ひて、此の女に掣取り
つるに、思ふと言へばおろかなり。婚はせし夜よりかい付きて、哀にいみじき契
をす。片時外にとまる事なく、稀に内裏に参りては、すなはち急ぎまかでつよ、
例ありしやうに宮仕もせず、限りなく思ふ。他人の、めでたき装束し、沈、麝香
にしめてしつらひ、めでたくてあるをば、鬼、獸の住まふ山にまじりたる心地し
て、只此の女世になきものと思ふ。けにめでたきこと限なし。仲頼「此の世に經む
限は、さらにも言はず、後の世にも、かよる中に生まれかへらむ」などさへ言ひ契
りて五六年あり經。

畫詞 此處は宮内卿殿。女、少將の君だち三人。父主母君、かたち人と物語
してあり。

かよる程に、正月十八日の賭弓の節に、左方勝ちにければ、左大將殿に、つかさ
の佐たち、上達部、親王たち、左右とおはしたり。設になくせられたれば、座に



(考異)
(一)少將—中將

(二)二つが間より—二つがひのさまより

著き給ふ。御机参り、土器はじまり、御箸下りぬ。仲頼の主、なき手出だして遊ぶ。垣下には行政、樂所は仲頼、そこらの遊び人どもにます人なく遊ぶ。内裏の御息所よりはじめ奉りて、數多の君たち宮々、數を盡して並みおはしまして御覽するに、こともなき人どもなり。寢殿の南の廂に、四尺の御屏風北に立てそれに添ひて少將著く。柱に並びて上達部御子たち著き給ふ。かくていと面白く遊びのよする。仲頼、屏風二つが間より、御簾の内を見入るれば、母屋の東面に、此方彼方の君たち、數をつくして御座しまさふ。何れとなくあたりさへ耀く様に見ゆるに、魂も消え惑ひて物覺えず。怪しく清らなる顔容かな、と心地そらなり。なほ見れば、有りしよりもいみじくめでたく、あたり光りかがやく様なる中に、天女降りたる様なる人あり。仲頼、これは此の世の中に名だたる丸の君なるべし、と思ひ寄りて見るに、せむ方なし。限なくめでたく見えし君たち、此の今見ゆるにあはすれば、こよなく見ゆ。仲頼、如何にせむと思ひ惑ふ

- (語釋)
(一)少將—衍文なるべし
- (三)仲頼の心
- (四)「せむと」なるべし
- (七)以下仲頼の心
- (考異)
(二)なく—なし
- (五)たち—たちも物かづき給ひて
- (六)など賜ひて—などして
- (八)盡してむ我が—盡してむずる
- (九)それは—それも

に、今宮と諸共に、母宮の御方へおはする。御後手すがたつき、譬へむ方なし。火影にさへこれはかく見ゆると少將思ふに、ねたきこと限なく、われ何せむに、此の御簾の内を見つらむ、かよる人を見て、只にて止みなむや、如何様にせむ、生けるにも死ぬるにもあらぬ心地して、例の遊、將まして心に入れてし居たり。夜更けて上達部御子たち、物かづき給ひ、一の舍人まで物かづき、祿など賜ひて皆立ち給ひぬ。曙に少將、此の殿を出でむまよに死ぬる身にてこそあらめ、我がする業とて今日し盡してむ、我が思ふ人も聞召せと思ひて、無き手を出だし遊びせめて出づ。他人々も出でぬ。仲頼出で果てで立てるを知らで、出づる人を見ると、御方々の御たち四十人ばかり出でたり。曙にいとをかし。これを見て仲頼、歩み返りて、仲頼「餘所にて見給ふよりは、近くてやは御覽せぬ」と言へば、御たち「それは眼馴れ給ひにたれば」と言ふ。木工の君と云ふが近く立てるを引留めて、仲頼「嬉しき序にも聞ゆるかな。仲頼と知ろし召したりや」木工の君、「誰をか然は聞ゆる

(語釋)
(一)「い」となり聞えぬ」
歟

(七)其方の爲には

(八)「君をもちてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなん」の歌の意

仲頼の戀病、忠保の慰藉、妻の嫉妬、父の教訓

(考異)
(二)今より「今から」今かく

(三)「云ふに」に「ナシ

(四)人々「ナシ

(五)歸りて「て」ナシ

(六)むかひ居「居」ナシ

む。となむ聞えぬ」少將、仲頼「今より知り給へかし。聞えさすべきことも有りや」など云ふに、兵部卿の親王出で給ひければ、仲頼「よし。今後に」とて、ふと出でぬ。

畫詞 此處は大將殿。親王たち、上達部、あるじのおとど、人々皆立ち給ひぬ。

ぬ。これは御たち見に出で給へば、少將立ちぬ。

仲頼、歸る空もなくて家に歸りて、五六日頭ももたけで思ひ臥せるに、いとせむ方なく侘しきこと限なし。になくめでたしと思ひし妻も、物とも覺えず、片時も見ねば戀しく悲しく思ひし子ども、前にむかひ居たれども眼にも立たず、身のならむことも、すべて何事もく、萬のこと更に思ほえである時に、仲頼妻「なにか常に似ずまめだちたる御氣色なる」と言ふ。少將、仲頼「御爲には、斯くまめにこそ。あだなれと思す」などいふ氣色常に似ぬ時に女、「いでや、仲頼妻あだごとは音にぞ聞きし松山や眼に見すくも越ゆる浪かな

といふ時に少將、思ひ亂るよ心にも、なほ哀に覺えければ、

仲頼 浦風の藻をふきかくる松山もあだし波こそ名をば立つらし

吾が佛」と言ひて泣くをも、我によりて泣くにはあらず、と思ひて、親の方へ去ぬ。

(語釋)
(二)妻が
(三)妻が父母の方に
(四)仲頼が氣まづく思はぬ苦なし
(六)我等ほどの貧乏人はあるまじきに
(七)仲頼が見なれたれば
(一〇)其方が美しければこそ
(一三)父忠保の
(一四)妻を娶るに方りては

(考異)
(一)藻をふきかくる一トをふきかへる一トをふきかへる
(五)ながらも「も」ナシ
(八)あさましき「あやしき」
(九)一日片時立ち「ナシ」
(一〇)給へれば「給ひつれば」
(一一)給ひなば「給ひなと

居暮らして、夜も此方に寝なむとすれば母、「なにか彼方にはまうで給はで、此處には殿籠る。あなさがな。人は心置きて思さじや。かく、言ひ知らず侘びしと言ひながらも、我等が様な人はあらじを、さばかりかしこき宮殿ばらを習ひ給へれば、如何にあさましき所と思ほすらむ。されど、我が子の見る効なくいますからましかば、かくあさましき所に一日片時立ち止り給ひなましや。人と等しく生ひ出で給へればこそ、世の中に名だたり給ひつるあだ人の、此の年頃立ち止り給へれば、此の君におろかに思はれ給ひなば、主のさばかり思ひいられ仕う奉り給へば、効なくくち惜しと思ひ給はじや。今の世の男は、先づ人を得むとて

(語釋) (四)「聞けば」は「聞き」て「歎」

(五)自分に迷惑がかかるかも知れぬと

(六)なぜあの女をよしたと人がきけば

(考異) (一)洗はひー洗ひ

(二)供人ー供の人

(三)さてーナレ

は、「ともかくも父母は有りや。家所は有りや。洗はひほころびはしつべしや。供人に物はくれむや。馬、牛は飼ひてむや」と問ひ聞き、さて、「顔容清らなりや」など問ひ聞けば、あてにらうくじき人といへど、荒れたる所に幽かなるすまひなどしてさうくしけなるを見ては、あなむくつけ。我がいたづき煩ひとやならん、と思ひ惑ひて、あたりの土をだに踏まず、「などか其の人には棲まぬ」と言へば、「法師籠り居りき。人籠り居りきなど言ひて、あたりにも寄らず。怪しきものの子、孫、顔容鬼の如くして、頭はひた白に、腰は二重なる女なれど、勢有りしものの子どもなりと言ひ、徳有りしもの妻ぞなどいふものをば、天下の人も聞き過ぎて、言ひ觸れ惑ふ今の人なれば、かよる所に、一日片時立ち止る人も有らじと思ひて、多く徳有る善き人をも聞き過し、我が子をや、人笑はれに、あはあはしく思はせむ、「其の人接みしかども、今は來訪らはず」と言はせ奉らじ、とて、幾多聞き過しつれど、然のみ言ひてやあらむ、宿世に任せてこそはあらめ、

(語釋)

(一)「天下にまし」歎

(二)淨氣者の仲頼故見棄つるも當り前とて

(三)祖先より傳はれる賢

(八)仲頼に逢はじと思ひて行かぬ也

(考異) (四)少しきー惜しき

(五)細篇ー細時

(六)何事をかーか」ナレ

(七)歸り來ー來」ナレ

又天下いまし通はず、見倦んじ給ふとも、例のあだ人なればとだに思はせむ、とてこそは此の君を、幾多おやが時の寶、櫛匣の何々も、少しき物なく失ひ、こよらの年頃、地子を待ち使ひつる近江の莊も、此の君の御爲にこそ賣りつれ。斯う惑ひ仕うまつる効ありて、今日今までめぐらひ給ふは、如何に嬉しき事なり。何れの宮、殿ばらにかは、此の君の掣にとられ給はぬ。されど、夜を重ね日を積み、此の年頃此處に通ひ給ふは、如何に面たとしき事なり。などかこれを疎にはし給ふ。吾が佛、疎に此の君に思され給ふな」と泣くく宣へば、仲頼妻「いでや、見苦しきものを見給ふれば、生ける効なき心地すれば、見じとてなむ」母、「何事か有る」と言へば、仲頼妻「いさや、何事をか人の言ひけむ。此の賭弓の變より歸り來にしまよに、起き臥ししづ心なく思ひ入らるゝ事のためれば、己が見ま憂く見苦しきを思ふにやあらむと思へば、見えじとてなむ」母、「知らぬ様にてまうで給へ」と泣くく言へば、女、母に言はれて、立ちて往く。父主、忠保「君の籠りお

〔語釋〕

(三)自分が側に居ざりし
ならば

(四)志の深き輪を見する
事叶はざるを

(六)衛府の役人をやめた
し

〔考異〕
(一)臥し居たり一臥いた
り

(二)などか一などかは
(五)こよなく一上もなく

はするに、何業を仕らむと言ふ。少將臥し居たり。女來たれば、仲頼などか今
まではおはせざりつる」と言へば女、「いさや、思ひしづまり給ふやとて」少將、
仲頼「ましておはせぬぞ苦しき。早うおはせよ」と言ひ臥せり。

〔畫詞〕

此處は女もの言ひたり。

つとめて、父主、少將の方にまうで給ひて、忠保「如何にかく籠りおはします。つき
なくも思ほさるらむ。忠保、志深けれど、いと怪しくのみ侍りて、しるしなきこ
とを、畏り申し侍り」少將、仲頼「あなかしこ。何か、つきなきことも侍らず。日頃
みだり心地の例にも似ず侍れば、内裏にも参らで籠り侍るなり」忠保「などか然は
おはしますらむ」少將、仲頼「知らず。此の左大將殿の饗に参りて侍りしに、宮の土
器取り給ひて、いみじく強ひ給ひしかば、こよなく食べ酔ひにける名残にや侍ら
む」忠保「いと不便なる事かな。すべて、此の御酒聞召し過ぐる事こそいと悪しき
ことなれ」少將、仲頼「いかで此の官まかり離れなむ。すどろなる酒飲は衛府官の

〔語釋〕
(一)仲頼の

(二)まるめて

(三)以下仲頼の心

(四)「言はず」なるべし

(五)つまらぬものを見て
の義歎

〔考異〕
(六)参らせむ一参らむ

する業なりけり」と言ふ。父主内に入りて、忠保「君は此の頃惱み給ふ事ありけり。
何事をか仕らむ。いとほしく」など言ふを、此の女、例ならぬ氣色を見て、い
と心憂しと思ひて、前なる硯に手習をして斯く書き付く、

仲頼「世にはつらき心も知りはてぬ契りし後の世をも見てしが

と書きて押しわごみて置いたるを見て哀と思ふ。我が心とも言はじ、あぢきなき
を見て、えあるまじきことを思ひて、人にもつらしと思はるゝ事、如何ばかり思

ひし人にもあらなくに、と思ふにも哀なりければ、

仲頼「昔より契りしふかき中なれば生も死をもともにこそせめ

猶心地の例ならず惱ましければぞや。御爲に疎なるにはなどてかあらむ」など言
ひて諸共に臥しぬ。

〔畫詞〕

此處は母君雉子調じて物参らせむとて、調じ急ぐ。父主手づから雉子
つくる。此處は少將に物参る。女、雉子などあり。

●大官六十の賀の爲に
嵯峨院に参る。仲頼病を
押して参列す

(語釋)

(一)次の子の日

(考異)

(一)后の：給ひける一
大將殿には正月廿七日に出
て来る乙子になむ嵯峨の
院の太后に御賀まらむ
とし給ひける。

(三)有る限一ありの限

(四)あを色一あか色

(五)あか色一あを色

(六)摺裳一摺ナシ

(七)あか色一あを色

かくて、^(一)后の宮の賀、正月二十七日に出で来る乙子になむ仕うまつり給ひける。
有る限の君たち、男も女も集ひて、仕うまつり給ふ。^(二)すべて萬のもの、かねてより
設けて、いとみじくになくして参り給ふ。いと珍らしく清らかなる様にし調へ給
ひて、子孫引きつゞきて、^(三)絲毛六つ、檳榔毛十四、うなる車五つ、下仕車五つ
してなむ参り給ひける。御前四位二十人、五位四十人、六位は數知らず。御供、^(四)舞
の君たち皆おはします。例の遊人たち數をつくして、舞の子ども君たちいとにな
く装束きて、いとをかしけなり。御供人あまたなり。絲毛のには、宮、若御子た
ち六所、二のには女御の君、又次々の君たち、皆組みませせて、あまねく奉る。人
給には、御方々の御たち四人づよ乗るべし。大人四十人、童二十人、しもづかへ
十人、いとになく装束してぞありける。大人二十人は、^(五)あを色に蘇枋がさね、今
二十人はあか色に葡萄染がさね、あやの摺裳。うなるは、おしなべてあか色に蘇
枋がさねの、^(六)ろうの上の袴、あや搔練、色は吏にも言はず。しもづかへは、例の
^(七)



(語釋)
(三)自分等には下されざしかば

(四)不平を鳴す也

(五)役々

(考異)
(一)を整へたりよく

(二)老いたる―老いたる

(六)遣けず―遣はすに

(七)こと―ことかな

むらすり、檜皮色、櫻がさね、おしなべて賜ふ。斯くしなぐに装束す。舞の師ども容を整へたり。若き人こそあめれ、老いたる人などは、かよる御いそぎを先とし給ひて、未だ衣も賜はざりければ、世の中にゆしくさがなき言をしつと、己が様の怪しきをば知らで、泣き怨み奉れども、今靜にも思ひて聞き入れ給はで調へ給ふ。御臺ども、折敷などのことすべて何もく、己があたりく、我も我もと給へば、いみじくめでたし。

遊び人どもなど調へ見させ給ふに、少將仲頼召しに遣はす。宮内卿の殿に、賭弓の饗より歸り給ひて、萬のものの興も覺えて臥せる所に、「大將殿より召あり」といふ時に、仲頼「何事宜はむするぞ」と問はすれば、使「明日の子の日に、嵯峨の院に参り給ふべき事によりて」と言ふ。少將、仲頼、日頃勞はる所侍りてなむ」とて参らぬ時におとど、正頼「口惜しきこと。仲頼、仲忠なき饗は、物にもあらぬものを」とて手づから御文書き給ふ。日頃久しく参り給はぬ由など書きて、

(語釋)
(一)此句誤りあるべし

(四)仲頼が御供に加はるべき筈に申上げたれば

(六)仲頼の参る事は東宮御承知ならん

(考異)
(二)さよらひつる―さよらひつ

(三)東宮―宮

(五)「べきにと」と衍文なるべし

正頼 嵯峨の院に、いさよか若菜参ることあるを、おはせでいと悪しくなむあるべき。勞はらるよこと物し給ふなるをなむ、いとほしがしがり申し侍るを、けしう物し給はずば、如何に嬉しからむ。正頼が大事と思ふことなり。必ず必ず物し給へくば、いかに嬉しからむ。

少將、御文を見て、驚きながら、苦しき心地を思ひ起して参りたり。明日の御供の事など宣ふ、仲頼「東宮よりも、明日彼の院へ参り給ふべき由、帶刀長正につけて仰せ給へりしかども、日頃惱むこと侍りてえ候ふまじきよし申し侍りにしを、仰せごとと畏ければさよらひつる」おとど、正頼「然、東宮も参り給ふべきよし仰せられき。御供の人定められなせしに、長正の朝臣それに加はるべきにと取り申しよかば、知らしめしたらむ」仲頼「然らばさよらはむ」おとど、正頼「さらばいと嬉しき事」と宣ふ。

斯くて、いとになく、遊び人など具して出で給ふ。親王たち、上達部、東宮の御

(語釋)
 (一)車に乗らんとて
 (二)正頼の御母なる宮の弟にあたる入道殿か
 (三)古今集「今こそあれ我も昔は男山さかゆる時もあり来しものを」
 (四)此次に「菊の宴」の巻の第九段の初より第十一段の末まで入るべし
 (考異)
 (一)給へりける—給はむとしける
 (五)なし—なく
 (六)思ふ—思へり

供になむ仕り給へりける。かくて二十七日つとめて、御車寄せて、宮たち、君たちも奉らむとて並びおはします所に、大宮の御乳母備後守、おとどの御をば宮の御おとど入道殿、例は上に参らぬ人々、かよる御中に交り居て、「我も昔は男やま。御供に仕まつらむ」と言ひけれど聞き入るよ人なし。猶物見んと思ふ。かくて御車に皆奉りて引き續きて御座します。御前は、四位、五位、六位、合せて二百人ばかり有りけり。

梅の花笠 一名春日詣

梗 ● 朱雀院の御世、正頼一家を擧りて春日の社に詣づ。あて宮社頭にて琴を弾く。忠こそ法師來合せて正頼と往事を語る。忠こそ法師、あて宮に懸想す。東宮以下の懸想人たち、歌をあて宮に贈る。兼雅俊藤女を携へて柱の別邸に燕居す。仲頼勅書を奉じて、行政、社流仲澄を伴ひて柱に赴く。

かよる程に年月過ぎて、その時の帝もおり居給ひ、東宮國知り給ひて、年ごろ世中たひらかに、國榮えてあり。かよる程に左大將の男子女子、源氏におはしませど、母方藤氏におはします。内に御願ありて、春日に神樂奉り給はむとて、いそがせ給ふ。おほん供に仕うまつるべきうなる、下づかへの装束調せさせ、乗尻の雑色よりはじめ、陪從舞人等のさうぞく、臨時の祭のさまなり。萬の事をとよのへ、人のかたちなどを擇らせ給ふこと限なし。童陪從四十人、かたちを整へ、大人陪從四十人、舞人八十人、はしり馬十疋。舞人は、殿腹の君たち、殿上人わ

- (語釋)
- (一) 優れたる人物
- (六) 大宮、正頼の妻
- (七) 仁壽殿女御、正頼の長女
- (九) 此髮東誰のか不明也
- (一〇) びんづら
- (一一) 剛の掃除を司る下女
- (考異)
- (二) をなむーをんな
- (三) し給ひけるーしたりける
- (四) うへのーナシ
- (五) 青丹に柳ーあをにしやなぎーあをにやなぎ
- (八) 君は孕みー君子孕み
- (一一) あゆむーあよむ
- (一二) あゆみぬーぬ

かき君だちよりはじめて、世の中に名高き逸物の者どもをなむ、童陪従にも殿上童をなむし給ひける。かくて女は、おとな四十人、うなる二十人、下づかへ二十人。装束は、おとな青色の唐衣、童は赤色に線(三)のうへの袴、下づかへは青丹に柳襲(四)著たり。おとな下づかへ、二十歳のうち、わらは十五歳のうち、童下づかへ、たけ等しくすがた等しく擇びたり。

かくて、二月二十日になむ詣で給ひける。おほん車、絲毛十、檳榔毛十なり。絲毛十には、宮よりはじめ奉りて、女御子たち數多、北の方あなたこなた合せて(六)九所。女御の君は孕み給へれば止り給ふ。おほん装束、赤色の唐の御衣に羅の摺裳、萌黄色の織物の御小袷奉らせたり。檳榔毛十には、一つに四人づつ乗りて、うなるはびづら結ひて、馬に乘れり。下づかへは、徒歩よりあゆむ。ひすまし六人、青丹のうへの衣著てあゆみぬ。おほん車の御前、四位十八人、五位卅人、六位五十人。馬の毛下襲の色とよのへたり。世の中にありとある上達部、御子た

- (語釋)
- (二) 轡
- (七) 相伴役
- (考異)
- (一) 山がつ民ー山がつら
- (三) トげばりーあくども
- (四) 神樂ー樂
- (五) 一領ー一よそひ
- (六) 一くだりー一ぐ
- (八) 本草のー草木の
- (九) すがたもーすがたを

ちよりはじめ奉りて、山がつ民まで、今日の御供に仕うまつらぬなし。大宮の大路よりくだり給ふ。

かくて御社にまうでつき給ひて、色々のあけばり打ちわたして、御車よりおり給ふ。男君だち著き竝み給ひぬ。辰の時ばかりより、神樂はじまりて、申の時ばかりに果てぬ。舞人に女の装束一領づつ賜ひ、陪従には、櫻色の綾の細長一かさね、あはせの袴一くだりづつ賜ふ。垣下におはしたる人々に、綾襲の女の装束一くだりづつ、五位より下は、白きうちはかまをなむ賜ひける。残る數なくかづきわたるを見れば、花をふき散らしたる様になむ見えける。

かよる程に、おとど人々に、正頼「あやしく所々見給ふるに、おもしろく興ある所は、この御社になむある。同じき本草のすがたも、此處のは情ありて面白くなむ見ゆる」と宣ふ。兵部卿の宮、「けに然おはします宮なり。この宮に詣で給ふこと、許多なり。そが中にも、今年は歳いそぎで、おそき花疾く咲き、同じく開けたる

(語釋)
 (一)花もこの「も」衍字歟
 (五)沈香木にてつくりたる人形
 (七)あて宮幼少の中より心かけしをいふ
 (九)左近少將仲頼、左大臣祐仲の二男

(一〇)面白く思はるゝ

(考異)

(二)さへーナレ

(三)木草—草木—木山

(四)花—枝

(六)にはふにも—にはよ野も

(八)著たる子ども—著たるものども—著せたるものども

花も、もえ出づる木の芽などさへ、心ことなる年になん」など宣ふ。あるじの大
 殿うち笑ひて、正頼正頼、この宮にまうで侍る年なれば、まさに木草も心づくろ
 ひせさらむやは」など宣ふ。かよる程に兵部卿の親王、おもしろき梅の花を折らせ
 給ひて、沈の男つくらせ給ひて、花のしづくに濡れたるに、かく書きつけて、あ
 て宮の御許に奉れ給ふ、

兵部立寄れば梅の花笠にはふにも猶わび人はこよら濡れけり

さるは、ふた葉にもと思ひ給へつるものを。

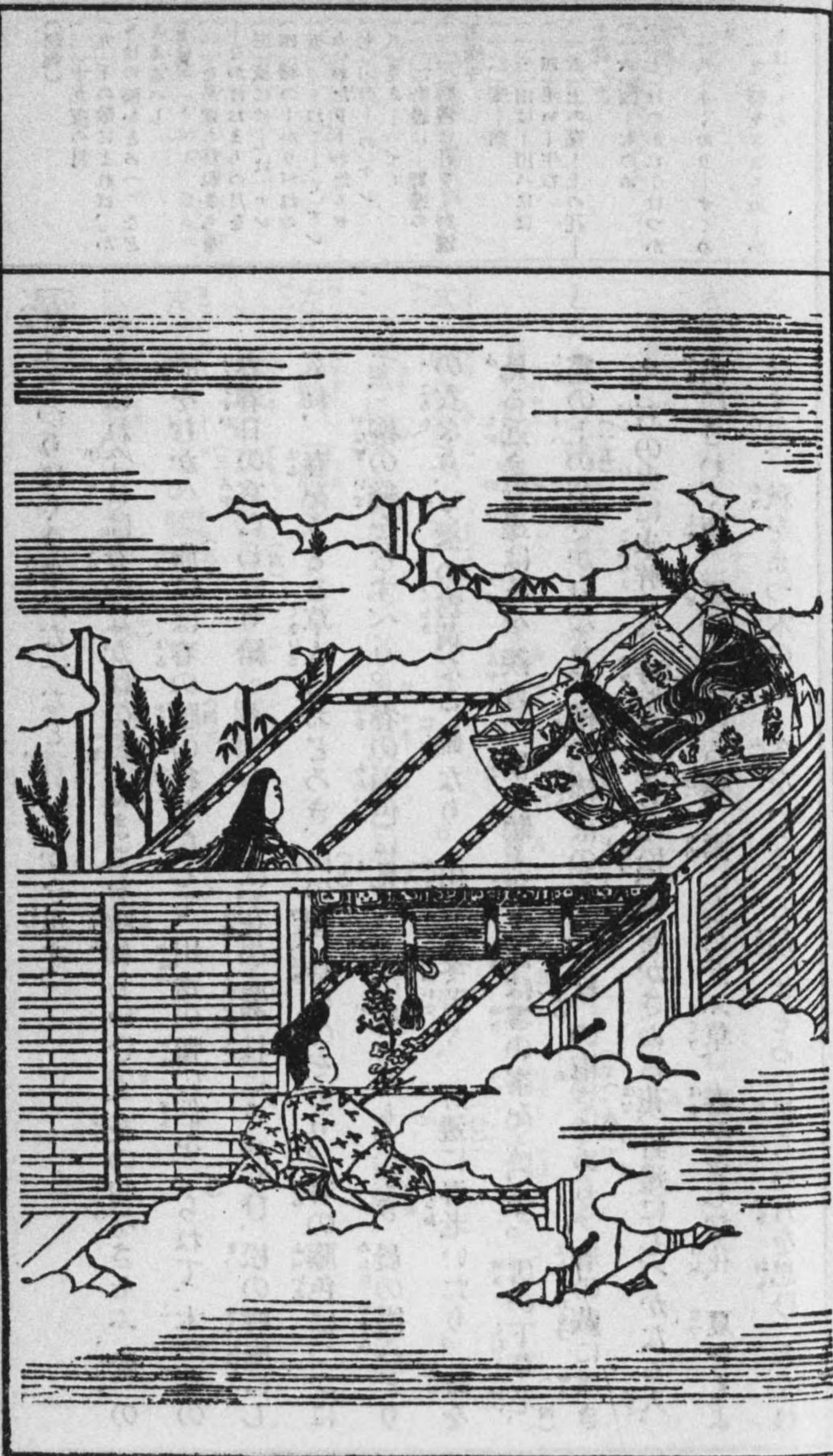
とて、奉れ給ふ。あて宮見給ひて、糞蟲つける花折らせ給ひて、それが下に笠著

たる子ども立てて、かく書きつけ給ふ

あて宮隠れたるみかさの山の糞蟲は花のふるをや濡るといふらむ

かくて、御つかさの少將仲頼に宣ふ、正頼よろづの事心につく日になむある。

たどにやはあらむ。和歌の題にすべき事、すこし擇り出で給へ」と宣ふ。仲頼、



「仕うまつりにくき事かな」など言ひてかき出す。

- (二)十九夜の月
- (九)下の歌によれば、「かきはの梅もとろへ」など
- とあるべし
- (考異)
- (一)なかばの月ねまちを
- 一なかばねまちの月を
- (三)旅には「は」ナシ
- (四)雁の「かりがねの
- (五)つらねて「て」ナシ
- (六)わたり「わたらせ
- (七)山の「の」ナシ
- (八)見え「いでて
- (一〇)野邊に「野邊の
- (一一)野邊は花を「野邊
- 若菜を
- (一二)琴一曲
- (一三)山は「山べには
- (一四)老い「生ひ
- (一五)上の葉「上の花
- 上花
- (一六)梢「木のめ
- (一七)はのかに「はつか
- (一八)さくめり「すくめ
- (一九)時をさとらぬ「か
- きはさらぬ

あはれ今日は春のなかばの月、ねまちを昨日といひて、花の匂をさそふ。鶯の
 聲をむかへ、旅には春の雁の行をなして、川邊の鴨の侶をつらねて、木の芽の
 春春日の宮にわたり給へり。かよれば、花の鶯、枝にさぶらひ、松の蟬庵にし
 ぐれ、春をさとる草人におどろき、山の櫻、時にのぞめり。春の藤色はつかに
 て、柳の絲をむすべり。春の雨色に見え、花の風おそし。かき、晨の霞みどり
 の衣なり、夕への雲黄なる錦なり。山邊に冬若く、野邊に春老いたり。舞を
 見る近き野邊は花を羨み、琴を聴く遠き山は雪の峯をうつつす。雪の下草老、
 霜の上の菜さかりなり。梢の緑ほのかに、紅の梅さくめり。春の蕨に雪き
 え、石の火に氷解く。時をさとらぬ松、春をかさぬる花、野邊にしづかなる人、
 山にさわぐ鹿、風になびける枝、雨にしたがふ草、春ををしむ花、夏をもよ
 ほす蟲、秋をまつ木の葉、冬をいなふる鳥、まとるに足らぬ月を思ひ、おくれ

たる月をめぐる。

と書き出だして、兵部卿の親王に奉る。御覽じて、「ねまちの月」を、

- (語釋)
- (二)思雅をるべし

兵部昨日、「そねまちもせしが春の夜の今宵の月をいかど見るらむ
 と書きて中務の親王にたてまつり給ふ。中務の親王、「花の匂をさそふ」

- (考異)
- (一)式部卿「兵部卿

中務 我宿に移してしが野邊にいでて見れどもあかね花の匂を
 式部卿の親王、「鶯をむかふ」

- (三)友も「友し

式部里に咲く花にうつらで奥山の松におくるなうぐひすの聲
 左の大殿、「雁のつら」

- (四)うつら「たつる、按
- ずるに「うかぶ」なるべ

故里に友ものこさす來し雁はこよにてはるをすぐさどらめや
 左大將、「川邊の鴨」

- (四)正頼

水鳥のつらねてうつる春日河おるなる綾はけふや著るらむ
 右大將、「このめの春」

兼雅松の根にふす山人は野べを見る今日ぞ柳の葉にも知るらむ
民部卿源實正「春日の宮」

(語釋)
(一)左衛門督右衛門督なるべし。藤原の君の巻に見えたり

うぢ人のまとめる今日は春日野の松にも藤の花ぞさくらし
左衛門督藤原清正「花の鶯」

(三)正頼の長子

(四)ひく引く、弾く

(五)正頼の次男

(七)正頼の三男

枝ごとに妹背つらぬる鶯の鳥座をせばみ花ぞ散りける
中納言平正明「松の蟬」

松風の聲にくらぶる琴のねをしぐると蟬にしらべざらめや
左大辨源忠澄「春をささる草」

琴のねに春の草木の驚くはおのれを人やひくとなるべし
右兵衛佐おなじき師澄「時にのぞめる櫻」

(考異)

(二)しぐるゝすなるゝ

(六)揺よるゝせむる

佐保姫のほかにそむる櫻には灰さし添ふる藤ぞうれしき
右近中將おなじき祐澄「わづかなる藤」

松よりもはひこほるよぞ藤の花今ひとしほのあかず見ゆるは
おなじき中將在原の元行「むすべる柳」

花さかぬ枝にも蝶はむつれけり柳のいとも結ほほるらし
宰相實忠「春の雨色に見え」

花をのみむら濃にそむる春雨はときはの松やつらく見ゆらむ
宰相直正「花の風おそし」

佐保姫やもの憂かるらむ春の野に花のかさぬふ枝の見えねば
とて、對ひたる人の四位よりはじめの人に賜ふ。賜はりて左中將實頼「おとろふ
梅」

白妙のころもに似たる梅の花目に見すくも衰ふるかな
右近少將源仲頼「晨の霞緑なり」

鶯の羽風をさむみ春日山かすみの衣今朝はたつかも

(一)見え見え

(二)松やー松は

(三)花の風をそしー風をそく

(四)はじめの人ーはじめ人との人

(五)ころもに似たるゝこゝろもとたどる

(六)右近ー左近

おなじき少將元方、「雲の錦」

おほぞらに風の織り布く錦をば谷より雲ぞたち渡るらし

おなじき少將和政、「冬わかく春老ゆ」

見わたせば雪ふる山もあるものを野邊の若菜の老いにけるかな

左兵衛佐助澄、「雪をうつす山」

富士のねは春日の春を餘所にてかこの雪も今やきゆらむ

おなじき行政、「雪のした草」

雪のうへにしひて草木の萌ゆればや春日に飛ぶ火ありといふらむ

兵部大輔兼澄、「霜のうへの菜」

春日野の雪間におひし若菜をば野守は見ゆや今日摘まむとは

侍從仲澄、「わづかなる木の芽」

春を浅み野邊の木の芽もまだしきをいづこよりつむ若菜なるらむ

(語釋)
(三)正頼の五男

(五)正頼の六男

(六)正頼の七男

(考異)
(一)雲ぞー雪の

(二)らしーらむ

(四)春日にー春日の

(七)なるらむーなりけむ

侍從源忠匡、「紅の梅」

春雨の花にふりおく紅にそめて染むらし春の佐保姫

侍從藤原仲忠、「蕨にきゆる雪」

雪とつる春のわらびの萌ゆればや野邊の草木のけぶり出づらむ

侍從兼時、「石の火にとくる氷」

春わかすさゆる河邊の葦の芽は石よりいづる火にやもゆらむ

侍從維風、「時をさとらぬ松」

見る人のよはひは千世のあたりかやみどりの松は春を待つらむ

侍從元松、「春をかさぬる花」

ふたよびやこよの櫻は匂ふらむ同じ花にも春をそふれば

大夫親澄、「野邊にしづかなる人」

春深みみぎはの芹も老いぬらし今はものうし若菜つむ人

(語釋)
(三)正頼の十一男

(考異)
(一)侍從ー同じき侍從

(二)あたりかやーあたりをや

(四)みぎはの芹もー川の
小芹も

(語釋)
(一)正頼の九男

(三)正頼の十男

(考異)
(二)よむらしーよむらむ

(四)ねぐらーとぐら

(五)よる岡のへーよるせ
る野人の

式部丞清澄、「山にさわぐ鹿」

萌えわたる草木もあらぬ春へには山邊にいそぐ鹿ぞふむらし

右兵衛尉頼澄、「風になびける枝」

鶯の冬のねぐらや春たてば風のなびかす柳なるらむ

藏人藤原仲遠、「雨にしたがふ草」

春雨のふる岡のべの草木をや秋のやどりと蟲はたのまむ

木工助維元、「春ををしむ花」

佐保姫はいくらの春を惜めばかそめ出だす花の八重に咲くらむ

右近尉清原松方、「夏をもよほす蟲」

春山の木の根の蟬は巢をせばみ夏のこのはや戀しかるらむ

兵衛尉藤原親正、「秋をまつ木の葉」

春若みほのかに見ゆる木の葉には秋こそいと遠く見えけれ

右兵衛尉在原時蔭、「冬をいなぶる鳥」

冬山に巢くひし鳥も肌さむみ春の里にややどりとるらむ

右兵衛尉元輔、「まとるにたらぬ月」

わが伴の野邊のまとひに後るよはすぎにけらしな春の望月

同じき尉平維助、「おくれたる月」

朝かけにはるかに見れば山のはに残れる月も嬉しかりけり

などこれかれ宣ひて興ある夕暮に、女方の御前に、君だち物の音かきあはせて、

遊ばす中に、あて宮、かの一條殿より買はれたるかたち風といふ琴を、かの聲に

しらべて、曲のめでたき手ををりかへし遊ばす。仲忠、こともなきおほん琴かな、

少しまだ若くぞあんなる、如何ならむ世に、我が手習はし奉らむ」など、心地は

空にて思ひたる程に、かの忠こそその行ひ人、かの暗部山に、大なる寺をつくりて、

父母の御爲に、いかめしき經佛供養じ、人に物も言はで、たゞ佛の御事をのみ寐

(語釋)
(四)この聲、俊隆巻に
註せり

(六)以下仲忠の心

(考異)

(一)たらぬーたえぬ

(二)殿よりー殿のを

(三)かたち風ーみやこ風

(五)手をーををナシ

(七)暗部山ー鞍馬山

(八)父母のー父母が

(語釋)
(一) 忠こそが師と頼みし人

(二) 忠こそ其に與ふ

(考異)
(二) 暗部一鞍馬

(三) めぐりてしてナシ

(四) 佛神一かみ

(五) おほぞうにーおほぞらに

(六) 如ー如く

(七) まじりてーしきりて

(八) 何ぞのーなぞの

(九) 忠こそーナシ

言にも口あそびにもしつと行ふ。かの就きし人は、かしこき智者にて、大法など盡して受けたりければ、それらを皆受けて、暗部をば、さる修行したる所にて六十餘回をめぐりて佛神に讀經奉りて、近き所にまうづるに、この春日にも詣でて、夜一夜、大般若をおほぞうに讀みつと奉りて、今は熊野にと思ひて出づるに、このおほん前にあそばすおほん琴の音する方に向きて、疾き脚を出だしてはしる。遠く見れば、色々のあけばりを、鱗の如うち渡して、立ち騒ぐ人、うちませたる花のごと見ゆ。風にきほひて、千々のものの音まじりて聞ゆ。近く立寄りて聽くに、御隨身、舍人ども、「これは何ぞの行ひ人ぞ。神事の所には出で來べきものか」など咎めのよしれば、忠こそ、かく言ひて立てり。

忠こそめづらしく風のしらぶる琴の音をきく山人は神もとがめじといふを仲忠きよて、仲忠いと興あるものかな」とて袖をぬぎて、斯く言ひてかづく。



梅の花笠

- (一)ぬきかけよの意
- (四)帝の
- (七)正頼
- (一〇)正頼
- (考異)
- (二)ぬきかけぬぎかせ
- (三)かたち風一みやこ風
- (五)ごとを給はぬを
ごとをだにうけたまはり
給はぬを
- (六)忘れて一忘れて
- (八)あはせの一あか色の
- (九)賜ふ一賜はりて

仲思みな人も衣ぬぎかけ松風のひどき知りたる人やあるとて
 うちかづけて、御前より、かのかたち風を賜はりて、同じきごかの聲を、手つく
 して弾く。更に手惜ます。御前にて、興ある節會などに、おほん手づからしらべ
 て賜ふをだに辭し申して、仕うまつらぬを、斯くすれば、きこしめす人の限い
 と珍らしう興ありと思す。兵部卿の親王、「侍従の朝臣は、仰せごとを賜はりて
 だに手觸れ給はぬを、行ひ人の爲には御手惜しまれざめり」いらへ、仲思かたへは
 打たれて侍るになむ」など言ひて、ごかの手ども弾きはつる。左大將の君、綾搔
 練の袷一かさね、萌黄色の小袷一かさね、あはせの袴一くだり、おほん前より持
 て出でて、仲忠に賜ふ。おとど、行ひ人を召し出て見給ふに、御覽せし人に覺え
 たり。怪しみて、昔見給ひつる人をおほし出るに、忠こそに思しなして、正頼「あ
 やしく見奉りし心地するかな。正頼をば知ろし召したりや」と宜ふ。行ひ人
 忠こそ「更に知り奉らず。誰にかおはしますらむ」おとど、正頼むかし、上に藤

- (考異)
- (一)名づけて一てしナシ
- (二)見奉りたり一見給
りたる
- (四)御身の上を一御上を
- (六)袂一をもと
- (七)母とじをも一をもと
をし
- (語釋)
- (三)父をかまはぬ歸には
ゆかぬとて
- (五)母をいよ

原の君と名づけて侍りしなり。斯くものし給ふは、故右の大殿の忠君となむ見奉
 りたる。あないみじや。など斯かるおほん身とはなり給ひつる」と宜ふ。忠こそ、
 今はかく、鳥獸にまじりて、年久くなりぬれば、御覽じ忘れにたらむ、となむ
 思ひ給へる。年頃、かよる山伏になりてなむ。吾が君は何の御位にかおはします
 らむ」おとど、正頼「たど今は納言になむ侍るめる。あやし。年頃、如何になり給
 ひにけむ」と申し侍りつるに、斯く悲しげにこそはらのし給ひけれ。そもく、
 如何なる御心にてかは、かく思し立ちつらむ」おこなひ人、忠こそ「年九つにて、女
 親の手まかり離れて、世の中に侍りしに、心憂くおもえ侍りしかど、「まいて一人侍
 る子なり。親の御身の上を知らで侍らむやは」とて、なほ交らひ侍りしに、心憂く
 侍りしかば、念じあまりてなむ、十四歳にてなむ罷り籠りし。ことし二十年にな
 るむ侍りぬる。年わかて忍辱の袂にまかり後るよ事、一生のかなしびに覺え侍
 りしかば、前生の罪業をも滅ぼさむ、かの母とじをも佛の御國にさふらはせむ

- (三)不肖なるわが子どもの
- (四)修行久しき故祈禱の効験などは嗚あるべし
- (五)忠ことの父千薩
- (六)構つて居られぬ
- (七)長女仁壽殿

- (一)人なれし人けなし
- (二)はかなければこそ
- (三)はかなげなれば
- (四)やられて「て」ナシ
- (五)親の「の」ナシ
- (六)大將君「大將殿
- (七)など加はり「など
- (八)なりて「なりて
- (九)一人に「一人に

とて、全く穀を絶ちて行ひまかり歩く」と聞え給へば、大將の君よりはじめ奉りて、在りとある人、涙おとさぬ人なし。大將の君、正頼「天の下は逆様になるとも、斯くなり給ふ世を見むすらむとなむ思はざりし。世の中の斯くはかなければこそ、けしからぬわらはべの行くさき思ひやられて、うしろめたうおほえ侍れ。おとどは、そこに物せずなり給ひにける翌日より、思し黙ひて、それをおほん病とし給ひて、はやく空しくなり給ひにき。親に知られ奉り給ひてこそ、斯かる道には思し立たましかど、親すでに思ひに堪へ給はずなりにしかば、不孝の罪とやなるらむとなむ」行ひ人、思こそ「世中のせめて心憂きときは、親の御上も知られぬものになむありける。親の知ろし召しなば、許さるまじく侍りしかば、山林に心急ぎてまかり出でにしなり」大將君、正頼「おほん殿など加はりものし給ふらむかし。正頼は、けしからぬ子どもの親になむなりて侍る。一人にあたる女子なむ、内裏にさふらふ。君たちあまた生れなどしたるを、争ひきしるふ人々なむ、

- (一)誤脱あるべし、一なほ
- (二)害歟「かひ」歟
- (三)たてまつる「たてまつりし
- (四)引き奉らせんとてな
- (五)御室内申して
- (六)まかり入るる時は
- (七)暑氣になりぬれば「まかりい

許さぬ心など思ひたる。なんこりすまにしかる交らひすへて侍るめる。これなむ思ひ苦しき。女はおしなべては延命息災を旨として、ことに別きては心の中に呪詛のがいなきことを祈願せさせ給へ」おこなひ人、思こそ「命のさかりは、人の呪詛などもいで侍らぬものなり。業の盡きぬる時なむ、物の祟などはあるものなる。然はありとも、つよしみ給ふなむよき事なれば、いとよく祈願し申し侍らむ。唯今も熊野にまかりまうづるなり。去歳の八月より所々に讀經たてまつるなり。この御社にも、さて詣でつるを、怪しく昔うけたまはりし物の音のし侍れば、身をかへても、魂や残りて侍りつらむ。承りつけてなむ、神の御徳に、吾が君に對面賜はりぬる」大將、正頼も、今日この御社に神馬引き奉らせむ、とてなむ侍りつる。かの方に御さい賜はりて、年頃の物語も聞えさせてしがな」おこなひ人、思こそ「熊野へ急ぎまかり入るなる。時は、暑氣になりぬれば、路もはげしきに四五月ばかりになむまかり出づべき。平かにまかり歸るものならば必ずさふらは

(語釋)
(一)思こそ行方を

(三)櫻色の細長を眞の櫻
をとど留めたるに譬へ、
三四の句は琴の音にみか
れて暫時人間に歸りし思
こそを譬へたる也

(五)思こそが

(考異)
(二)ことには—ことは—
こと

(四)暮—體

む」と聞ゆれば、おとど、正頼年頃をばさるものにて、今日の對面の飽かず心細
きこと。嵯峨の院にも、折あらば、いま斯くなんと奏せん。常に、昔深き契ある
中なりき。正頼ばかりぞ聞き出でむ」とかしこく悲しび給ふを、斯くなむと聞し
召さば、如何に悲しび宣はむ」行ひ人、思こそ「あなかしこ。院には、世の中にま
だ侍りと聞えさせじ。許されざりし暇を、強ひてまかでて、やがてまるらず侍り
しかば、重き罪侍りなむ。それなむ今におそろしく悲しきことには侍る」と言ふ。
おとど、櫻色の綾の細長一かさねを持って出で給ひて、かく宣ひて賜ふ。
正頼ちる花をかくとちつれど琴の音を調べてかへる風ぞとまらぬ
(三)
と宣へば忠君

いにしへに今日をくらぶの山風は花の衣を吹きかへすかな
と言ふ。夕暮に花をさそふ風はけしくて、おほん暮ふき揚けたるより見入るれば、
君だち九所めでたく清らにておはします中に、あて宮こよなく勝りて見え給ふ。
(五)

(語釋)
(一)思こそ心
(二)「たど君かく有り難
き」歎、一本「かくをし
(六)垣間見たるあて宮を
得んと

たどかく有難き御容貌どもの中に、こよなくまさり給へる人なり、など思ふに、年
頃かけて思はざりつる昔思ひ出でられて、世中になほあらましかば、今は高き位
にもなりなまし、など思ふ。されど又、こよらの年頃、露、霜、草、かづらの根
を供養にしつと、或時には蛇とかけに吞まれむとす、佛のおほん事ならぬ事を
ば、口にまねばで、勤め行ひつる佛のおほさむこと恐ろしく、など思ひかへせど
も、せむかた知らず覺ゆれば、散り落つる花びらに、爪もとより血をさしあやし
て、斯く書きつく、

(考異)
(三)思よされど—思ひた
れど
(四)供養—齋
(五)御—ナレ
(八)かへり—まかて

思こそ憂き世とて入りぬる山はありながらいかにかにせよとか今も任しき
と書きつけて、君だちの御前の御後方のかたに押しつけて立ちぬ。熊野へと思ひ
し心もなく、いかでこの我が見し人見む、と思ふ心ふかくて、暗部山にかへり
て、思ひなげくこと限なし。
かくて大將殿、おなじ月の廿三日の未の時ばかりになむ、春日よりかへり給ひけ
(七)

(三)未詳
(四)入内する様を噂もありし故いよ／＼無沙汰に打過ぎたり

東宮以下の懸想人たも歌をあて宮に贈る

(五)いと一絲、其くる一来る、繰る

(八)「少將」の下に「に」あるべし

(一〇)實忠

(一)綾の「の」ナシ

(二)ひとへ袴一くだり「一くだり」ナシ「ひとへ袴」ナシ

(六)かしこく一かしこし

(七)奉れ給ふ一奉れり

(九)かづけ一ナシ

る。その日、還鑿いかめしく、舞人にかづけ物、しろき綾のあはせの袖、ひとへ袴一くだり、陪従にたどの細長、はかま、童陪従などにも賜ふ。

かくて三月のほどに、東宮より、柳に御文つけて、右近少將を御使にて、

しば／＼も聞えまほしけれど、馴るよはとかいふなる中にも、この頃まるの給ふべき様にありしかばなむ。いでや、

たのめこし春立ちしより青柳のいとやくるとも思ひけるかな

とて奉れ給へり。おとど見給ひて、正頼「かしこく斯く宣はするを、いかど御か

へり聞えざらむ。かくも聞えさせ給へ」とて書きつけ給ふ。

正頼春たてど身のかすならぬ青柳は花にまじらむことぞ苦しき

とて、中の御殿にたてまつれ給へれば、あて宮書きて奉れ給ふ。御使の少將

あやがさねの女の装束一くだり、かづけ給ふ。

源宰相かく聞え給ふ。

實忠涙さへなき世なりせばわがこひの身より出づるをいづち遣ちまし

と聞え給へれど御かへりなし。

兵部卿の宮より、

兵部山彦もこたへぬ空になくたづは天の川原にひとり臥すかな

此頃、里すみのかひなきに、内裏にのみなむ。

ときこえ給へり。あて宮、

答へ憂く思ほゆる哉あしたづのつるてふ名をもひとりなかなければ

平中納言殿より、

正明水まさる淀の眞菰のおひのせにふかく物思ふ春にもあるかな

此度は御返りなし。

三の御子、かく人に聞え給ふを見給ひて、

思慮巢立つとも見えぬものから鶯の山のいろ／＼ふみも見ろかな

(語釋)
(一)こひ一戀、火

(二)兵部卿宮の獨身ならぬ由をいへるなるべし

(四)正明

(六)彈正宮

(七)ふみ一踏み、文

(考異)

(三)つる一たづ

(五)御返り一御返し

- (語釋)
- (一)あて官の侍女
- (二)仲忠は
- (四)君は方々の女に手を
出す由なれば
- (五)右大臣源祐仲の長子
- (六)あて官に戀を告げん
と
- (七)「ものから」は「こ
との」の誤歟
- (考異)
- (三)「かまーちかひ」
- (八)かしこさーかしこさ
- (九)ありし見えてあり
しがこの御のりゆみのあ
るにたかいは見て

と聞え給へれど例のいらへ給はず。
かの仲忠の侍従、内裏の御使に、水尾といふ所にまうでて歸りに、をかしき松に
おもしろき藤のかよれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらにかく書
きつく、
仲忠奥山に幾世へぬらむ藤の花かくれて深き色をだに見で
仲忠「斯くなむとだに」とて孫王の君に、「これ御覽せさせ給ひて、この花物はりて
おき給へ今たどいま」とて内裏にまゐりぬ。あて宮御覽じて、人々の中にことも
なしと思す人なれば、斯く書きつけ給ふ。
あて宮深しともいかど頼まむ藤の花かよらぬ山はなしとこそ聞け
孫王の君、仲忠に見せ給ひけり。
右近少將仲頼も、年頃いかできこえむと思ひしかど、ついでなく思されむものか
ら、かしこさに思ひ忍びてありしを、この賭弓の御饗にかいま見て後は、ふし沈

- (語釋)
- (一)正頼の十三男、一本
には單に「あこ君」
- (三)かくて以下巻末まで
を別に一卷とし、「かつ
ら」と名づけたる本もあ
り
- (五)兼雅、右一本に「左」
- (考異)
- (二)留らぬーとどかぬ
- (四)かくてーサレ
- 兼雅 俊隆女を携へ
て桂の別邸に藉居す。仲
頼勅書を奉じて行政祐澄
仲河を伴ひて桂に赴く

み病になりてありしを、殿の春日詣に、辛うじて起きあがりたりしに懃さみてあ
れど、猶えあるまじかりければ、をかしき柳の萌え出でたりけるに、斯く書きて
つけたり、
仲頼物思ひの枝に籠れるものならばちえ渡るとも見せずぞあらまし
とて家あこ君に、仲頼「これ中のおとどに持てまゐり給へ」とて奉る。あて宮見給
ひて、あて宮あなむくつけ。見るまじきものかな」とて引き結びて棄て給ひつ。
侍従の君、
仲澄人しれぬ涙の川と流るよをいかでたまれる水とこたへむ
例のこたへ給はず。行政斯くきこえたり。
行政玉づさのつひに留らぬものならば空しき身ともなりぬべきかな
御返りなし。
かくて右大將殿、桂に、おもしろき所に、大なる殿造りて、花さかり紅葉さかり

〔語釋〕
 (八)よ少一文、踏み
 (九)誤あるべし、なにか
 さらなん」とある本もある

〔考異〕
 (一)此の頃「頃」ナシ
 (二)忘れられて「て」ナシ
 (三)流れ「ナシ」
 (四)「と」ナシ
 (五)花の「の」ナシ
 (六)御かへりも「も」ナシ
 (七)なほ「ナシ」

などにもものし給ひて、心やり給ふ所あり。花のさかりなれば、此の頃仲忠の母北
 の方を率ておはして、心やり遊び給ふ。兼正怪しく、世の中忘れて心ゆく所に
 こそありけれ。この春夏こよにて過ぎむ」とて物し給ふに、花の色をつくして咲
 きまじり、水は絲の亂れたるやうに流れ入りていと面白し。あるじのおとど、
 兼雅「あやしく見所ある所かな。こよにてをかしき業をして、上手どもの物の音を
 きかせ奉らばや」と宣ふに北の方、俊隆女「けに花の散らぬ前に、人々などして見せ
 給へ」と聞え給ふ。この大將もあて宮に文奉り給へど、御かへりも無きを、
 ほこの柱よりも聞え給ふ。
 兼雅 鶯のふみも通はで年ふるは花なき里とおもふなるべし
 あて宮、

かつらとてなつかさしなむ鶯は月のうちこそ聲はきこえめ
 ときこえ給ふ。大將のおとど見給ひて、兼雅「あやしく、まだ若くおはするを、御



梅の花笠

- (語釋) (一)其方に二人並べて我が妻とせば
- (二)兼雅が棄てぬは
- (三)人に心憎く思はるゝ様にし給へといふ事歟
- (五)あて宮に
- (六)我は
- (七)其方は今迄只一人の妻にてあり習ひたればあて宮と二人並ぶ事になりては心配の種なるべし
- (八)全く兼雅に棄てられてさへ過し來れりといふ事歟
- (一)なぜあの様に打絶えたりしならん
- (考異) (四)し給へかしー思ひ給ふべき
- (九)いとくいみじいとつちしや
- (一〇)涙をーをナレ
- (一一)これをーをナレ

容貌よりはじめ、し出で給ふことも、あらまほしくものし給ふかな。いかで此の君もがな。わが君と等しくてあらば、如何に人驚かむ。「いはゆるあて宮を率てもなほ絶えぬは、この侍従の母こそ勝るべけれ。等しきは珍らしきをこそ思ひまさめ。心憎しや」などこそそのよしらめ。如何にぞあらむ。妬うし給へかし「北の方、けにあらば如何によからむ。まめやかに聞え給へかし。こゝに、いかで然ものし給はなむ、とこそ思へ」おとど、兼雅一人にならひて、それも思ふ事あらじや。然もな宣ひそ「北の方」あやし。などてか然はあらむ。數多ありとも有りからにこそあらめ。然あらでもこそありしか。忘れ給はずは何をか思はむ」おとど、兼雅「それは更なりや。思ひ出づればいとくいみじや」とて涙をおとして斯く宣ふ、兼雅消えかへりかくのみありし古をかけて聞くにもまして亂るよとて、兼雅「世の中は心にもあらぬ物なり。さばかりいみじく思ひながら、など然はありけむ。いでや、これを思へばこそ、天下のあて宮にも思ひ聞え憂けれ。昔

- (語釋) (二)兼雅の妾等
- (四)俊隆女一人に
- (五)男が女一人を守り居るといふ事はなき事なれども
- (八)「きよく」衍文なるべし
- (九)禊子

- (考異) (一)あまたーナレ
- (三)たトーナレ
- (六)立てーし
- (七)あり難きーめてたき

さる志の年月に添へてまさりしかばこそ、この一條にあまた物し給ふ人々も、いづれ志深く思ひ聞えしかど、あまたに配りし心を、たゞ一所になりたりかし。女ひとり見る時はなけれど、御世にこそ斯くてあれ。これぞ昔よりいみじかりし志は見給へ」など聞え給ふ。北の方、俊隆女いでや、それも効無かりきや」とて、俊隆女ながめつゝ船浮くばかりありしかど盡せずおちしわが涙かなと宣ふ。おとど、兼雅「理や。吾が佛。されど思ひ慮らざりしをのみ頼みし」とて、兼雅年を経たえすながれし涙にも舟のうかばぬ時はなかりきと宣ひて、むかし覺束なかりし世に、これもかれも、物のをりふし毎に思ひ集めたりしことどもを、互に言ひつゝ、御簾のもとに出で居給ひて、琵琶、箏の琴、倭琴どもを一つに調べあはせて、面白き手を弾く。よき臺どもあまた立て、あり難き物どもをあまた盛りする。きよく清らなる御衣どもを掛わたして、出居の簀子には、おとな廿人ばかり、濃き袿一かさね、摺裳著たり。よき童四人、あをん

(語釋)
 (一)兼雅
 (二)兼雅
 (三)兼雅
 (四)兼雅
 (五)兼雅
 (六)兼雅
 (七)兼雅
 (八)兼雅
 (九)兼雅

(一〇)兼雅
 (一一)兼雅
 (一二)兼雅
 (一三)兼雅
 (一四)兼雅
 (一五)兼雅
 (一六)兼雅
 (一七)兼雅
 (一八)兼雅
 (一九)兼雅
 (二〇)兼雅

あはせのはかま、こき袖など着て出で入り、花のかけに遊びて、いみじき昔語をし、あはれなる行末を契りて居給へり。

かくて夕暮の程に、内裏におとどく久しくまり給はぬことを、帝右のおとどに宣ふ、朱雀、右大將ひさしく参らぬかな」と宣へばおとど、忠雅、桂河わたりに、興ある所を持って侍りたまふを、其處になむ、花見給へむとて、日頃侍りたまふなる」帝

朱雀「妻などは、いづれをか率てものすらむ」おとど、忠雅、仲忠が母をなむ率てまかりける」上、朱雀「それを思ふなよりのな」おとど、忠雅、唯今かれ一人をなむ侍りたる。本妻ども皆わすれ侍りて」と奏し給へば、朱雀「いと興あることかな。まだか

の大將の妻一人持たること聞えず。二の宮を思ひし時も十七八人ばかり持てありしを、如何なれば、たど一人にはなりたらむ。その御子を忘るよばかりの心にこそ

は。仲忠が母には、昔よりあかぬ事なく聞えし人ぞかし。いかで見むと思ひしを、参らずなりにし人を」とて上、朱雀「なほこの人惱ましにやらむ」とて書かせ給ふ、

朱雀月にだによらずなりにし白雲の谷に年経と聞くはまことか

いとこころ強けなりしを、いかで斯くは。

など書き給ひて、左近少將仲頼に、朱雀「これ彼の桂の家に物して、内の方にとらせよ」とおほせ給ふ。仲頼いそぎて出づる一つ車にて、行政、祐澄の中將、仲澄の侍従など乗りて、桂へまうでたまふ。路のほど遊びて来る音聞召して、兼雅「侍従

のまかつるにぞあなる。湯漬の設せさせよ」と宣ふほどに、おもしろき花の枝に御文つけて、使の少將まり給へば、あけたる御簾おろして、外に出で給ふ。御

たち皆内に入りぬ。

斯くて簀子に居ぬ。御ともの人は花の蔭にすゑたり。仲頼御文を内に入るれば、おとどいと見まほしく思さるれど、え入り給はず。北の方御文を見給ひて笑ひ給ふ。さて、内より、いと疾く物まるる。紫檀の折敷、沈の臺にすゑて八つ、卓いと

いかめしうはあらで、干物、生物などして、よきうなるども限なく装束かせてまる

い

い

い

い

い

い

い

い

(語釋)
 (一)月は朱雀、雲は俊隆女、谷は兼雅を譬へたり
 (二)音樂しつゝ来る
 (三)仲忠
 (四)兼雅が
 (五)御使が
 (六)北方より仲頼に響應あり
 (七)兼雅
 (八)兼雅
 (九)兼雅

い

らす。御土器たびくになりて、御使の少將いそぎ給ふに、兼雅「など斯くはいそぎ給ふ。花を見てこそ歸り給はめ」とて土器賜ふとて、

兼雅「急ぐとも花にまかせむにはふ色見つよや人の歸るとも見む」
(二)

仲頼「さるは」など言ひて、

仲頼花の香を尋ねて來つるかひもなくにほひにあかで我や歸らむ

祐澄

斯くながら散らすと思はど櫻花陰にて千代をめぐらざらめや

仲澄

この宿にはへる花のいかなればおつる事も玉と見ゆらむ

行政

松風のひとき残れる宿にしものどかに咲ける花の色かな

仲忠

内にて讀ますなりぬ。斯かるほどに、少將仲頼「久しくなりぬ。いと畏し」
(三)

(語釋)
(二)斯程に美しき色を見ながらそれを棄てて君が歸るかと思つて居らん

(三)露内に居たりし故歌の席に連らざりし也

(考異)
(一)とて一ナレ



梅の花笠

(語釋)
 (一)帝の消息あるを月影の見ゆるといへり
 (二)刊本此のつゞきに「と清らに云々」とかき起せる二枚ばかりの文あり。これは「あて宮」の巻の巻末の文の挿入せるものなり。故に今こゝには除きて「あて宮」の巻に出せり

とて急げば、北の方、内裏の御返し。
 後隆女白雲のやどるも嬉し谷といへどそらにし月のかけも見ゆれば
 と聞え給ひて、綾、搔練のうちぎ一かさね、はかま具したる女の装束一くだりか
 づけ給ふ。急ぎまるりぬ。他人々とどめ給ひて、遊びあかして、つとめて歸り給
 ふに、おなじやうなる女の装束かづけ給ふ。

吹上(上)

梗
 ① 涼の素性。紀伊國牟婁の長者神南備種松の奉養。② 仲頼、行政、仲忠等相誘ひて涼を訪はんとす。③ 仲頼等吹上に到る。④ 三月三日の節供。仲忠やどり風の琴を涼に贈る。⑤ 木の院の花見。⑥ 種松の院の上巳の禊。⑦ 藤井の宮の藤の宴。⑧ 仲頼等歸らんとす。⑨ 贈物。⑩ 鷹狩。⑪ 吹上の宮に春を惜む。⑫ 送別の宴。⑬ 仲頼の男忠保歸京の人々を饗す。⑭ 仲忠等正頼に吹上の有様を語る。⑮ 贈物を所々に頒つ。正頼夫婦實忠を憐む。

概
 ① 涼の素性。紀伊國牟婁の長者神南備種松の奉養。② 仲頼、行政、仲忠等相誘ひて涼を訪はんとす。③ 仲頼等吹上に到る。④ 三月三日の節供。仲忠やどり風の琴を涼に贈る。⑤ 木の院の花見。⑥ 種松の院の上巳の禊。⑦ 藤井の宮の藤の宴。⑧ 仲頼等歸らんとす。⑨ 贈物。⑩ 鷹狩。⑪ 吹上の宮に春を惜む。⑫ 送別の宴。⑬ 仲頼の男忠保歸京の人々を饗す。⑭ 仲忠等正頼に吹上の有様を語る。⑮ 贈物を所々に頒つ。正頼夫婦實忠を憐む。

● 涼の素性。紀伊國牟婁の長者神南備種松の奉養
 (語釋)
 (一)女蔵人をつとめしが其を帝ひそかに寵幸ありて皇子が生れし也
 (二)名は涼
 (三)種松夫婦をいふ
 (四)清げに清げにて
 (五)たばかり取りて
 (六)けり取り

かくて紀伊國牟婁郡に、神南備の種松といふ長者、限なき寶の王にて、たゞ今國のまつりごと人にて、容貌清けに心つきてあり。それが妻、元は源恒有と申しける大納言の娘、良き聲取りなどしたりけるを、程もなく、親も夫も失ひて、世の中に住みわづらひたるを、種松たばかり取りて、その腹に、よき女一人有りければ、内の蔵人仕うまつりけるが腹に、源氏一所生れ給ひけり。母生み置きて隠れぬ。帝知ろしめさず、母奏せすなりにけり。斯かれど祖父、祖母さふらひけり。

(考異)
(一)わたりほど

(二)なるけしきありを敷き

(三)中に一香に

吹上の濱のわたりに、^(三) 廣く面白きところをえらび求めて、金銀、瑠璃の大殿を造りみがき、四面八町の内に、三重の垣をし、三つの陣を据ゑたり。宮の内なるけしき、大殿十、廊などして、紫檀、黒枋、黒柿、杏など云ふ木どもを材木として、金銀、瑠璃、碑礫、瑪瑙の大殿を造り重ねて、四面めぐりて、東の陣の外には春の山、南の陣の外には夏のかげ、西の陣の外には秋の林、北には松の林。表を廻りて植ゑたる草木、たどの姿せず、咲き出づる花の色、木の葉、此の世の中に似ず、梅檀、優曇華まじらぬばかりなり、孔雀鸚鵡の鳥遊ばぬばかりなり。

種松、寶は天の下の國になき所なし。新羅、高麗、常世の國まで積み藏むる寶の王なり。其の種松思ふ様、わか君は、我が女の腹に生れ給はざりせば、親王にもなり、帝にも知られ奉りて、都にてぞ生ひ出で給はまし、我がつたなき女の腹に生れ給へれば、かく知られぬ君にてあるなり、其のかはりには、我が國の内



吹上(上)

(語釋)
 (一)金を織りつけたる布なりといふ
 (二)宮内省に屬して宮中にて使用せらるる器物を作る役所

(考異)
 (一)まつることまつれること
 (二)上下に「に」ナシ
 (三)とて「に」ナシ
 (四)出でて「に」ナシ
 (五)出でて「に」ナシ
 (六)ひとしく「ひ」としき
 (七)一粒に「二石」一穂に「二斗」
 (八)取らぬは「は」ナシ
 (九)限りの「つくし」限りは物の師をあてくだし
 (一〇)作物所「すまて」つくも所の人々京の内なるを擇び多くすまて「つくも」所の人々京の内なるを所々に多くすまて

だに、われ一人して、國王の位に劣らぬ住居せさせ奉らむ」とて仕うまつること(一)と限なくめでたし。春は一二萬町の田に、苗代を蒔き苗を植ゑても、「これ我が君の御年の料に乏しかるべし」と歎き、二三十萬疋の綾、緋金錦を數へ納めても、「御飾りに乏しかるべし」と急ぎ、上下に仕うまつる人、女三十人ばかり、男上下あはせて百餘人ばかり、女は髪揚げて唐衣着では御前に出でず、男は冠し上の衣著では御前に出でず。鮮かに清らかなる裝束を換へて著せむ、ゆたかに飽き満てむとてすること、同じく作る田と雖も、車の輪の大きなる日七つ出でて年の内(四)照すとも、一筋焼くべからず、天とひとしく水湛へて浸すとも、一筋流るべからず、山のする、巖の上にも、種松が落せる種は、一粒に一二石取らぬはなし、養蠶をすれども、種松が蠶ひとつに、絲の十廿兩取らぬはなし。かくて名ある限(七)の綾、縹を作物所の人、金銀の鍛冶どもを選び、所々に多く据ゑて、世にありとある物の色を、あり難く清らかに調じ設くること限なし。山を崩し海を埋め

ても、我が君の願ひ給はむものを仕うまつらむ、と急ぐ。

かく仕うまつりありく源氏の君のおはします様、また此の世にうまれ生ひ立つ人にもあらず。顔容貌よりはじめ奉りて、様心ばへに至るまで、敵なし。文を讀み、遊をし給へど、習はず師に多くし勝し給ふ。京の物の師といふ限は、迎へ取りつよ、彼が才をば習ひ取り、我が才をば彼に教へつよ、かしこき琴の上手、公を恨みて山籠れるを迎へ取りて、さながら習ひ取りなどして經給ふ程に、廿一になり給ふまで御妻なし。よき人の女ども奉れども、思ふ心ありて、え給はず。

かよる程に、右近尉清原松方、近衛府の少將仲頼に、陣にていふ様、「松方は、いと興ある人に見給へつきて、内裏にも参り侍らざりつる」少將、仲頼、何處なる人ぞ」松方、「紀のまつりごと人、神南備種松と申す、言ひ知らぬ寶の王侍り。それが孫にもものし給ふ君なり。それ、彼よりしばく召しよかども、宮仕いそがしき内

(考異)
 (一)仕うまつりつかま

(二)おはします様またおはしますやうは

●仲頼、行政、仲忠等相誘ひて涼を訪はんとす

(語釋)

(三)涼の

(四)仲忠

(考異)

(一)二十町二十丈

(二)竝み立ち一立ち竝み

(五)世に一世の中に

(六)となむーなんど

に何かは、とてまかり下らざりしを、種松まう上り来て、切に恨み申しよかば、あからさまにとてまかり下りしかば、いとこそめでたく侍りしか。彼の君の住み給ふ所は、吹上の濱のほとりなり。宮より東は海なり。その海面に、岸に沿ひて、大なる松に藤かよりて二十町ばかり竝み立ちたり。それに次ぎて、樺櫻一列に竝み立ちたり。それに沿ひて、紅梅竝み立ちたり。それに沿ひて、躑躅の木ども北に竝み立ちて、春の色を盡して竝み立ちたり。秋の紅葉西おもて、大いなる河面に韓紅のごと波を染め、色を盡し、町を定めて植ゑ渡し、北南時をわけつよ、同じ様にしたたり。宮の内をば更にも言はず。あさましく見る効ある所になむ侍る。彼の御容貌、身の才など藤侍従の君と等しき人になむ物し給ひし」仲頼「いと興あることかな。彼の侍従と等しき人の又あるよ。神南備藏人の腹に生まれ給ふと聞きし君ぞかし。只今の世に、珍らしき人生ひ出で給ふ」となむ、紀伊守の院に奏せし君にこそあれ。いかで然は生ひ出で給ふらむ。忍びてこれかれ行かば

(語釋)

(一)左兵衛佐良孝行政

(二)御供申すべし

(三)仲頼

(四)涼をいよ

(五)仲忠が琴をひくものか

(八)仲忠が紀伊へ行きたらばその後で

(九)東宮の弟宮なるべし

(考異)

(六)まさじーまさじ

(七)承り給はねばー承らぬ心は

や。藤侍従は御暇ぞ無かめる。良佐ぬしなどして物せむ」松方「いと面白きことかな。御前賜はらむ。然つかさの佐の君、藤侍従の君、良佐ぬしのおほん遊びなどのかしこきこと語り申しよかば、「如何ならむ世に對面賜はりて、御遊ども承らむ」など申されたりき。まいて人々下り給ひなば、疾にやえ歸り給はざらむ。彼處見給ふるには、つたなき松方らだに、京のこと思ひ出でられずなむ侍る。まして君たちの、物の音掻き合せつよおはしまさむは、故郷は思ほしかけてむや。怪しく見給ふるにかひある君になむ物し給ふ」仲頼「忍びて必ず物せむ。侍従、如何にたばかりて具して下らむ」松方「忍びて誘ひ聞え給へかし。彼の君ばかりぞ、源氏の君のおほん琴には對ひものし給ふらむ。聞召し較べばや」仲頼「まさじに爲むやは、仰せごことをだに承り給はねば。さても騒がれなむ。今東宮には琴の御琴、若宮には琵琶仕うまつり給ふめれば、御暇ぞ無かめる。われこそ安けれ。唐土に渡るとも、制し給ふ親もなく許し給はぬ君もおはせねば」松方「そ

吹

上(上)

〔語釋〕
(一)仲頼が来て宮に懸想
せるをいふ歎

(四)行く氣にはなつて居
るものの

〔考異〕
(二)酔ひにける―酔ひけ
る

(三)彼の―こゝ

れも苦し氣に物し給ふ時もあめりき」など言ふ。

かくて仲頼、まかづるまよに、兵衛の府に立寄りて、仲頼「良佐ぬしは此處にか、
上に候はぬは」と言ふ。行政出で來たり。仲頼「久しう對面賜はらずなりにけれ
ば、その畏まりも聞えむとてなむ」行政「甚だかしこし。などか久しう参り給は
ざりつる」仲頼「一日春日にて、こよなく給へ酔ひにける名残に、なほ苦しう侍
ればなむ。まことや、仲頼いと興あることを承りて、主に聞えむとてなり」行
政「何事ぞや。君の御耳に入り給ふは、こともなき事ならむ」少將、仲頼彼の紀
伊國の源氏の御上を、松方が語り申しつるに、仲頼しづ心なし。あからさまにま
かり下らむとするを、いざ給へ」行政「神南備の藏人の腹なり。いと有り難き君
と聞き奉るぞ。行政も早くより承りて、出で立ち侍るを、暇の侍らねばなり。
必ず仕うまつらむ。何時かは物し給ふ」仲頼「廿九日ばかりにとなむ」行政「如
何に藤侍従は物せむと宣ふや。必ず彼の主をこそ率て下り給はめ」少將、仲頼「未

〔語釋〕

(二)仲忠の父兼雅の別荘

(四)父が叱るならん

(八)「思う給へつるを」
なるべし

〔考異〕
(一)佐―ちうすけ

(三)ことなり―ことなな
り

(五)申しやはし給はぬ―
やは申し給はぬ

(六)宣はねば―宣はねば

(七)得なむ―「なむ」ナシ

だ申さず。それをぞ思ひ侍る、御暇の無かめれば」佐、行政「御暇なくとも、彼の
主は出で立ち給ひなむ。いざたまへ、桂へ」とて桂殿へ行く。

かくて桂殿にまうでて、藤侍従を呼び出でて此の事を言ふ。仲忠「いと嬉しきこ
となり。例の殿や勘當せむ。申しやはし給はぬ」と言ふ。仲頼左大將のおとどに
聞ゆ、仲頼「明後日ばかり、いと興ある所の侍るなる、見給へにまかり出で立つを、
侍従の君おはしまさせむとなむ思ひ給へ立つを、如何ならむ」左大將、兼雅「何處
へぞ」仲頼「紀伊國、吹上の濱のわたりへなり」あるじの主、兼雅「若し源氏の御許
へか」仲頼「然なり。今朝、府のまつりごと人、松方が語り申しつるに驚きて
なむ、俄に出で立ち侍る」あるじ、兼雅「仲忠も常に物せむとて出で立つ所なり。
然れど、許し宣はねば、得なむまからざるを、何かは、率て下り給へかし。一
人はえものせじ。人々ものし給ふなれば、いと後やすかなり」仲頼「いと嬉しき
事なり、斯くとり申さむに、いと畏しと思ふ給へるを」などとて歸りぬ。

吹

上(上)

- (一) 留守の氣がかりさを
とす也
- (二) 留守の氣がかりさを
とす也
- (三) 仲頼が
- (四) 俄には請け出す事も
出来ぬ
- (五) 「も」は「母」を草書
にかきしを誤り寫したる
ものなるべし 此字なき
本もあり
- (六) 食物
- (七) 貧乏なりとて
- (八) 物へ一物に
- (九) 物へ一物に
- (一〇) 物へ一物にも
- (一一) 稲一蔭一位置
- (一二) 見むやは「は」ナシ
まうけの物

かくて、仲頼、宮内卿殿にかへりて、仲頼「明後日ばかり、物へあからさまに物せむと思ふを、如何に覺束なからむ」仲頼妻「何處へか物し給ふらむ」少將、仲頼「近き所ぞ。藤侍從、良佐などして物すべき所ぞ」など言ふ。女父母に、仲頼妻「明後日物へ物し給ふなるに、彼の御隨身などを如何にせむ」など言ふに父母、「あぢきなし。何せむにか、思ひ物し給ふ。物へも物し給ひなむ程、此の節會に佩き給ふ御帶刀を質に置かむ」女、仲頼妻「さて正月の節會などには如何せむ。疾にえ取り出でずもこそあれ」父母「あぢきなし。稲多く出で來なば、いと疾く出だしてむぞ。世に恥を見むやは」御帶刀とり出でて、大藏史生の家に、錢十五貫が質に置きにやりて、御供の人、道のほどの割籠などせさす。も、「御物など清けにせさせよ。便なきなべに悪くしたらば、やさしからむ」あるじの主、忠保「世間は同じごと。わが聲の君だに心留め給はど。財を盡して勞はる所には居給はで、我がかく貧しき所におはすれば、恥は隠れぬ」など言ふ。



吹

上(上)

③ 仲頼等吹上に到る。三月三日の節供。仲忠やどもり風の琴を涼に贈る

(語釋)
(二) 仲忠の心

(四) 騎射の番組

(五) 紀州粉河寺

(六) 仲頼を御連れ申して来て下され

(考異)
(一) 良佐—良佐と

(三) はひりて—はひり

かくて皆出で立ちて、狩衣装束をして、直衣装束は持たせて、少將、良佐、藤侍
従の住み給ふ桂にまうづ。それより侍従やがて出で立ち給ふ。いとになく、都
の土産に何をせむと思ふに、彼處に無きもの無かるべし。昔所々に分たれし琴の
残、やどもりかぜと言ひしを、彼の京極と言ひし所に埋みたりしを、母に問ひ聞
きて、夜切かに、取りに、童一人を率ていまして、取り出でさせて、それをなむ持て
下り給はむとする。大將殿、出で立つ人に變し給ふ。三所の君だちに蘇枋の卓四
つづつ立てて、隨身などにも、様々につけて賜ふ。かくて皆出で立ち給ふ。

紀伊國に到り給ひて、松方、先づ吹上の宮にはひりて、君の御前につい居る。君
涼「あな珍らし。いと心もとなくて歸りものせられにしを、嬉しうも對面するかな」
松方「甚だかしこし。候はむと思ふ給へしを、手番の事など侍りしかば、それに障
りてなむ、急ぎまう上りにし。今日は、府の源少將、粉河にまうで給へる御供に
なむ候ひつる」あるじの君、涼いと嬉しき事かな。このわたりに便あらば、おはし

(語釋)

(四) 「ゆるよ」と歎

(考異)
(一) 思う—ゆる—思ひて
琴り給へる

(二) 長まり—長まりてと

(三) はひり—はひ入り

(五) 仲忠の—仲忠に

(六) 急ぎ—急ぎ

まさせ給へ。おほん馬など休めさせ奉らむ」松方「さやうになむ思ふ給へて参り
給ふめる。あるじの君、涼「畏まり申し給へ」など宣ふ。あるじの君、内にはいり給
ひて、良き装束などし給ひて、南の端より降りて客人たち迎へて、寢殿の南の庇
に、四所著きつらね給ひぬ。

かくて種松、御饗應仕うまつる。土器など度々になりて、思ひしごと、物の音な
ど掻き合せつと遊び給ふに、少將、良佐など、いと哀にめでたき人の、斯く籠り
ものし給ひけるよ、けに仲忠の等しき容貌なるを見るまよに、めでたしと見ること
限なし。少將、あるじの君に聞ゆ。仲頼「仲頼多くは此處にえまゐり來じなり。松
方、ことの序に語り申しよを、承りしに、他心なくて、夜を晝になしてなむ急ぎ
まうで來し。けに効ありて、思ふ給へしごと、對面賜はりたるが嬉しき事。吾が
君や、などか、斯くては籠りおはしますらむ。東宮の、只今、物の音珍らかに
たさむ人いかで得む」と宣ふを、如何に悦び聞え給はむ。京に御座しまして、さ

吹

上(上)

(語釋)
 (一)粉河寺參詣の序に御立寄ありしことと聞きて其をさへ恐縮に思ひ居しに
 (二)言語に述べがたく
 (六)立派な人の例には
 (七)涼が
 (八)憎る所なき身ならば
 (九)涼の方から来てくれぬか
 (一〇)誤あるべし
 (考異)
 (一)便りに：殊更にと一便りに此のわたりに侍るなど奏せし人の侍るを承はりてかしこまり申しつるを殊更にと
 (四)怪しうも「し」ナシ
 (五)何か一などか
 (一)臺盤にたにするて一臺盤にたにするて一臺盤にたにするて

やうの御宮仕などをもせさせ給へかし」あるじの君、涼「甚だかしこし。ゆに斯くむつかしき所にのみ籠り侍れば、いとど拙き心地するを、京に上りて宮仕をも仕うまつらまほしう侍れど、かくて籠り侍りたる人の、俄に交らひなどせば、見苦しきこと多く、累代の譬にもやならむ、とて年頃を斯くて過し侍りつるを、便に此のわたりに、など承りて畏まり申しつるを、まして殊更にと承はれば、とり申す限にあらず、かしこまり申し侍る」少將、仲頼「甚だかしこし。怪しうも宜ふものかな。京に侍る人は何か侍る。田舎におはしませども、我が君をこそ世の例には聞えぬ。東宮、かくておはしますと聞召して、いかで對面賜はらむ。忌なき身なりせば、そのわたりにこそは物せぬ。然得あるまじきを、上りやはし給はぬ」など聞え給ひきなど言ふ。種松、三月三日の節供なむどかはかり仕うまつれり。あるじの君、客人三所の御前に、銀の折敷、かねの臺にするて、花文綴に羅重ねておもて、織物、綾、かとり、羅重ねて打敷にし、數の銀の臺盤にたにするて

(語釋)
 (二)乾菓子
 (六)未詳
 (七)儀式の膳部
 (八)誤りあるべし
 (九)誤りあるべし、「こついしき」を「こついしき」「よついしき」などとも書けり
 (考異)
 (一)参れり一参る
 (三)すみひる一すみひる
 (四)おもてに一おもて
 (五)重ねて一て「ナシ
 (一〇)泊のししまの
 (一一)撰み一撰び

参れり。干菓物の花いと殊なり。梅、紅梅、柳、櫻、一をしき、藤、躑躅、山吹、一をしき、さては緑の松、五葉すみひろ、一をしき、その花の色、春の枝に咲きたるに劣らず。干物、菓物餅など調じたる様珍らかなり。山海、河、天の下にある物の無きなし。沈の臺盤二よろひ、おもてに羅重ねて覆ひて、沈を一尺二寸ばかりのからわに、轆轤に挽きて、様々に色どりて、威儀のおも参る。をさに紫檀のおほん折敷四つづつして参る。御酒参る。つかふこついしき盃など、いと珍らしく殊なり。客人たちのおほん供の人は、少將の供の人に、まつりごと人松方、目、春日、村蔭、府生、狛、康頼、番長、大倭、貞松、府生、山部、員業、舍人、八人、武士、舍人とも同じ數なり。これ等は、物のし様心ばへ有り、容貌あるもの撰びたり。御馬添、小舍人、さぶらひの人、かたちを撰み、装束を整へて多かり。それ等が前ごとに、卓ども立てて、いかめしき饗應をし給ふ。かくて御土器はじまり御箸下りぬ。人々の御前の折敷どもを見給ひて、仲忠の侍

從、花園の胡蝶に書き付く、

仲忠花園に朝夕わかず居るてふを松のはやしはねたく見らむ

少將、林の鶯に書き付く、

仲頼常盤なるはやしにうつる鶯をとくらの花はつらく聞くらむ

あるじの君、水の下に魚に、

涼底きよくながると水にすむ魚のたまれる沼をいかど見るらむ

良佐、山の鳥どもに、

行政葦しける鳥よりすだつ鳥どもの花の林にあそぶ春かな

かくて仲忠の侍従、あるじの君にやどもり風を奉り給ふとて、仲忠「これ、昔所

所に分れけるを、御料にとてなむ、一つ残して侍りつる」あるじの君舞踏してと

り給ひて、曲一つ弾き給ふを聞きて、仲忠大に喜び、仲忠世の中に有り難きお

ほん手なり。これは、昔仲忠が親とひとしき人ものし給ひける、其の御傳にこそ

(語釋)
一魚を客人にたとへ沼を己の住所にたとへたり

(二)鳥を己等に花の林を涼の家にとへたり

(三)俊隆の携歸へりし琴の方々へやられしをいふ

(考異)
(四)つる一ける

(五)喜び一喜ぶ

(語釋)
(一)琴をひかすして

(三)涼の上手にひく琴の篇に

(四)あて官の事

(六)無妻の生活

(考異)
(二)殊に一と

(五)などか一などかは一など

(七)住みにくく一住みう

あめれ」などかしく驚く。あるじの君、涼此の御琴は、先づ試みさせ給ひてこそ良からめ」仲忠「然ること仕うまつらで久しうなりぬれば、掻き鳴らさむことなむ思ほえず侍る」などつれなく言ふ。かくて、物の聲かき合せ、あるかぎり、聲合せ、調子合せつと遊び暮らす。少將、仲頼御前にて、節會ごとに、惜む手なく仕うまつる折々も、殊にかよる物の音などは聞えぬを、いと珍らかにもあるかな。一所に遊ばす御琴の音に、多くの人の手なむ勝りぬる」行政、「左大將殿の、春日にてし給ひし遊びをなむ、珍らしき心地せし。それにも、今日はこよなく勝りてなむ思ほゆる」など言ふ。少將、かく面白き所に、ある限の上手つどひて、明け暮れ遊びわたれど、心に思ふことは猶忘れぬまよに、あるじの君にも聞ゆ、仲頼かく面白き所に、などか心すごき住居はし給ふらん。天下の物の興も、一人見るには効なき事なり。見る人ある時になむ、今少し勝るものになむ。此處を一所御覽するは、秋の池に月の浮ばぬに思はされずやは」あるじの君、涼けにいと住みに

吹

上(七)

(語釋)
(一)此片田舎までよき女の来んことは思ひもよらずといふ事歟

(三)正頼

(四)忠保、仲頼の妻の父

(七)仲澄

(八)あて宮

(考異)

(二)御覽せむに御覽せむも

(五)知らずいざ知らず

(六)男も女子も男女など

くと思ほゆれど、かく深き蓬のすみかを、見すべき人もなければなむ、心にもあらぬ住居にて久しうなりぬるを、世中に不益なる人もなかりければ、此のわたりまでは思ほえずなむ。少將、仲頼「京に見給ふるに、人の御覽せむに殊なるかたはなき女などは、多かるものにこそあめれ。しな卑しからず、心ある人の御女どもなどはいと多くて、男少き所なれば、仲頼等が怪しからぬものに、よき女いと多くつきてなむ時めかすめる。よき女といへど、一人あるは、悪しき二人に劣りたるものなれば、我もくと、男一人に女二人三人つきてなむある」と言へばあるじの君、遠いと多かなる中にも、御つかさの大將、さては宮内卿殿の御女どもなむ、有り難きかたち心になむ物し給ふと承る」仲頼「宮内卿の女は知らず大將殿の君たちは然物し給ふなり。男も女子も、人にこそよく勝り給へり。其の中にも、男は七郎にあたり給ふ侍従、女の中には九にあたり給ふなむ、いとこそよく物し給ふ。彼の女君をば、只今の天の下の人、え聞過し給はず、これかれ聞え給

(語釋)
(二)目的は到底達し得じと知りながら

(五)不動の御倉にて、開かぬ事にきめたる倉の義か

(六)實忠

(七)自分がよい年をしなから實忠に比べては物の衰を知らぬよと思ひ知られたり

(考異)
(一)あめればあなれば

(三)先づーナシ

(四)怪しかなるは怪しう思へるは

(八)世に一身に

(九)餘所にてしてナシ

ふめれど、思ほしたることあめれば、えあるまじと知りながら、猶人々聞え給ふめる。けにいと怪しうおはしますなり。御容貌よりはじめて、御心なむ又斯かるこそいと怪しけれ」仲忠「先づいと怪しかなるは、父のおとどの、ふどうの御倉ひらきて、多くの財失ひ給ふなるこそはいと珍らかなれ。其が中にも、此の春日にて遊ばしよ五箇の聲にこそ、仲忠多く涙は落してしか。鶯のはるかなる聲、松風のとほき響に、のどかなる聲を調べ合せ給ふには、鳥獸、山伏、山人、耳ふり立てぬはなかりき」少將仲頼「其の中にも、源宰相の御氣色の、吾にもあらで聞き居給へりしを見給へしにこそ、老の世に物の哀知られず侍るを、多く思ひ給へ知られにしか」あるじの君、遠けに如何なる心地しけむ。餘所にて承るだに

あるものを」と宣ふ。

畫詞 此處は吹上の宮。南おもて、大きな野邊のほとり、松の林、二十町ばかり、長ひとしく姿おなじ様なり。野邊清くひろし。鹿、雉子數知らず有り。

吹

上(上)

(語釋)
(一)木の根に至るまで上品に見ゆ

(二)内の造作の意匠、一もとの「の」の「な」も本もあり

東おもて、濱のほとり、花の林二十町ばかりなり。花は御垣の下まで並み立ち、満つ潮は、御垣の下まで満ち、干る潮は花の林の外をかぎれり。潮満ちては、花の木は海に立てること見ゆ。砂子うるはし。木の根品なく見えず。いろくのこ貝ども敷けるごとあり。宮より西、大なる川のほとり、二十町ばかり、紅葉の林の長ひとしう敷おなじ。宮より北おもて、大なる山のほとり、山より下まで、常磐の木色をつくしたり。町のほど、木の敷、南とひとし。宮の内、四面めぐりて、三重の垣、三つの陣の面ごとに、檜皮葺の御門三つ建てたり。馬場殿、大なる池、大なる山の中に、いかめしき反橋あり。池のめぐりに、花の木廻りて立てり。埵結ひたり。側に西、東の御厩、別當あづかり事々しう、御馬十づつ。鷹屋に、鷹十づつするたり。大殿町、檜皮葺の、金銀、瑠璃して造り磨きたる大殿、渡殿、更にも言はず、照り輝けり。住み給ふおとどのうちつくり、御座所心ことなり。客人三所、あるじの君に琴奉り給へり。あるじの



吹

上(上)

三三一

林の院の花見

(語釋)
(一)濃き鼠のやう白みたる色

(考異)
(一)著たりしなり

(三)内一うちなり

(四)男どもは「は」ナシ

(五)十の八十の

(六)高く一高う

君舞踏して賜はり給ふ。少將、箏のこと、良佐琵琶奉り給ふ。

かよる程に、濱のほとりの花盛になりぬ。君たち、花御覽じに、林の院に出で給ふ。其の日の御まうけ、種松が妻仕うまつり給ふ。今日の御装はみな直衣の御衣

ども、御供の人、例の上のきぬ、櫻の下襲など著たり。皆徒歩より出で給ひぬ。御前の物、皆女の仕うまつり給ふなれば、賄より始めて、女の仕うまつる。沈の折敷

二十、沈の輓轡挽のおほん坏ども、敷物、打敷、心ばへ珍らかなり。あを色、しら

つるばみの唐衣、綾の摺裳、あやの搔練の鞋、あはせの袴著たり。大人髪長にあ

まり、いろ白くて、年廿歳よりうちの人十人。同じ青色に、蘇枋、繚のはかま、あ

やの搔練のあこめ一襲、あはせのはかま著たる童、髪長とひとしくて、年十五歳より内、長ひとしく、姿同じき十人。男どもは、御階の下まで十の御折敷を取り

つどきて立ち並び、下仕は、御簾の下まで取り次ぎ、童は御前に参り、大人四人は、御前のこと賄をす。童の手より次ぎて参るに、長高くうるはしき盛物を四盛

(語釋)
(三)仲頼

(四)あて宮の事

(六)「か」るは「も」るの誤か

(考異)
(一)詩一歌

(二)かゝる程に「かゝる

(五)なる一なり

折敷一つにするて、遠くより参るに、聊かなる過せず。男君たちの御前に立ち居仕うまつるに、めやすく勞ある童べなり。かくて物の音など掻き立て、例の遊びなど振舞ひて、詩つくりなどしつと読み上げて、琴に合せて諸聲に誦んじ給ふ。かよる程に少將、かく面白き所に、あるかぎりの上手集ひて、世の一の琴笛吹き立てかき鳴らしつと、清らをつくして遊び渡れど、病に就き伏し沈みて思ひしことは慰むべくもあらず、歎きわたるに、花誘ふ風も心すごく吹くに、濱邊を見わたし給ひつと、花は色を盡し、たゞ今盛なる、風にきほひて散りかひ、漕ぎ渡る小舟近く、かへる花と一つにつどきて見ゆれば少將

仲頼行く舟の花にまがふは春風の吹上の濱を漕けばなりけりあるじの君、涼春風の漕ぎいづる舟に散りつめばまがきの花を餘所に見るかな侍従、

仲思ゆく舟に 花の残らずふり敷けば我も手ごとにつまむとぞ思ふ
良佐

(語釋)
(一)涼の世に埋れたるを
嘆くなり

行政風吹けば とまらぬ舟を見しほどに花も残らずなりにけるかな
など宣ふ程に、宮より種松が妻君、合せ薫物を山の形に造りて、黄金の枝に銀の
櫻咲かせて立て竝べ、花に蝶ども數多すゑて、其の一つに斯く書きつく、

種松妻櫻花 春は來れども雨露に知られぬ枝と見るぞかなしき
(一)

とて、よき童して、林の院に奉れり。君たち見給ひて、蝶ごとに書きつけ給ふ。

侍従、

仲思 雨露の こすゑをわかすかよればや花の枝とは人の知るらむ
少將

(三)こすゑをこすゑも

仲頼 春風の 吹上にはほふ櫻 花雲のうへにも咲かせてしがな
あるじの君、

涼さくら花雲におよばぬ枝なれば沈めるかけを浪のみぞ見る

良佐

行政櫻花 そめ出だす露のわかねばや底までにはふ色も見ゆらむ
(二)

松方、

さくら狩濡れてぞ來にしうぐひすの都にをるは色の薄さに
(三)

近正、

人傳に聞きこしよりも櫻花あやしかりけり春のかきまは
(四)

時蔭

白雲と見ゆる櫻もあるものをおよばぬ枝と思はざらなむ

種松、

撫で生ほすかひもなきかな櫻花にはふ春にもあはずと思へば
など言ひて、夜一夜遊びあかす。其の日のかげ物、種松が妻君、
よそひ出でた
(五)

吹 上(上)

(語釋)

(二)「をる」は「ある」
又は「さく」の誤か

(四)垣間の意歟、「か
さま」とかける本もあり

(考異)

(一)色も一枝も

(三)薄さに一薄きに

(五)よそひ…なべて一よ
そひ一くだりづつあやも

〔語釋〕
〔三〕「あるじの君の御博士」なるべし

〔五〕漁者の長

〔七〕松方時隆等

〔八〕「しちべ」歎、「も」の二字なき本もあり

〔六〕渚の院の上巳の祓

〔考異〕

〔一〕ばかりナシ

〔二〕「御前に」參るゝひとたまへにふきにつゞき參る

〔四〕「才」

〔六〕唐の「かうの」

り。なべて物の色も珍らかに、清らなり。

〔畫詞〕此處は林の院。廣くおもしろき濱に、花の色をつくして竝み立てる中に、高く清らなる大殿立てり。其處に君たち竝み居給へり。上のきぬ装束の人八十人ばかり立ち續きつと、一御前に二人づつ參る。君たち御文つくり給へり。あるじの君、御博士の大學の助、講師して讀みあぐ。君たち、琴にあはせて誦んじ給へり。侍従更にも言はぬ様なり。かづけ物三宮持て出でたり。あるじの君、取り給ひて、侍従よりはじめてかづけ給へり。

かくて三月十二日に、はじめの巳の日出で來たり。君たち御祓しに、渚の院にいで給ひて、蟹、潛女、召し集へて、よき物かづかせ、むらきみ召して大綱引かせなどし給ふ。其の日の折敷、銀の折敷二十、打敷唐のうすもの、綾かたりのかさねしたり。かねの御坏どもして、御前ごとに參りたり。尉どもに、蘇枋の卓ども二つづつ賜へり。かくて例の君たちは、琴彈きしもへ童、笛吹きかはし遊び暮し

て、夕暮に、大きな釣船に、蟹の栲繩を一船繰りおきて漕きわたるを、少將見て、仲頼「これ斯く見ゆとも、仲頼が志よりは短からむかし」など言ふを、あるじの君打笑ひて、

涼くる人の心のうちは知らねどもたのまるよかな蟹の栲繩
侍従、仲思「此處まで參り來るも劣らじかし」とて、

仲思道とほき都よりくる心にはまさりしもせじあまの栲繩
少將、

仲頼「こゝにくる長き心にくらぶれば名にや立つらむ沖つ栲繩
と言ふ程に日かたぶぎぬ。あるじの君、かく面白き所に、勢あるすまひはし給へど、よき友だちに逢ひ給ふこと此の度なれば、斯くてのみおはしまさなむ、と思ほせど、さて物し給ふべき人々にもあらぬを思ほす程に、渚より都鳥つらねて立つ折に、濱千鳥の聲々鳴くを聞きて、あるじの君、

〔語釋〕

〔二〕志は

〔考異〕
〔一〕來るも一來るに

吹

上(上)

涼みやこ鳥友をつらねて歸りなば千鳥は濱になくくや經む侍従、仲忠「我が君をばまさ」などて、

仲忠 雲路をばつらねて行かむ様々にあそぶ千鳥の友にあらずや少將、

仲頼 都鳥千鳥をはねにするてこそ濱のつとて君にとらせめ

行政

君問はどいかにこたへむ濱にすむ千鳥さそひに來し都鳥

などとして夜一夜遊び明かす。

畫詞 此處は渚の院。大きに高き大殿、汐の干満つかたに立てり。めぐりはをかしき島ども數多あり。頭つよみたる女ども、かきあつめて潮酌みかけたり。鹽釜に潮酌みいれ、はつかなる蟹の庵どもあまた。かけて乾す手つきつきぐしく藻干したり。

(一) 豈棄てて行かんやの意

(二) 「などとして」なるんし

藤井の宮の藤の宴

(一) まつばのまつはし

(二) 下りたるをいものし

(三) 敷物一ナシ

(四) ども一ナシ

三月中の十日ばかりに、藤井の宮に藤の花の宴し給ふ。君たち出で給ふ。御装束は關腋の青きしらつるばみ、綾の上のきぬ、蘇枋の下襲、線の上のはかま、螺鈿の太刀、唐組の緒つけて奉り、おほん馬添甘人、紫のきぬ、白絹のうちばかま著つよ、四所に廿人づつ仕うまつる。客人の御前には、衛府の尉どもまで、あを色に柳がさね著、あるじの君の御供には、宮の侍の人十人、青色のまつばの上のきぬ、柳襲著たり。其の頃の紀伊守は、藏人より出でたる人なれば、此の少將などの下りたるを聞きつけて、吹上の宮に、國の司どもひき率てまうで給ひて、藤井の宮にわたり給ふ。

かくて皆著きわたり給ふ。其の日のおほん設、種松仕うまつれり。君たち四所國の守までに、紫檀の折敷二十、紫檀の轆轤挽の坏どもして、敷物、打敷、心ことなる錦あやなり。蘇枋の折敷、蘇枋の轆轤挽の坏どもするて二つ、おほん供の人の前毎に立てわたし、御土器はじまり、おほん箸下りて、守の主少將に宣ふ、

〔語釋〕
(一)自身君の御許に参上せんと思ひ居しうちに延引したり

(二)宮家「ちはやけ」歎

(四)正頼

(六)前任中の事につきて訴ふるなるべし

〔考異〕
(三)どもーどもの

(五)只今ー只今は

(七)答へてーさひて

(八)よはひはーよはひも

紀伊守「下り給へりけるを、え承らざりけるかな」少將、仲頼「願侍るを果さむと思ふ給へしかども、思ひ立たず侍りしに、此の吹上の宮を承りてなむ、神の御許にだにものうく侍りしを、俄に出で立ちて侍りし。自らをと思ふ給へし程になむ、怠りにける」守のぬし、紀伊守「此の宮に参り來ざりせば、得對面賜はるまじくこそありけれ。如何に京には何事か有らむ。あさましう前の守の爲亂りける國にまうで來て、宮家のつかひども入りみだれてのよしり、公事は慰む方もなきに、見給へわづらひて、いはゆる田舎人になむなりにて侍る。大將殿も平らかにおはしますらむ」少將、仲頼「只今、大將殿には平らかにおはしましき。京には異なることなし。此の國のさきの守、うれへをなむ言ひのよしる」など答へて、例の物の音ども掻き合せて、土器度々になりて、君たち和歌遊ばす。「藤の花を折りて松の千歳を知る」と言ふ題を國の守のぬし、

紀伊守藤の花かさせる春をかぞへてぞ松のよはひは知るべかりける

あるじの君

涼 春雨のにはへる藤にかよれるを齡ある松のたまかとぞ見る

侍従、

仲忠 藤の花そめ來る雨もふりぬれば玉の緒むすぶ松と見えける

少將、

仲頼 汀なる松にかよれる藤の花かけさへ深く思ほゆるかな

良佐、

行政 まとるしていづれ久しと藤の花懸れる松の末の世を見む

國の權守、

藤の花かよれる松のふかみどりひとつ色にぞそむる春雨

右近尉松方、

紫のいとどみだると藤の花うつれる水を人しむすべば

〔考異〕
(一)松と見えけるー松にぞ見えけるー松にぞありける

(二)うつれるーやどれる

〔語釋〕
〔一〕菊宴は左兵衛尉と

左近尉近正

藤の花うつれる水のあはなれば世の間に浪の織りもこそすれ

左近尉時蔭

藤の花色のかぎりに匂ふには春さへをしく思ほゆるかな

國のすけ

紀伊介匂ひ来る年は経ぬれど藤の花今日こそ春をきよはじめけれ

まつりごと人種松

春のいろの汀にほふ花よりも底の藤こそ花と見えけれ

などとして遊び暮らす。其の日のかげ物、やがて設けたり。君だち四所、國の守

權の守まで、青きしらつるばみの唐衣襲ねたる、女の装ひ一具づつ、衛府の尉ど

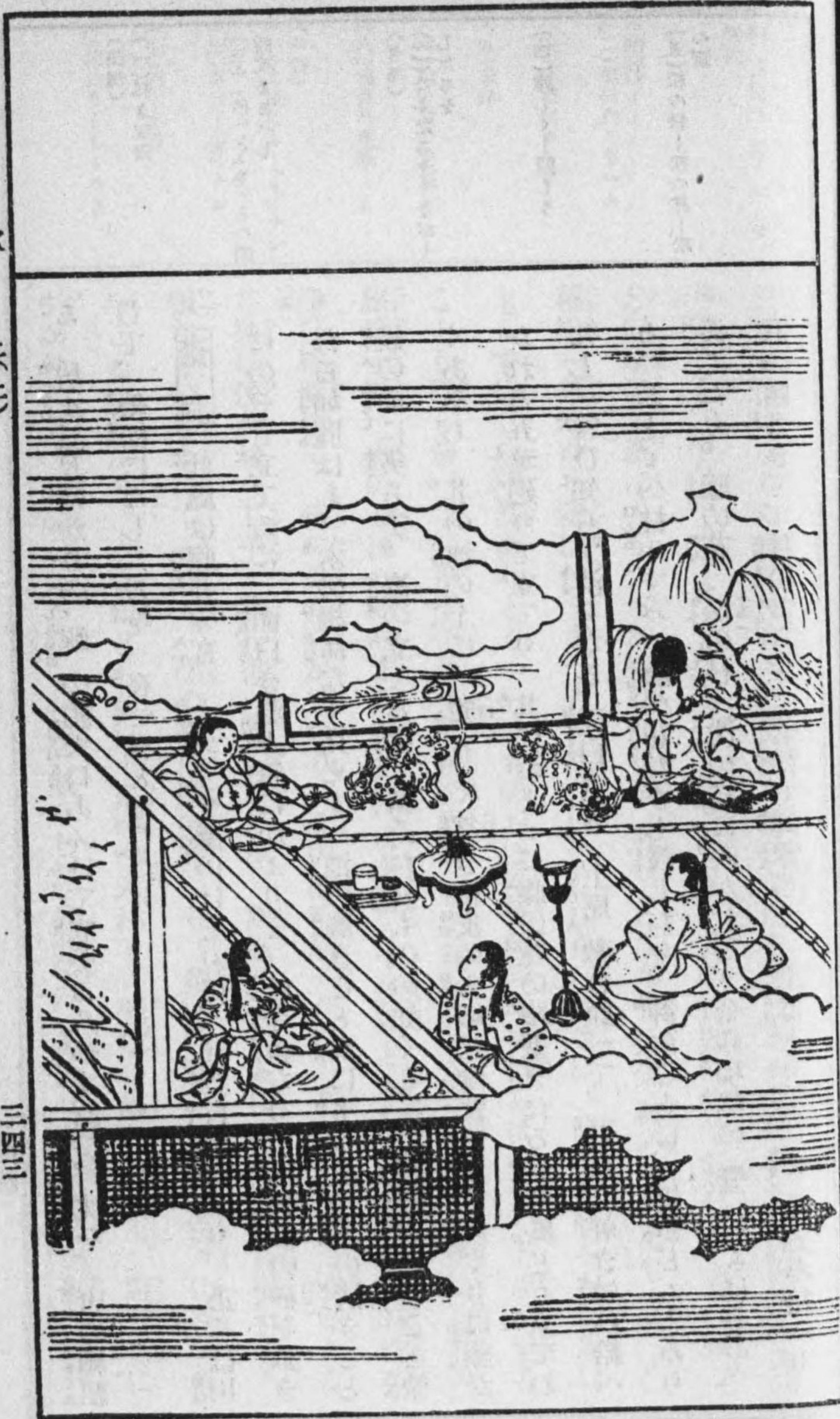
もよりはじめて、國の介には、濃き紫のあはせのほそなが一襲あはせの袴一

具、それより下は、ひとへなる物など、賜はらぬ人なし。夜に入りて、續松まる

〔三〕松明をとぼす也

〔考異〕

〔二〕花よりも花よりも



吹上(上)

(講釋)
(一)細き組紐

(三)「砂」と「を」との間
脱文あるべし

(考異)
(二)なしたるを「ながく
したるを

(四)麗しく麗しう

(五)松の枝—松の林—松
の森

る。居丈三尺ばかりの銀の狛犬口あふけて立てる八つするて、沈を、唐の細組
して、續松になしたるを、夜一夜ともしたり。

畫詞 此處は藤井の宮、大なる巖のほとりに、五葉百木ばかり、あるは川
にのぞき立てるに、面白き藤木毎にかよりて、唯今盛なり。木の下の砂を敷き
たる如麗はし。木の根品なく見えず、池の廣きこと海に劣らず、水の清きこと
鏡の面に劣らず。巖の立てる姿、植ゑたるものの如くして、苔置いたること繁
くあをし。其の池の上に、麗しく高き檜皮の大殿三つたてり。めぐりに藤か
かれる五葉廻りて立てり。其のおとどに藤の花の繪畫きたる御屏風ども立てわ
たし、言ひ知らず清らなる、面白き褥、上席敷き並べて、君だち著き並み給へ
り。おとどの柱のすみ、藤の花かざし渡したり。御前ごとに、折敷どもまるり
渡したり。藤の花、松の枝、沈の枝に咲かせて、金銀瑠璃の簷にくはせて、
歌の題書きて、種松参らす。君だち御覽じて、土器とりて、和歌詠み給へり。

贈物
仲頼等 歸らんとす。

(語釋)
(二)種松自らをいよ

(四)御指圖あらば

(九)未詳

(六)旅行用の竹箱

(八)籠目の意歎

(考異)
(一)土産にも「も」ナシ
(三)等は「等」ナシ
(七)唐—かう
(九)白う—しらう

三月晦日になりぬれば、客人たち歸り給ひなんとす。あるじの君、種松に宣ふ。
涼「人々の歸り給ふべきほどの近うなりぬるを、其のことは物せらるや。弄び物な
どの京の土産にもしつべからむなむ奉らむ、となん思ふを、御心留めてせられよ」
種松、「思ほゆる限は仕うまつらせ侍り。つたなき百姓等は、興ある筋をなむ思ひ
よらす侍らむ。然ありとも、わか君のおほん會釋のすぢ侍らば、易くし思ひ至る
ことも侍らむ」など申す。かくて種松調ぜさするやう、贈物に、一所に銀の
旅籠一掛、山の心ばへ組みするて、それに唐綾うす物など入れて、銀の馬に沈の
のひ鞍置きて、銀の男に引かせたり。沈の檜割籠一かけ、あはせ薰物、沈をおな
じ様に挽かせ、丁子、薰衣香、麝香などを、割籠の子ごとに入れ、薬香などを、
飯などのさまにて入れて、沈の男に擔はせたり。蘇枋の籠一かけ、色々の唐の組
をこめにしたたり。よき絹どもを三十疋づつ入れて、蘇枋の馬に負せて、同じ男に
引かせたり。海のかたを白う、銀散らしたる洲濱に、あはせ薰物を島の形にし。

吹 上(上)

〔語釋〕

(一)「麻結び」歟

(三)「管敷」に「る」の二字なき本もあり

(四)四尺八寸

(五)鞍もほひ

(七)四尺七寸

〔考異〕

(一)物結び一物を結び

(六)たる鞍置き一ナシ

(八)ばかりなる三四一ばかりなりあかき四つ

沈の枝に造花をつけて、島に植ゑあつめて、さやうの物を鹿、鳥につくりする、いとをかしけに、大やかなる黄金の船する、それに色々の絲をむすび、袋におもしろき物結びするて、薬香をつよみて、組して上をつよみて、船に乗せたり。沈の折櫃に、しろかねの鯉、鮒をつくり入れ、銀、黄金、瑠璃などの壺どもに、さやうの物を入れて、あさゆひなどして、にゑ持たるにて、舟子楫取たてて、三所に同じごとしたり。御衣櫃一かけ、清らなる旅のおほん装束ども、「三日に上り給ふべし。一日に一よそひ著給へ」とて三よそひ、色々にしたり。かづけ物ども、女によそひ一襲づつ設けたり。引出物は、侍従に様々の斑馬のたけ八寸ばかり、年六つばかりなる走り馬四つ、蒔繪の鞍橋、豹の皮の下鞍、銀の鐙かけたる鞍置き、黒斑の牛四つ、すゞしの絹を白ながら繋ぎつけたり。鷹四つするたり。白き組の大緒、青きしらつるばみの結びたての總、鈴つけなどあり。鶴四つ、籠、枅いと珍らかなり。少將に、黒鹿毛の馬、たけ七寸ばかりなる四つ。鞍鐙同じ。いか

〔語釋〕

(二)誤あらんか

(三)二十町一八町

(四)誤りあるべし

(五)庄司歟「てうじ」とも「をうし」とも「おうし」とも書けり

〔考異〕
(一)にも同じ一にもまた同じ

めしき黄牛四つ、鷹、鶴、同じ數なり。良佐にも同じ。これはあるじの君の御志。種松が奉る物は、一所に籠二かけ、いかめしき馬に負せたり。白絹入れたり。旅籠二かけに、路のほどの物入れて、よき馬に負せたり。御精米、一所に二百石の船二船づつ、三所に奉る。

〔畫詞〕

これは種松が牟婁の家。四面めぐりて町どの一町、田二十町ばかり、作りめぐりてあり。牛どもに犁かけつよ、男ども持ちて鋤く。筥に飯盛りつつ食へり。離れて、いかめしき河、海のごとして流れたり。家の内四面八町、築土築き入れたり。垣に沿ひて、一面に大なる檜皮ぶきの藏、四十づつ建て、廻り百六十の藏なり。これは北の方の御私物。綾錦、きぬ、綿、絲、かとりなど、棟とひとしう積みて、とり納めぬる倉なり。これは政所。家司ども三十ばかり有り。家ども、預り百人ばかり集まりて、今年のなりはひ、養蠶すべきこと定む。炭焼、木樵などいふ者ども、集まりて奉れり。せうじ量り收む。

(語釋)
(一)不詳
(二)たてま所一本こ
はりや、按ずるに「こ
はくりや」なるべし

(三)標の木歟又象の牙歟

(五)種松をいふ

(七)上は涼をいふなるべし

(八)此邊誤脱あるべし

(九)「たい」は「對」に
て種松の妻をいふ歟

(考異)

(四)量りーナン

(六)みなーナン

男ども五十人ばかり並み居て、臺盤立てて物食ふ。たてま所。鴉飼鷹飼。網す
きなど、日次の贅奉れり。男ども集まりて、俎たてて、魚、鳥つくる。かね
の皿に、北の方の御料とて盛る。御厩によき馬二十づつ、西、東に立てたり。預
りども居て、秣飼はず。側に鷹十ばかりするたり。牛屋によき牛ども十五ばか
り、衣著せつと並べて飼ふ。これは大炊殿。廿石入る鼎もたてて、それが程の
飯もたてて、飯炊ぐ。まさのきに、鐵の脚つきたる槽四つ立て並めて、皆品
品なる飯炊き入れたり。所々の曹司どもの使人、男に櫃もたせて、飯量り受け
たり。間一つに白四つたてたり。白一つに女ども八人立ちて、米精けたり。こ
れは御炊屋。銀の脚鼎。おなじ飯して、北の方、主のおもの炊ぐ。御厨子所
の雑仕女みな擣ち綾著てあり。きぬ著たる男に、油單おほひたる臺するたる行
器もたせて、おもの受く。上の御料のに、ますかへしのおもの三斗、主の御料
八合、たいのおもの一斗五升とて受く。これは酒殿。十石入るばかりの瓶、二

(語釋)
(四)まきは布を搦つ具

(考異)
(一)茶櫃ども一茶櫃ら

(二)など一つき

(三)をりびつーをしき

十ばかりするて酒造りたり。酢、醢、漬物、皆同じごとしたり。贅どもなども
あり。是は作物所。細工人三十人ばかり居て、沈、蘇枋、紫檀どもして、割籠
折敷、卓どもなど色々につくる。轆轤師ども居て、御器ども、おなじ物して挽
く。卓たてて物食ふ。盤するて酒呑みなどす。これは鑄物師の所。男子ども集
り、踏鞴踏み、物の御形、鑄などす。銀、黄金、白蠟などをわかつて、旅籠、透
箱、割籠、餌袋、海、山、龜など、色をつくしてし出だす。こよにも皆物食へ
り。此處は鍛冶屋。銀、黄金の鍛冶廿人ばかり居て、よろづの物、馬、人をり
びつなど造る。此處は織物の所。機物ども多く立てて、織手廿人ばかり居たり。
色々織物ども織る。これは染殿。御たち十人ばかり、女子ども廿人ばかり、
大なる鼎たてて、染草色々に煮る。鹽ども人ごとにするて、手ごとに物とも
染めたり。槽どもに女の子ども下り立ちて、染草洗へり。これは擣物の所。御
たち五十人ばかり、女の子ども卅人ばかりあり。まきまへ毎におきて、手毎に

吹

上(上)

(語釋)

(五)未詳

(七)「まかり」は「みかり」の誤歟

(考異)

(一)朱の一殿枋の

(二)四つ一四つして

(三)別當ども立ち一別當の御たち

(四)主の種松います主の種松のぬしいまそがり

鷹狩

(六)ちむずりくさのちむずりのくさのちむずりのすりくさの

物まきたり。いかめしき碓に、男女立ちて踏めり。これは張物の所。めぐり無き大なる檜皮屋。あこめ、はかま著たる女ども二十人ばかりありて、色々のもの張りたり。これは縫物の所。若き御たち三十人ばかり居て、色々の物縫へり。これは絲の所。御たち廿人ばかり居て、絲繰り合せなど、手ごとにす。織物の絲、組の絲など、竿ごとに練り掛けたり。唐組、新羅組、たどの組など、色々にしたり。これは寢殿。北の方居給へり。朱の臺四つ、かねの坏どもして物まゐる。御たち十人、童四人下仕四人あり。こよは、所々の別當ども立ち並み居て、預りの事ども申したり。こよは主の種松います。御前に、男ども二百人ばかり居て、物言ひなどす。

かくて吹上の宮には、おほん鷹ども試みたまひて人々に奉り給はむ、と思して、忍びて野に出で給ふ。君たち四所は、あかしらつるばみのちむずり、くさの色に絲を染めて、形木の紋を織りつけたるまかりの御衣、折鶴の紋の指貫、綾、搔練の

(語釋)

(一)四尺四寸

(二)鏡、はしたか

(考異)

(三)風に亂れこきませにさよの

(四)心あらば風も花ちらす風も心あり

うちき、あはせの袴、豹の皮の尻鞆ある御佩刀たてまつりて、長四寸ばかりなる赤き馬に、赤きしりがいかけて乗り給ふ。はいたかすゑて、御供の人は、青きしらつるばみ、蘆毛馬に乗りて、御鷹するたり。御設はあるじの君、檜割籠ども清けにて持たせ給へり。かくて、御前の野に鶴、あはせなどする程に、園の花の木ども風に亂れ、鳥ども立ち騒ぐを見て、君たちえ打過ぎ給はで、あるじの君、涼、散りぬればかりの心もわすられて花のみをしく見ゆる春かな

少將

仲頼 春の野の花に心はうつりつと駒のあゆみに身をぞまかする

侍従

仲忠 今日猶野邊にくらさむ花を見て心をやるもゆくにはあらずや

良佐

行政 心あらば花ちらす風も駒なめてわが見る野べにしばしよぎなむ

(語釋)
①玉津島は玉の出る島の意にてもと玉出島と
かきし也

(考異)
②立ちよるーうちよる

③吹上の宮に春を惜む

とておほん割籠まり、鳥すこし取らせて、玉津島に物し給ふほど、所々御設したる人多かり。玉津島に参り給ひて、其處に遊び逍遙し給ひて、かへり給ふとて、少將、

仲頼あかす見てかくのみ歸る今日のみや玉津島てふ名をば知らましあるじの君、

涼年を経て波のよるてふ玉の緒にぬきとどめなむ玉いづる島侍従、

仲忠 覺東な立ちよる浪のなかりせば玉いづる島といかで知らまし良佐、

行政玉いづる島にしあらば海神の浪たちよせよ見る人ある時などとして皆歸り給ひぬ。

三月晦の日になりて、君たち吹上の宮にて春惜み給ふ。櫻色の直衣、躑躅色の下



吹上(上)

〔語釋〕
（一）「うへの」は「うへ」の誤なるよし

がさねなど著給へり。其の日の御饗例のごとしたり。折敷など前々のにあらず。土器はじまりて遊び暮らす。水の上に花散りて浮きたる洲濱に、「春を惜む」といふ題を書きて奉り給ふ。少將、

仲頼水のうへの花の錦のこほるとは春のかたみに人むすべとか侍従、

仲思色々の花のかけのみやどりくる水底よりぞ春はわかるよあるじの君、

涼いつかまた逢ふべき君にたぐへてぞ春の別れも惜まるよかな良佐、

行政時の間に千度あふべき人よりは春のわかれをまづは惜まむ松方、
ゆく春を留むべき方もなかりけり今宵ながらに千代は過ぎなむ

〔語釋〕
（一）涼が友に別れて後のさびしさをいふなるべし

（二）黄色の歎

近正、
春ながら年は暮れつよよろづ代を君とまるとるばものも思はじ時蔭、
いづかたにゆくとも見えぬ春故に惜むこころの空にも有かな種松、

（考異）
（三）賜はす：明かす—賜ひ夜一夜遊びあかす—賜ふ夜一夜遊びあかす

まるとりして惜む春だにあるものをひとり歎かむ君はいかにぞなどとして、今日のかづけ物は、きいろの小袷かさねたる女の装一くだり、御供の人に、同じ色の綾の小袷はかま一くだり、賜はす。かくて遊び明かす。かくて四月一日に、君たち歸り給ふ。吹上の宮より出で立ち給ふ。其の日の饗常よりも心ごとなり。君たち、唐の花紋線にあやの直衣、あやの縹の下襦、うすもりの青色の指貫、白襲のあやのほそなが、一襲づつ奉れり。かくて御折敷前ごにまゐり、卓十、前ごに立て並べて、土器はじまり、御箸くだりぬ。お前に舞

吹 上(上)

〔語釋〕
(一)宿の用意をしに人をやりあきて

(二)約束せぬ夏さへ来るの意

〔考異〕
(三)歸れども一かふるとも一かふれども

(四)著れども一されども

(五)自分は前にも來し事ある故

臺結び、あけばり打ちたり。かよる程に、國の守のぬし、今日出で立ち給ふなりとて、行く先にとまり給ふべき御事設しにつかはして、自らは吹上の宮に、國の司引き牽てまうで給へり。かくて物の音など、惜む手なくかき合せて遊ばしつづ、日高くなりければ、急ぎ給ふ折に、あるじの君土器取りてかく宣ふ、涼語らはぬ夏だにもある今日しもや契りし人の別れゆくらむ

少將

仲頼歸れども君を戀ふべきころもをや著れども夏は薄きたもとを

侍從

仲忠立ちかへり逢はむとぞ思ふ夏衣濡るなる袖も乾きあへぬに

良佐

行政夏衣今日たつ旅のわびしきはをしむ涙ももるとなりけり

松方、「さきくも侍りしかば」などとして、

松方この度は感ひぬべくぞ思はゆる涙はこよにさきに立てども

近正

かくばかりあかす侘しき別路は二つなきにも感ふべきかな

時蔭

空蟬の羽におく露の消えぬまにあふべき君を別てふかな

種松

初聲にわかれをしむ時鳥身をう月とや今日を知るらむ

とて、土器たびぐになりぬ。かよる程に、贈物引出物、設けたる數のごと

奉り給ふ。御馬ども飾り装束きて、關腋のきぬ著たる御厩の人ども、馬一つに

二人つけつと、こま方先に立てて、こま遊びしつと出でて、次々にみな引き並べ

たり。かくて、物負せたる馬どもは、後れて出でて、かよる引出物の折ごとに亂

聲し、舞す。種松が北の方、君たち三所に、幣調じて奉れり。銀の透箱四つづつ、

〔語釋〕
(三)春海翁云、春駒の野に出づつと遊ぶが如く戲ぶるをさふ
(四)鐘太鼓などうちてはやまをさふ

〔考異〕
(一)空蟬一夏蟬

(二)立てて一立ちて

(語釋)
(一)合せ箱物の黒方を炭の形にかためたるものか

(二)「少將には」の下に黒方の入りたる箱に」とあるべし

(考異)
(三)入りたるに「につけたり

(四)ほそなが「ナシ

(五)國の中をこぞりて「國中こぞりて

黒方のすみ一透箱、かねのいさごに銀、黄金を幣にしたる、一透箱。箱のうへに歌一つ、やがて結び目に結び付けさせたり。

少將には、

種松妻今はとてたつとし見れば唐衣袖のうらまで汐の満つかな

侍従には、幣入りたる箱に、

種松妻古郷にかへる幣だにとり憂きを宿にまつらむ人をこそ思へ

良佐には、黄金の砂子入りたるに、

種松妻君がため思ふ心はありそ海の濱のまさごに劣らざりけり

などとして奉る。かづけ物は、赤色に、二藍がさねの唐衣にほそなが、あはせの

袴添へて奉り給ふ。尉どもに白張はかま。かくて、辛うじて出で立ち給ひぬ。

あるじの君、宮の人を引き牽、守のぬし國の中をこぞりて、關のもとまで見送り給へり。

(語釋)
(一)旅籠を負はする馬の形を造りて銀箔を押したるものなるべし

(考異)
(二)鞍枋の籠一海がたの洲濱一すはらの洲濱

(三)あり一取出てたり

(四)入れて一入れつゝ

畫詞

此處は吹上の宮。衣更して竝み居給へり。馬ども引き出で、こま遊び

して出で來たり。鷹どもすゑて、鳥の舞して出で來たり。銀の旅籠馬のなかに

人入れて、歩ませて引き出でたり。遣水に黄金の船ども漕ぎつらねて、船遊

して、御衣櫃、蘇枋の籠など御前に取り出でたり。透箱どもあり。これは君だ

ち直衣姿にて、乗りつらねて出で立ち給へり。此處は關のもと。國の守のぬし、

設し給へり。君だちに沈の打敷二十、御供の人に蘇枋の卓ども立て竝べて、物

まゐりたり。かづけ物、女よそひ一くだりづつかづけ奉り、清らなる衣櫃

一つに、衣入れて奉り給ふ。

其處より守のぬし歸り給ひなむとする折に、都鳥遠き聲に聞ゆ。少將、

仲頼名にしおはど關をもこえじ都鳥聲するかたを百敷にして

侍従、

仲思いとどしく越えうきものを都鳥關のこなたに聞くが嬉しさ

(語釋)
(一)「たなはなれたる」は「柵橋わたる」なるべし。柵橋は小く短きものなれば駒が渡るに時を賢さぬ也

(三)「駒の足折れ前の柵橋」などと古歌によめる意也

(四)山里は忠保自身の家をいふ

仲頼の舅忠保歸京の人々を愛す

(考異)
(一)たなはなれたる「たなはしりたる

良佐、こなたを惜みて、
行政夕暮にたなはなれたる駒よりもなみだの川ぞ早くゆきける
あるじの君

涼行く人の駒もとどめぬ柵橋は惜み留めたるかひもなきかな
守のぬし、

紀伊守泣きたむる涙の川の瀧つ瀬も急ぐ駒にはおくれぬるかな
など互に惜みかはして、關より別れて、京の人は上り、田舎の人は歸り給ふ。

かくて四月四日ばかり、夜更けてなむ宮内卿殿におはし著きたりける。宮内卿の主、御饗よろしうし給へり。君たちには黒楸の卓二つ、うすものの表、尉どもには厚朴の木の卓すゑわたして、あるじの主土器取りて、忠保、如何に瀧のほとりの貝、甲らに、山里の草木を聞食し比ぶらむ「少將、仲頼、されどこれをのみなむ」と

山里にこのめをおきて別れては瀧のほとりにかひぞなかりし
宮内卿の主、

(語釋)
(一)このめ—木の芽、此の妻、かひ—貝、効

(二)吹上より貰ひ來し品を分けて贈る也

(三)各贈物して

(四)正頼

(五)細かなる物

忠保木を暗みふたつときらぬ枝なればあかすあはれと思ふこのめぞ
など聞ゆ。少將、宮内卿の主に、沈の割籠、牛など奉り給ふ。侍従、良佐など、志、皆して、侍従は桂殿へ、良佐など別れぬ。
かくて此の人々、紀伊國より持ていきましたる物、興あるは人々に奉り給ふ。少將、黄金の船は内裏に、銀の旅籠馬は左大將殿に、割籠は宮内卿に、北の方には、透箱よりはじめて若干のこまけの物、皆取らせ給ふ。侍従、銀の馬は父大將殿に、割籠は嵯峨の院に、透箱よりはじめてこまけの物は北の方に、船とかづけ物の中に、濟らなる物は、思ふ心ありてまだ持たり。良佐は、妻も子も親もなければ、船は東宮に、旅籠馬は嵯峨の院に、割籠は后宮に、透箱よりはじめこまけの物、まだ持たり。

● 仲忠等正頼に吹上の有様を語る。贈物を所々に願つ。正頼夫婦實忠を憐む

(語釋)

(一) 正頼

(三) 令朽の意

(考異)

(二) 聞ゆー聞え給ふ

(四) 此のすき者ー此の三人のすき者

(五) またーまろり

かくて左大將殿には、大殿中のおとどにわたり給ひて、あて宮に、琴の御琴彈かせ奉り給ひて、聞召し、御方々の君だちわたり給ひなどしたる折に、「左兵衛佐行政侍從仲忠、少將仲頼さふらふ」と聞ゆ。おとど、正頼「久しう音せざりつる遊びくたしつべかめり。此のすき者ども、何方ものしたりつらむ、此の一月ばかり見えざりつるは」など宣ひて、正頼「此處にて逢はむかし」とて簀子に御座しかせて、正頼「なほ此處に」と召し入れて逢ひ給へり。正頼「日頃内裏にも参り給はず、此のわたりにもまた物し給はざりつれば、いぶかり申しつるになむ」少將、仲頼「甚だかしこし。粉河に願はたさむと思ふ給へて、紀伊國の方にまかりたりしを、怪しき人に見給へつきて、えまう上り來ざりつるを、辛うじてなむ、昨夜まう上り來し」おとど、正頼「や、誰ぞや。など覺えぬ」仲頼「彼の國のまつりごと人に侍りつる神南備の種松といふ男の孫に物し給ふ源氏、たゞ粉河の道のほとりになむ住み給へる。其處に府のまつりごと人松方が侍りしを見つけ侍りて、まかり寄りて

(語釋)
(二) 吹上の贈物を見する也

(五) 「すぐれたる」の意なるべし

(六) 非常の相違あるべし即ち此點だけは仲忠に劣れるならん

(八) 縁較べ歌

(考異)
(二) 一日二日ー二日

(三) こよなくーいとけだかくーいとけだかく

(四) ものをーものぞ

(七) なからむーなからむにーなからむぞ

侍りしに、かの君、一日二日ばかり、馬牛も飼ひやすめてまう上れ」など留め給ひしかば、とまりて見給へしに、いはゆる西方淨土に生れたる様になむ。四面八町の所を、金銀、瑠璃、瑠璃、瑠璃して造り磨き、めぐりには仙洞の桃咲かず、孔雀鸚鵡鳴かぬばかりにてなむ住み侍り給ふ。取り申さむ方も思ほえずなむ侍りしかば、たゞ彼處の様いさよか御覽せさせむとて、彼處の使にて侍り」とて御覽せさす。おとど、正頼「いと興あることかな。然聞きよ。神南備の藏人の腹に生れ給ふ君ありとは。彼の藏人はこよなく勞ありし人なり。父こそ下臈なれ、子は有識にて、最と心憎かりしものを、此の頃ぞ聞かざりつる。如何様にか生ひ出で給ひたる」仲頼「いと不便なる人柄なり。仲忠の朝臣と等しくなむ、かたち、心、身の才侍る」おとど、正頼「琴ばかりはこよなからむ」仲頼「それも感じたる手侍るなり。侍從朝臣といと較べしてそれをなむ彈き侍らすなりにし」おとど、正頼「誰々か物せられたりし」仲頼「仲忠、行政、近正、時蔭、村蔭、康頼、貞松、員成、左

(語釋)
 (一)二藤の思立ちて
 (三)思ふまゝの生活
 (六)世界に十六の大國五百の小國無數の粟散國ありとは佛教の説なり。粟散國はこぼれたる粟粒の如き小國

(考異)
 (二)ありけれな「な」ナ
 (四)思しき「を」しき
 (五)人にも「し」ナシ
 (七)木の枝を造りては「物をつくしては」
 (八)とて具したる御馬「とて具したるとて御馬」とて人して御馬

右の府の官人ものよふどもの中にも、選びてなむまかり下りて侍りし「おとど、正頼」有る限にこそはあなれ。なほかしこき志ありて物せられたるにこそありけれな。然る所に、斯かるどち集はれて、如何なることありけむ。國の中には、國王こそ思しき住居はし給ふらめ。其れだに斯くてはえおはしまさじを、有難き人にも物し給ふべきかな」仲頼「種松は、十六の大國よりはじめて、粟散國に至るまで、貨を貯へて侍るものなり。それが申しよことは、種松が貨を、此の君につくし奉りてむとするに、一つの木の枝を造りては、二三千の枝出で來。山の末、岩の上にも、此の君の御爲に落せる種は、一つに一二斗づつなむ取り侍る」となむ申し侍る。彼の君の、京の土産にとて賜へるもの御覽せさせむ」とて、具したる御馬二つ、鷹二つ、銀の馬、旅籠負せながら、中に人入れて歩ませて御覽せさせ。おとど、旅籠馬をいと興ありと御覽じて、方々御掣の君だち請じ出でたてまつりて、御子どもの君だち並めする奉り見せ給ふ。少將、仲頼「それは、彼より賜

(語釋)
 (二)武官になりて君等の御供をして行き見て見たし
 (三)「たり」は「たる」なるべし
 (五)正頼
 (六)仲澄
 (七)鶴班
 (考異)
 (一)と申ナシナシ
 (四)入れ文「入れつ」文
 (八)二ツ一ツ

はれる物の、千分が一つなり。かやうの船、割籠、透箱などして、此の三人の人になむ賜へりし。これ等をばさる物にて、まめやかなる物など侍りき。何心もなくまかり出で立ち侍りて、思ほえぬ長者になり侍りてなむまう上り來たる」と申す。おとど打笑ひ給ひて、正頼「衛府づかさにてまうでて見ばや」など宣ふ程に、侍従、良佐などは、内裏、東宮、嵯峨の院などに是等御覽せさせに參るとて、使してなむ。行政、右大辨の君よりはじめ奉りて、馬、牛二つ、鷹一つづつ奉りたり。透箱、大宮の御方に、かづきたりし女の装どもは、あて宮の御方の人々に、箱にたよみ入れ、文書い付けてぞおこせたる。下仕ばらには、縫はぬ衣など、人ごとに取らせたり。仲忠は大殿に車牛二つ、馬二つ、侍従の君につるぶちなる馬の長八寸ばかりなる一つ、置口の衣箱二つに、あるが中に清らなる女のおよそひくたり覺み入れ、一つには、うるはしき絹、あやなど入れて、孫王の君に志し、黄金のふねに物入れながら、かく聞えてあて宮に奉る。

(語釋)
一舟を自身にたとへて
悪徳の意をはのめかした
る也

(四)使に言ひ付くる也

(七)仲忠より再應上こし
たるものを返すは情なき
様なりとて

(考異)
一海の一海に

(三)使に一使には

(五)かへる一かへる

(六)奉れり一奉りて

仲忠あると海のとまりも知らぬ浮舟に浪のしづけき浦もあらなむ

とて奉り給へり。あて宮、君たちなど、「あり難く興ある物かな」とてのよしり

て見給ふ。かくて集りて見のよしりて、あて宮持たればやと思へど、わざとある寶

寶しき物なり」とて使に、白張一かさね、はかま一具賜ひて、かく宣ひて遣は

す。

あて宮浪たてばよらぬ泊もなき舟に風のしづまる浦やなからむ

とてかへし遣はしたれば、仲忠いと心憂しと思ひて、仲忠かう聞えて御返事も賜は

らで來ね」とて奉る。

仲忠さもこそは嵐の風は吹きたよめつらき名残にかへる舟かな

とて奉れり、使歸りぬれば、情なき様にもあり、とて返し給はず。君たち集まり

て騒ぎ給ふこと限なし。女御の君よりはじめ奉りて、小君たちまで、壺、折櫃

袋、一つづつ奉り給ふ。

大將のおとどは、此の人々の奉りたる物どもを、聲の君たちに、馬、鷹一つづ

つ奉り給ふ。かよる序におとど、宮に、正頼「源宰相に久しう對面せぬかな」宮、

大宮「此の三月一日ごろに、御前の花見給へむとてまかり出でて、夜更けてまかり

歸り給へりしより、惱み給ふことありて、まかり歩きもせず、内裏より召あれど

えまらで一所になむ籠り侍る」おとど、正頼「いとほしき事かな。え承らざりけ

り。此の頃見え給はねば、故郷にや物し給ふらむ、となむ思ひ侍りし」などて、仲

頼に女よそひ一くだり、馬引き、鷹するたる人に、白張はかま賜ひ、仲忠、行

政等がつかひにも、祿賜ふ。北のおとどに透箱持て参れる行政がつかひに、摺裳

一かさね賜ひなどす。仲頼は内裏に急ぎ参りぬ。

(語釋)

(一)正頼

(二)實忠

(六)「などとて」なるべし

(考異)

(三)内裏一殿

(四)一所一侍る所

(五)侍る一侍ると聞えつ

（五）宮の右馬一宮の御子
右馬の
（三）出だし立て一出て立
ち
（四）兵衛は近衛の誤にて
中將は正頼の三男祐澄な
るべし
（考異）
（二）正頼邸
（一）正頼邸
●祐澄行政・賀茂祭の
勅使に立つ。大宮見物
（語釋）

祭の使

梗概

●祐澄行政賀茂祭の勅使に立つ。大宮見物。●懸想人等歌を
て宮に贈る。●五月の節。正頼邸の騎射打毬競馬。季明來會して
實忠の爲に婚を求む。●懸想人等歌をあて宮に贈る。●正頼の
家の納涼會。正頼兼雅の桂の家にて神樂を行はんとす。●桂の家
の夏神樂。●懸想人等歌をあて宮に贈る。●三香高基宮内の君
を招きてあて宮を獲んことを謀る。●遊野眞菅殿守を招きてあて
宮を獲んことを謀る。●藤英の苦學。●正頼の家の七夕。●
試策。大學の學生等正頼の邸に參る。藤英はじめて正頼に識らる。
藤英あて宮に懸想す。●懸想人等歌をあて宮に贈る。●あて宮
月夜に琴を弾く。仲忠孫王の君を介して歌をあて宮に贈る。●涼、
仲澄等歌をあて宮に贈る。

斯くて、殿より祭の使出だし立て給ふ。兵衛府の使には中將君、内藏寮の使には
内藏頭兼けたる行政、馬寮の使には式部卿の宮の右馬の君ぞ出立ち給ふ。あるじ
の大殿この三所の使をいたはり出だし給ふ。みな出立ち給ふに、父大殿、使の中
將にかざし奉り給ふとて、

(語釋)
 (一)「まつら」を「まつ」の
 と書ける本もあり。巨勢
 氏曰くかつらを祭かつら
 と書きたりしを又まつら
 かつらと誤りしなるべし

(二)兼雅

(三)飾り馬

(四)祐澄の乗料

(五)手にもつ持物

(六)あて宮の事をきかせ
たる也

(八)正頼の妻祐澄等の母

(考異)
(七)「折れば」歟

正頼二葉なるまつらかづらと見しものをかざし折るまでなりにける哉
 使の中將、

祐澄もと見れば高きかづらも今日よりや枝劣りすと人のいふらむ

とて出で給ふに、桂より右大將のぬし、よき御馬二つ、一つはかざり、一つは設

の御馬にて、舍人卅人、えも言はず装束かせて、取物せさせて、かねの枝に小き

壺を付けて、それに、桂川の水を入れて、仲忠して、

仲忠かざしとる袖のぬるとは白波の桂がはより折れるなりけり

これにさへ怪しう。

と宣へり。使の君、かく聞え給ふ。

祐澄みなかみにかざしつるかな桂川今日ひとなみの心地のみして

けふは暮にのみなむ。

と聞えて、出立ち給ひぬ。大宮、使の君見給はむとて、車十ばかりして出立ち給



祭の使

(語釋) (一)春海翁曰、供人陪從を手振といふ事あり

(三)あて宮を葵にたとへたり

(四)實忠

(五)あて宮の近處

● 懸想人等歌をあて宮に贈る。

(考異) (一)給へるに給ひつる

ひぬ

〔畫詞〕 大將殿の南のおとどに、使三所著き給へり。垣下に御子四所、上達部五所、四位、五位あはせて六十人ばかりあり。おほん馬ども引き立て、手振ども立ち竝みたり。一條の大路に、物見車ども數知らず。殿のおほん車ども、ものしたり。榻ども立てつと、四位五位まき散らしたる如立てり。

かくて、物御覽じてかへり給へるに、東宮よりきこえ給へり、

東宮今年より摘むべきものかちはやぶる賀茂の祭にかさす葵は

と聞え給ふ。

例の宰相、三月ばかりに、「まろにこそ宣はざらめ、君だちと物宣ふをだに聞かせ給へ」など切に宣ひければ、近き所にするて、御琴弾かさせたまつり、物言はせたてまつりなどしけるを聞きてより、思ひ入りて臥しにしまよに、物おほえねど斯く聞えたり。

實忠おく山のふるすを出でて時鳥旅寐に年ぞあまた經にける

吾が君や、斯うてだに今は聞えさすまじきこそいみじけれ。

など聞えたり。あて宮、

夏ばかりうひだちすなる時鳥巢にはかへらぬ年にもあるかな

兵部卿の宮より、

ぬるみゆく板井の清水手にくみてなほこそたのめ底は知らねど

あて宮、

あだ人のいふにつけてぞ夏ごろもうすき心もおもひ知らるよ

平中納言、

正明いつとても侘しきものを時鳥身をうの花のいとど咲くかな

あて宮、

かひもなき巢をたのめばや時鳥身をうの花の咲くも見ゆらむ

(語釋)
(二)古今集「筑波根のこ
のもかのもに蔭はあれど
君が御蔭にます蔭はな
し」

(考異)
(一)心もなく「も」ナシ

(三)こそあんめれ「こそ
はあんめれ

仲忠、空蟬の身にかく書きつけて奉る、

仲忠ことのほの露をのみまつ空蟬も空しきものと見るが侘し
まして如何ならん。

と聞えたり。あて宮、

ことのはのはかなき露と思へどもわがたまづさと人もこそ見れ
と思ふになむ聞えにくき。

と聞え給へり。紀伊國の吹上の君の御許より、

涼いかでと思ひけるを、人さへ語り聞かせ給へれば、しづ心もなく覺えければ、
あるが中に才ある童して、かく聞え奉る。

おほつかないかで心をつくばねのます蔭なしと嘆くなるらむ
かつはあさましくなむ。

と聞えたまへり。大將のおと見給ひて、正頼「たど今のよしる人にこそあんめれ。
(三)

(語釋)
(六)あて宮の難にも隨は
ぬをいふなるべし

(考異)
(一)ふるに「けり」ふる
ぞ袖はぬれける

(二)御返し「御返ごと

(三)慰む「わする」

(四)給へれど御返しなし
「給へり

(五)添へて「見て

上達部になりぬべき君なめれば、つれなく言ひくたしたるなめりかし」など宣ひ
て御返しなし。

三の御子、

忠康ながめする五月雨よりも嘆きつゝ月日のふるに袖はぬれけり
と聞え給へり。御返しなし。仲頼

思ふことなすこそ神もかたからめしばしなくさむ心つけなむ
行政、

いふごとにいらへぬ人はつらからで思ひそめたる身をぞ恨むる
と聞え給へれど御返しなし。

五月五日つとめて、菖蒲の長く白き根を添へて、侍従の君きこえ給ふ。
仲澄、涙川汀のあやめ引くときは人知れぬねのあらはるよかな

ときこえ給へれど聞入れたまはず。侍従の君、仲澄「かく思したるを、思ふやうな
(六)

(語釋)
(三)我は君の同胞なるものを

(四)大臣上

五月の節、正頼郎の騎射、打毬、競馬、季明來會して實忠の爲に婚を求む。

(五)髪のとめに用ふるかんざし

(考異)
(一)ければ一けれど

(二)いかにうみじく

る御心とうしろやすければ返すくおもひ忍ぶれど、えあるまじければこそ、死ぬる身と思ふ給へて聞ゆれ。こよに聞えたらむことは人の知るべくもあらぬを、いみじうこそおはすれ」と泣くく聞え給へば、あて宮うち笑ひ給ひて、あて宮「など斯くのみは宣ふぞ。誰と思したるぞ」など宣ふ。

かくてその日の御節供、よき御庄ある國々の受領に宛てられたり。女君、御子たちまでは近江守、中のおとどには伊勢守、北の大殿は紀伊守、御掣七所の御前には大和山城の守、あなたの北の方の御前には播磨介、男君たちの御前には備前介、臨時の客人には丹波守と宛てられたり。その日になりて、まづ西のおとどに近江守、浅香の打敷二十づつ、例のごとして、二十人のまうち君たち、取りて参る。髪長にあまり、装束あざやかなる下づかへ、笄子、元結して、二十人出で来て、お前に参る。あか色の上のきぬ、縁のはかま著たるうなる子に、綾がさねの装したる大人参りすう。親王たちのお前ごとに参りする臺二十づつ、又二十人の童

(語釋)
(二)馬は脚を主とするものなれば馬を檢するを脚を見るといふ也

(三)主任の男どもをいふなるべし

(四)左右に分けて競争させて

(五)左大辨は正頼の長子忠清

(考異)
(一)おほん馬—おほん馬

を出して、興ある薬玉を賜ふ。二十人のまうち君たち、御階のもとに立ちて舞踏したり。かくて方々男君たちのお前ごとに参りたり。

かくて御前近く、四町とほりて、馬場池のほとりにあり。御厩、西東として、別當預り、寄人どもおほくて、おほん馬ども、十づつ、立てて、飼はせたまふ。今日、脚御覽ぞんとて、職事よりはじめて、乗尻装束して、御馬左右とひかせて参りたり。おとど、正頼「男どもはひ乗りて試みよ」と宣ふ。御掣ども、數のごとおは

します。君だち聞え給ふ。「この御馬ども、おなじくは手番して較べばや」と宣ひて、一番に式部卿の宮、右のおとど、くらへ給ふ。おとど勝ち給ふ。二番に、中務の親王、あるじのおとど、おとど勝ち給ふ。三番に、三の御子、民部卿。御子勝ち給ふ。四番に、四の御子、左衛門督。督勝ち給ふ。五番に、五の御子、藤宰相。御子勝ち給ふ。六番に、六の御子、左大辨。御子勝ち給ふ。七番に、兵衛督、右衛門佐のきみ。督の君から給ふ。八番に、兵衛佐、兵部少輔。佐勝。九番に、式部丞、侍

從。侍從から給ふ。十番に大夫の君、右衛門尉。君勝つ。

(語釋)
(一)「などて」は「などとて」なるべし

(三)騎射

(四)右方左方と別れて

(五)兼雅

(七)正頼郎

(考異)
(二)中少將—中將少將
(六)宣はむとて—給はむとて

かよる程におとどに左の馬寮の檢校申し給ふ。「明日、御つかさの手番なり。くらべの宮人ごとに賜ふべき御馬の脚、今日御覽せさせむ」とて御馬どもを牽かせて、馬の頭、亮、下部ら、左近の中將、少將もののふしら、引きて参りたり。おとど、正頼「興あるわざかな。内裏に聞召さましかば、など思ひつるに」などて、帷ども打ちて、頭よりはじめて、つぎ、中少將、馬の頭、亮、著き並み、馬寮の御馬に、左近尉よりはじめて、はひ乗りつと、馬弓仕うまつる。馬弓はてて、舍人ども、駒方わきて舞ひあそぶ。あるじのおとど、大なる毬を舍人どもの中に投げ出だし給ふ。舍人ども毬杖をもちて遊びて打ち、勝ちては舞ひあそぶ。御馬ども、池に牽きたてて冷し、秣かひなどするに右大將の主、手番宣はむとて馬場に著い給へりけるを、この殿に左近の馬づかさ参りぬ、ときこしめして、兼雅「興あることかな」とて馬場より、亮たちよりはじめて、もののふしまで、右の馬づかさ引き牽て、亮

(語釋)
(一)駒の形したる物を持つて舞ふこと

(二)「おとど」は行文なるとし

たちよりはじめて、馬にのりて、大將のぬしの御車の前に、こまがた舞はせつと、あそびて物し給ふを、大將のおとど聞召して、正頼「雅樂寮の樂の近く聞ゆるかな。祐澄が笙にこそあなれ。然や、右のつかさの幾多の者ども、引き連れて來るならむかし。見よや」と宣ふ。牛飼のあづかり、「大將殿、おとどの右近の馬づかさ、引き連れておはしますなりけり」と申す。おとど、正頼「切に興あることかな」とて御佩刀の緒したよかに結び垂れ、御衣のしり、走り引きて、笙の御笛とりて、左の馬づかさひきて、限なくあそびて出て給ふ。右を左の馬づかさ見つけて、くづれ下りぬ。あそびて、左右見合せて、廣くよき大路に、若くさかりなる大將たち、左右の近衛づかさ、馬づかさを牽きて、あそびて、大殿へ入り給ふ。夕影、切なること限なし。東の御階より左のつかさ、西の階より右のつかさ、ひとしく見合せてのほり給ひて、右南向に著き給ひぬ。御前ごとに御卓参りぬ。御土器はじまり、おほむ箸下りぬ。

(語釋)
(一)「などとて」なるべし

(三)誤あらんか

(四)行政をいふ歟

(八)内侍料歟

(考異)
(二)客人一かく

(五)なご一と

(六)大將殿「殿」ナシ

(七)客人一かく

かよる事内裏に聞しめして、朱雀「俄にいかにすらむ」などて右近の藏人をして、
后宫に、朱雀「左大將の、俄なる客人得たなるを、とぶらひになむ遣はす。設の物
さふらはど、すこし賜はりて物せむ」と聞え給へれば長もちの御辛櫃一よろひに、
女のおそひ百くだり、白張はかま添へて、大桂とかさね入れて、后「斯くよもあら
ぬなむ残りたりける」とて奉れ給へり。帝内藏寮のきぬ三百匹、御辛櫃に入れ
させ、つかさの御みぞ櫃十に入れ、藏人所の御くだ物、櫃十に積みて大將に賜は
り給はむとするに、殿上、藏人一人もなし。朱雀「たゞ今までありつる男どもの、
かしこへ去にけるかな。すけは名高き人にてある」など宣ひて、藏人の兵衛佐行
政を召して、大將殿に斯くいひ遣はす。
朱雀「俄なる客人ものせられたなるを、饗のことなどを如何にとなむ。引出物など
も、乏しくば、ないしれうなども數多ものせらるらむを、御心にまかせて物
せられよ。」

(語釋)
(二)正頼を訪問せよと季
明正明二人仰せある也

(三)春海翁曰、駿馬の左
右に人を分ち賞を組み方
分ければ其の賞檢する人
を賞使といふ

(四)物使の來れるをあへ
しちよにまぎれて季明正
明の來るを知らざる也

(考異)

(一)内裏に一ナシ

とて、土器にかく書きつけ給ふ。
朱雀所せき身は餘所なれど遊ぶなる宿に心をわれもやるかな
とて遣はすに、左のおとど、平中納言、夜に入るまで内裏にさふらひ給ふを、朱雀「大
將の朝臣とぶらはるべきものなり」と仰せらる。諸聲におほん答してまかで給ふ。
御使の藏人、奉れ給ふものを持て連ねて、大將殿に参る。おとど御土器見給ひ
て、驚きかしこまり給ふ。とうじの藏人を階にするて、下りて舞踏して、大桂か
づけ給ひて、かしこまり申し給ふ。
正頼雲井よりふる白玉を袖にいれてみる人さへぞ心ゆきぬる
など奏せさせ給ふ。
藏人参りて左のおとど、平中納言つらねて入り給ふを、え知り給はず。御前の御
松明ともしたる兵衛尉ども、にはかに入るに、おどろき見給ふ。右のおとど、式部
卿の御子と、くづれ下り給ふ。左のおとど、季明「更に何か」とて上りて著き給ひぬ。

(語釋)
(二)相伴役

(三)甲乙と分れ居る也

(五)馬の出発點

(六)これは正頼の大男兼
澄なるべければ兵部少輔
なるべし

(考異)

(一)夜も「もしナシ

(四)竝みたりー竝み居た

おとど、正頼「いとも畏く、夜もふかくなりぬるに、渡りおはしましたるをなむ」
 左のおとど、季明「けさ、内裏に参りて、今までさぶらひつるを、ある人の、「かく
 近衛の馬づさかの諸卿集はれたり」と奏しつれば、上おどろかせ給ひて、藏人奉
 り給ふべきに垣下にまゐれ、と仰せられつれば」など宣ふ。あるじのおとど、悦
 びかしこまり給ふ。かくて、左右の馬づかさ、御馬、左右大將黨にておはし
 ます。上達部御子たち、方別きてくらべ給ふ。左の乗尻は、右近尉よりはじめて
 もののふしまで、逸物をえらび、右の乗尻は左近尉までえらび、西東争ひて、
 馬づかさ著き竝みるたり。おほん松明ともしたること、邸より南に、御前にむき
 て、馬出より馬留まで隙なく、褐の衣著たる男どもともしたり。皆これは兵部卿
 の男どもなり。(五)邸より北の御まへにあたりては、兵衛尉よりはじめて、宮の帯刀
 まで、長とよのひたるを選びて、上より下までともしたり。皆乗りつらねて、埒
 よりのほる。札結ひて、皆ひき立てて、左右亂聲して、勝負に樂の舞す。(六)兵部丞か



